956
837

國語夜話會編

新小學國語讀本指導書

卷六

合名會社 北海出版社發行

0049657000

0049657-000

特229-835

新小学国語読本指導書

国語夜話会・編

北海出版社

巻6

昭和10

AHJ

特229
835

國語夜話會編

新學國語讀本指導書 卷六

合名會社 北海出版社發行

國語教育研究會藏

序に代へて——本書の組織

本指導書は、吾々數人が初等國語教壇のよき實踐者たるべく十有五年の永きに亘つて研究的會合を倒して來たその成果の一つであつて、今彼「小學國語讀本」の改版と共に刊行を續くるものである。幸にして世の初等國語教壇人のよき伴侶たり得ば幸甚である。

本書は先づ前篇讀本指導概說、後篇讀本指導各說、及び附錄の三大別にし、前篇では小學國語讀本卷六の概觀を試み、尋三讀方の指導過程と卷六指導要旨とを掲げ。後篇各說への總論たらしめた。

後篇　讀本指導各說は、「一、神武天皇」より「二十五、東鄕元帥」に至る二十五課を各課別に指導計畫を細說したもので、大體次の要領で記述した。

一、教　材　所謂教材そのもの〻研究で、指導の出發點を明にした。之を教材・出典・資料・新出文字及表記・難語句・文章・挿繪・教具の八項目に分けて解說した。

二、教材觀　本書の最も主力を注いだ項目である。

所謂教材のための教材觀といふだけでなしに、(1)社會、國語、教育の廣い見地から教材の文化的位置を明かにし、(2)他面文章の機構上から、教材の特異性を研究し、以て指導態度の確立に遺憾なからしめ樣とした。

三、指導觀　教材觀を今一度兒童の立場において檢討し、教壇上の焦點を定めた。

四、指導の實際　指導要旨に基づき教授時間に指導案を詳記した。

五、練　習　練習文、家庭學習、考査問題を掲げ、指導効果の測定を適切ならしめ樣とした。

附錄の教材一覽、新出漢字表の中前者は教材の相關的位置を明にして總合的研究に便するため、後者は至難の漢字練習を容易ならしむるために掲げたものである。

昭和十年九月

國讀夜話會

新小學國語讀本指導書　卷六　目次

前篇　讀本指導概說

第一章　尋三讀方の指導過程……一

第二章　小學國語讀本卷六概觀……七

一、編纂の趣意……七

二、教材の選擇……九

三、体裁に就て……一一

四、分量に就て……一一

五、文章に就て……一一

六、文字及表記に就て……一二

七、符號に就て……一四

八、挿繪に就て……一四

第三章　小學國語讀本卷六各課指導要旨……一四

後篇　讀本指導各說

一　神武天皇……一
二　祭に招く……一七
三　村祭……二五
四　磁石……三三
五　稻刈……四三
六　日本武尊……五三
七　山羊……六九
八　林の中……七七
九　僕の望遠鏡……八三
十　神風……九七
十一　軍旗……一一〇
十二　牛かへ……一一七
十三　笑話……一二五
十四　千早城……一三三
十五　たこ……一四五
十六　雪の夜……一五〇
十七　雀の宿……一五九
十八　火事……一六七
十九　梅……一七七
二十　小さい溫床……一八二
二十一　雪舟……一九二
二十二　潛水艦……二〇三
二十三　春の雨……二一六
二十四　東京……二二二
二十五　東鄕元帥……二三八

附錄

新小學國語讀本指導書　卷六　目次

第一　教材別一覽……一
一、散文教材……一
(1)　主として生活に取材したもの……一
(2)　主として物語に取材したもの……三
二、韻文教材……三
第二　新出漢字字畫別一覽……五

前篇　讀本指導概說

第一章　尋三讀方の指導過程
第二章　小學國語讀本卷六概觀
一、編纂の趣意　二、教材の選擇
三、體裁に就て　四、分量に就て
五、文章に就て　六、文字及表記に就て
七、符號に就て　八、挿繪に就て
第三章　小學國語讀本卷六各課指導要旨

前篇　讀本指導概說

第一章　尋三讀方の指導過程

本書前卷に於て、「指導方針」を明かにした我々は、玆にその實踐面として、「指導過程」を概括して見ようと思ふ。從つて本節は、前卷「指導方針」の實踐面であると共に、後篇「讀本指導各說」の概括であると見てよい。

指導過程として、樣々な形式・段階を考へることは出來るが、我々は最も普遍的で、實際の教壇に於て最も効果的な形を採つた積りである。

最も普遍的といふのは、形象理論とか、解釋學とかいふものを研究しなければ理解出來得ないといふもので無く、苟くも讀方の教壇に立つ人にとつては、誰しもに理解されることを意味するものであり、最も効果的といふのは、兒童讀解の心理に適合し、然も教授者その人の工夫によつて生々と實踐出來得るものであることを意味する。

此の意味に於て、本書を使用せらるゝ方は、鄕土に即し、學級の兒童に即して、眞に本書を活用して戴き度いのであるが、本書の活用に當つては、本書に採つてある指導過程の大體の意義を了解されることが極めて重要な事であらうと思ふ。

故に本節に於ては、本書に採つてある指導過程の意義及び各過程に於ける重要な注意事項を略述してみようと思ふ。

本書の指導過程は、後篇に於ても明かであるやうに、通讀・話合・通讀・深究・通讀・練習の六段階を踏んでゐる。

之を普通採られてゐる直觀・反省・統一の三過程から顧みると、通讀と話合は直觀、次の通讀が直觀から反省への展開面となつて、深究が反省となり、最後の通讀が統一に當る。然も讀方は、一面に於て文字・語句・語法の習得といふ重要な任務を持つてゐるので、特にこの方面の指導として、練習といふ過程を置いたのである。然してこの六つの段階は、恐らく何人が取扱ふにしても、特殊の場合を除いては、當然踏むべきものであつて、之がまた萬人が文章を精讀する場合に、無意識の裡に通つてゐる過程であると思ふ。

(一)通　　讀

通讀を三段階に區分する。

最初の通讀は、所謂「素讀」であつて、兒童が文字面を追つて讀み下し、自己の發見を樹てるための讀みである。

勿論、文章の難易により、兒童の如何によつて、或る場合には一讀直ちに文章の意義に肉迫することも出來ようが、或る場合には文章の意味――主として事實的な概略を採り得るに過ぎないこともあるであらう。前者の場合は、之が果して眞の意義であつたかといふことが、この後の過程に於て證明せられるであらうし、後者の場合には、この後の過程に於て漸次文の意義に肉迫することが出來よう。

(但し新問文字の讀方等は、或はプリントとし、或は小黑板等の利用によつて豫め授くべきで、然もなほ讀み得ぬ兒童の多い場合に、適當に自由讀をなさしめる等の工夫が欲しいものである。)

第二次の通讀は、所謂「精讀」ともいふべきであつて、次に深究――即ち文の分析、反省に至る橋渡しとなるべきものである。

此の場合、この通讀に代へて教師の讀みを加へ、適當な暗示的言葉を挿んで、意義研究の着眼を示唆することも一つの方法であり、或は各分節毎に讀ませて、文の構想を指導する豫備的作業とすることも一つの方法である。

最後の通讀は、所謂「朗讀」であつて、深究に於て分析され、反省された文の意義が、再び文章自體に統一されて直觀されるのである。

文章の意義を表現した讀みとか、讀者の感情を表現しての讀みとかいふものは、この通讀に現はれるのである。

(二)話　　合

最初の通讀の直後に行はるべき作業で、兒童に即して言へば、兒童はこの文をどの程度にまで讀み得てゐるかを知り、更にその上に立つて、今後發展して行く讀みの方向を暗示し、或はその方向に兒童の學問態度を向けて行かうとするものであると言ひ得る。

兒童の讀後感として發表させる場合に、豫めノートに記入せしめておいて發表させる場合もあり、然して上學年に於てはこの方法も極めて有効なものではあるが、多くの場合、教師との話合になるのが普通である。

話合に於て、何を質れ、何を答へしむべきかといふことは各課の文章によつて異なる所であるが、大體に於て、

(1)題目についての話合

讀本は文章を統一した形に於て附けられてゐる題目が多い。故に先づ題目について話合を始めるのが普通

であらう。

(2)文章の内容についての話合

此處で内容といふのは、それが或は事實的な方面を答へるものもあらうし、或は文の意義に近づいた答をするものもあらうが、とにかくさうした内容的な方面を含んだものを意味するのである。

その内容は勿論各課の文章によつて異なるものではあるが、凡その着眼點として、

イ、事實的意味を主とする文章――即ちその文を通して何等かの事實を知らしめようとする知識的方面を主とした文に於ては、

「この文を讀んでどんなことを知つたか」

といふことが話合の中心となるわけである。

そのために、

「今までこの事に就いてどんなことを知つてゐたか」

「この文を讀んで始めて知つたといふことはなかつたか」

「この文を讀んで、疑問の起つたやうなところはないか」

といふやうな點について話合ふことも大切なことであらう。

ロ、情感を主とする文章――即ち自然・人生に觸れて呼び醒まされ、搖ぎ出た作者の感情の流れをそのまゝに表現した所謂文學的文章とか、藝術的な文とかいふべきものに於ては、

「この文を讀んで、どんな感じがしたか」

といふことが話合の中心となるべきもので、

從つて、

「この文を讀んで、自分もこんな氣持がしたといふところはなかつたか」

「大へん面白いと思つたことはないか」

「こゝはいゝなあと感じたところはなかつたか」

等の問によつて、之から進んで行かうとする方向に兒童の態度を向けることも大切なことであらう。

ハ、修身的な教訓の文章――即ち特に何等かの教訓を與へたり、道德的に自己を反省させたりしようとするやうな文章に於ては、

「此の文を讀んで、どんなことを教へられたか」

といふことが話合の中心となる。

從つて

「この文を讀んで感心したところはなかつたか」

「この文を讀んで自分の事に比べてみた人はなかつたか」

といふやうな問によつて、文の教訓を兒童自身の生活に近づける工夫が欲しいと思ふ。

(但し話合の程度は、學年により、兒童の實際によつて十分な工夫を要するので、或る意味に於て話合の如何が、此の後の過程の成否を決定するやうな場合が多い。)

(三)深　究

文章の吟味とか、文章の精査とか名付くる段階で、

文の構想を觀る。
文の事實的方面の了解。
重要なる語句を中心として、作者の情感、企圖等を吟味する。
文の意義を確認する。
表現について優れてゐる點を吟味する。
といつた樣な、種々な仕事が考へられる。
此の場合、文の意義に立つて「重要なる語句」――卽ち網の目のやうな語句で、その一つを擧げると、それに統一されてゐる多くの語句が必然に擧つて來るといふやうな語句を選ぶといふことは、教師の重要な修行であるが、兒童に對しても常にさういふ語句に着眼させ、之を取らせるといふことは重要な指導の一つである。それと共に、重要な語句は、教師が板書すると共に、兒童にはノートに記させ、書くことによつて一層よく讀むことの意義を自得させたい。
（本書は各時間に於ける重要な語句を選擇してあるが、教授者は更に之れに囚はれることなく、自らの修行としても、自ら重要な語句を選んでみる必要があらう。）

（四）練　習

練習に於ては、
(1) 各課に於ける指導事項を一層徹底せしめるために。
(2) 文字・語句・語法といふやうな形式的方面の錬磨をなすために。
(3) 讀書の趣味を養成し、讀書の力を養成するために。

(4) 教師からいへば、各課の取扱がどの程度に徹底してゐるかを反省するために
本書は、特に練習の項を設けて、各課取扱過程としての練習の外に、「練習文」「家庭學習」「考査問題」を設定したのである。
教授者は之等の名目に囚はれることなく、練習の眞義に立つて、縱横に活用し、近來稍もすればかうした方面の指導を忽にしてゐる讀方教授の弊を救つて戴き度いと思ふ。

第二章　小學國語讀本卷六概觀

一、編纂の趣意

小學國語讀本全卷にわたる編纂方針に就いては、本書前卷の三頁以下に記載したので、こゝには之を省き、舊「尋常小學國語讀本」との比較表を次に掲げ、次項以下に於て本卷六の特色の大要を記すことゝした。

尋常小學國語讀本卷六教材比較表

尋常小學國語讀本		小學國語讀本	
課	教材	課	教材
一	俵の山（散文・平假名・兒童生活）	一	神武天皇（散文・平假名・歴史）

二　日本の高山（散文・平假名・地理）
三　ヤクワントテツピン（散文・片假名・理科）
四　きのこ取（散文・平假名・兒童生活）
五　海一二なしけ（散文・平假名・兒童生活）ぎ（韻文・平假名・生活）
六　くりから谷（散文・平假名・歴史）
七　霜（散文・平假名・兒童生活）
八　虎と蟻（散文・平假名・飾身）
九　町の朝（散文・片假名・兒童生活）
一〇　弓流し（散文・平假名・歴史）
一一　入營した兄から（散文・平假名・公民）
一二　笑ひ話（散文・平假名・飾身）
一三　鮭（散文・片假名・理科）
一四　冬の夜（韻文・平假名・兒童生活）
一五　萬じゆの姫（散文・平假名・歴史）
一六　磁石（散文・片假名・理科）
一七　けんやくと義捐（散文・平假名・公民）
一八　賀茂川（散文・平假名・地理）
一九　モスリン（散文・片假名・理科）

二　祭に招く（散文・平假名・兒童生活）
三　村祭（韻文・平假名・兒童生活）
四　磁石（散文・片假名・理科）
五　稲刈（散文・平假名・兒童生活）
六　日本武尊（散文・平假名・歴史）
七　山羊（散文・平假名・兒童生活）
八　林の中（韻文・平假名・兒童生活）
九　僕の望遠鏡（散文・平假名・理科）
一〇　神風（散文・平假名・歴史）
一一　軍旗（韻文・平假名・飾身）
一二　牛かへ（散文・平假名・兒童生活）
一三　笑話（散文・平假名・趣味）
一四　千早城（散文・平假名・歴史）
一五　たこ（韻文・平假名・兒童生活）
一六　雪の夜（散文・平假名・兒童生活）
一七　雀の宿（散文・平假名・兒童生活）
一八　火事（散文・平假名・公民）
一九　梅（韻文・平假名・兒童生活）

二〇　氷すべり（散文・平假名・兒童生活）
二一　神風（散文・平假名・歴史）
二二　象（散文・平假名・理科）
二三　千早城（散文・平假名・歴史）
二四　記念の木（韻文・平假名・兒童生活）
二五　芽（散文・平假名・兒童生活）
二六　伊勢參宮（散文・平假名・地理）

二〇　小さい温床（散文・平假名・理科）
二一　雪舟（散文・平假名・趣味）
二二　潜水艦（散文・片假名・理科）
二三　春の雨（韻文・平假名・兒童生活）
二四　東京（散文・平假名・地理）
二五　東郷元帥（散文・平假名・飾身）

二、教材の選擇

卷一の教材を三部に分ち、第一部を韻文に依る教材、第二部第三部を散文を主とする教材とし、その第二部に兒童生活、第三部に物語を配した手法は、卷二以後も踏襲せられ、物語文と兒童生活文の間に韻文を適宜に配し全卷を通じて、舊讀本に比すれば、文學讀本としての香が高い。しかし卷數の進むに伴つて、自ら新な展開が試みられ、卷六には卷六としての特色がうかゞはれる。

先づ目につくことは、兒童の理智の發達に應じて、卷五まで繼續せられた低學年的色彩から脱して、教材の選擇、文章の叙述に變化が加はり男女の性的差別が考慮されたことである。即ち兒童の精神生活に於ける幼年期から少年期への轉換を卷五から卷六にかけてなされてゐることである。それを教材の三大別に從つて細論すれば次の如くである。

(1)　物語教材は、本卷に於て「一、神武天皇」「六、日本武尊」「十、神風」「十四、千早城」の四つの歴史的物語と

なり、卷五の神話に引續き我が國の建國と國民性を語るものとなつてゐる。卷五の神話は、形式から見て童話的性質を有し、意義から見て國家的・歴史的性質をもつもので、卷一・二の童話、卷三・四の傳說に引續き、低學年的性質を帶びる反面に、やうやく理智的方面に展開せんとする尋三兒童にふさはしい一面を持つものであるが、本卷の歴史的物語は、更に進んでその低學年的性質をも脫して更に深く理智的生活へ兒童を誘導しようとしてゐる。

尙此の兒童期が英雄崇拜と旺盛な活動力に富む點を考慮されてか、先の歴史的物語が何れも戰鬪を背景とする偉人傳であり、他の韻文教材に「軍旗」生活教材に「潜水艦」「東鄕元帥」等が入れられてゐることも注目さるべきである。

(2) 幼年期から少年期への轉換は、韻文教材の選擇にも見られるところで、卷五に比して卷六は著しく童話的雰圍氣を脫けて、詩的境地へ進んでゐる。「三、村祭」「八、林の中」「十一、軍旗」「十五、たこ」「十九、梅」「二十三、春の雨」の六篇を通觀して得るところは、かなり高度の――その內容に於て格調に於て、東洋的風格を持つ詩の境地である。

(3) 生活教材には、特に著しい工夫が試みられてゐる。此の生活教材は、新讀本の最も特色のある新天地であるが、卷六の如きは、卷五に比して、一層の創意が感ぜられる。

卷五の「おたまじやくし」「動物園」「雲」に見られた科學的物語は、まだどこかに、童話的作爲が感ぜられたが、卷六の「四、磁石」「九、僕の望遠鏡」「二十、小さい溫床」「二十二、潜水艦」の如きは、前者に比し、かなりな知的質量を感ずるものである。又卷五の地理的教材「參宮だより」「氷の旅」を、本卷の「二十四、東京」と比較すれば、その程度の如何に差があるかに想ひを致すことが出來よう。前述の物語教材にしても時と所の

漠然たる神話に比して、本卷の史話は、遙かに實在性が與へられてゐる。

卷五から現れた都市と農漁村との地域的特異性も本卷に於ては一層その度を加へ「五、稻刈」「七、山羊」「十二、牛かへ」等と「十六、雪の夜」「二十四、東京」を比較すれば、編纂者の意圖がうかゞはれる。

又本卷に於て特に目につくことは男女の性的差別が、文章叙述の上にはつきりとわかることである。これまでの教材では女兒的呼名と挿繪によつて、その女性であることを知り得る程度であつたものが、本卷では「七、山羊」や「二十、小さい溫床」の如く、女性的ニュアンスを文章上に滲出してゐることも見逃すことが出來ない。

三、體裁に就て

表紙の綠と鳥と雲を配した正倉院御物風の圖案をはじめ、紙の色、背クロースの體裁など、すべて卷一と同樣である。これは今度の小學國語讀本が高等科用まで一貫する體裁であらう。

四、分量に就て

一行十八字詰、一頁八行、全卷百八頁の舊讀本卷六の分量が、新讀本では、一行十九字詰、一頁九行、全卷百四十一頁に增加せられ、附錄として新出漢字表二頁が添えられてゐるから、全體として、約五割五分の增加であり、同種の卷五に比しても十三頁の增加となつてゐる。

課數は舊讀本の二十六に對し、之は二十五だから一課少い。が、それだけ長篇文が多くなつてゐるわけである。

五、文章に就て

(1) 卷五にはじめて現れた口語常體は、本卷ではいよ〳〵增加し、散文の課數十九の中九課が常體の文章であ

り、韻文の如きも大體に於て常體を採用し、中には「十一、軍旗」の如く文語調に近いものがある。又崇敬體の十課も、皇室關係の教材・女性的教材がその大部分を占めてゐるので、卷七以後に採用する文體が如何なるものであるかを暗示してゐる。

(2) 卷五に現れた手紙文「參宮だより」は、本卷では「二、祭に招く」の手紙となりはじめて「返事」がそえられ、一層完備した形の手紙文となつてゐる。

六、文字及表記に就て

(1) 文字

(イ)假名、片假名の課は「四、磁石」「二十二、潜水艦」の二課で他はすべて平假名交り文である。片假名の課は、忘れぬための保存用として加へられてゐるのであらう。

(ロ)漢字、舊讀本との比較は次の通である。

	小學國語讀本		尋常小學國語讀本	
	新字	讀替	新字	讀替
一	二二	一〇	一〇	〇
二	六一	一〇	三九	五
三	九三	二四	七一	一八
四	一四三	三五	一〇二	四五
五	一六〇	四八	一五八	八五

六	一七六	一〇一	一四九	七〇
計	六五二	二二八	五二九	二二三

新出漢字は、低學年に於て從來よりも比較的多くするとの編纂趣意から、全體的には多くなつてゐるが、卷五・六を一括しての尋三としては、それ程の差がない。

又新出漢字は、出來るだけ具體的・直觀的な言葉を現はす文字を主とし、讀替の如きも時雨(シグレ)其所(ソコ)景色(ケシキ)の如く、漢字本來の讀みを現はさぬものは省き、僅に今日(ケフ)心地(コヽチ)の程度に止めてゐる。その上固有名詞又は景色(ケシキ)の如く讀みの難かしいものは、すべて振假名付として提出されてゐる。

(ハ)略字、卷五にはじめて出て、萬(万)蠶(蚕)蟲(虫)絲(糸)の四字が出されてゐたが、本卷では尙次の如く現はれてゐる。

畫(画)——五〇頁　體(体)——六四頁　歸(帰)——六五頁　繭(繭)——六六頁

圓(円)——七〇頁

(2) 表記に就て

促音と拗音記號に特に小文字を用ひることをやめ、句點に一字分の字間をあけ、分別書法を廢したこと等は卷五とかはりがない。

外國語を片假名で現すことも卷五とは變りないが、此の卷六には、ピン・ブリキ・ニッケル・アルミニウム

ゴム・ラッパ・ガラス・ポンプ・サイレン・チューリップなど、舊讀本に比してかなり多くの外國語が採用されてゐるが、その大部分は外國語といふよりもむしろ國語化されたものと考へられるもので、文化の進展に伴ふ一現象であらう。

七、符號に就て

本卷にはじめて現れた特殊な符號はない。

八、挿繪に就て

卷六から文章上にも教材上にも低學年的性質を脱した如く、挿繪でも色刷の部分がなくなり、挿繪數四十個は何れも黑色であるが、その描法には多大の關心を以て、各種の創意が加へられてゐる。その中十二個が寫眞版であり、一個がペン畫であることも特殊な味を出してゐる。

第三章　小學國語讀本卷六各課指導要旨

本指導要旨は、教授細目編纂の一參考として附したものである。從つて大體の標準を示すことに主眼を置いたので、週別をやめて月別に配當し、各課への時間配當はその課の指導に必要な程度に止めた。又第二學期は十月上旬からとし、第三學期は三月の中旬までに終了する豫定で案を立てた。依つて之を各學校の實際に就て考慮するとすれば、各課の取扱時間數や學期内の週の配當又は練習復習の時間配當にそれ〴〵の工夫が必要である。その詳細に亘る參考資料は、「後篇、讀本指導各說」に掲げて、指導の便を圖ることにした。

第二學期　十月分教材

一　神武天皇　五時間（說話——歷史教材）

神武天皇御東征の一挿話。天皇の御稜威の輝く所、如何なる奸惡の賊と雖も遂に向ふ事が出來得ないといふ天皇御稜威の輝きを内面に潜ませた建國の歷史物語。神武天皇御東征の御業が如何に苦難なものであつたかといふこと、大義の爲には兄をも滅したといふ精神をも併せ考へなければならない。

二　祭に招く（三時間）（生活教材——書簡）

「村祭」の韻文を次に控へて、村祭に友を招く手紙とその返事との文である。獨立の手紙の文の最初として、手紙の文が普通文と異る點をも學年相應に明かにしなくてはならない。

三　村祭（二時間）（生活（田園）教材——韻文）

前課「祭に招く」に連絡して、村祭の賑はしさと村人の喜びを率直に表現した韻文である。素朴な中にもよくその氣分の現はれてゐる點を讀み味はせなければならない。

四　磁石（三時間）（生活——理科教材）

前課に連絡して、祭の夜店で買つて貰つた磁石を使つて遊んでゐる中に、磁石の性質についての興味ある現象を樣々發見して行くといふので、兒童の生活に芽生へる科學的趣味を伸展させようとしたもの。

十一月分教材

五　稲刈（四時間）（生活——田園教材）

「稲刈の日」ともいふべきもので、稲刈といふ田園の樂しい然も多忙な行事を背景として、家庭愛を現はしたもの。特に弟に對する作者の愛情、作者に對する弟の親しみや、父母の情愛を味はせなければならない。

六　日本武尊（六時間）（說話——歷史教材）

（一）は日本武尊の勇武と智略。（二）は草薙劍の威德を示したもので、歷史的意義からいへば、皇威の伸展を物語るものであり、兒童の心理に立つ時、英雄の武勇譚として興味あるものである。

七　山　羊（四時間）（生活——田園教材）

田園生活を背景として、山羊に對する作者の濃かい情愛を描いたものである。作者の純情の心境を通して、動物愛の精神を養ふ。（副業として山羊を飼育といふ點から見れば、實業的な意味も含まれる）

八　林　の　中（二時間）（生活——自然——韻文）

林の中に來て「秋の靜けさ」を觀照した詩である。秋の自然に對する作者の觀照的な態度に立たせ、兒童の心に潜む永遠に對する憧憬といつた心情に滿足を與へたい。

九　僕の望遠鏡（五時間）（生活——理科教材）

作者が眼鏡の玉と、虫眼鏡とを利用して、望遠鏡を作つた過程と、その製作の喜びとを現はしたもの。兒童生活に於けるかうした方面の興味を刺戟し、科學的生活の芽生へを培つて行くことが大切である。然して工夫・創作の態度が、かうした生活を開拓して行く根本の態度であることを暗示したい。

十　神　風（五時間）（說話——歷史教材）

未曾有の國難に當つて、國民は上下一致、皇運扶翼の誠を致した、その赤誠が神意に適ひ、神風起つて忽ち元の大軍を潰滅し、國難を打開したといふ歷史的物語である。歷史的意味からいへば、國威發揚の物語であり、兒童の心理に立てば、外敵に對して奮戰した英雄物語である。「何故神風が起らなければならなかったか」について宗教的な立場から考察させて見ることが大切である。

十二月分教材

十一　軍　旗（三時間）（國民教材——韻文）

軍旗は天皇御親授、天皇のシムボルである。故に軍旗には尊嚴性があり、永遠性がある。然してこの尊嚴性・永遠性を不動の信仰として、之を護るところ、こゝに我が國の强烈な國家意識があり、日本精神がある。軍旗の通つて行く姿を拜して、日本國民として誰もが感ずる國民的感激の中に、軍旗の尊嚴性・永遠性を讃美させたい。

十二　牛　か　へ（四時間）（生活——田園教材）

田園生活を背景として、牛に寄する動物愛の精神と、之を中心とした家庭愛との精神が奏する二重奏と見ることが出來よう。一家のものが擧つて涙ぐましいまでに寄せてゐる暖かい情愛をしみ〴〵と讀み味はせたい。

十三　笑　話（三時間）（趣味教材）

前課のしみ〴〵とした沈靜な氣分を轉換して、明らかな笑の世界が展開されてゐる。（一）は負け嫌ひの人間に有がちな矛盾した論理を如何にも正當の如く振り廻してゐるもの（二）は主として考へ物的な推理の誤謬を種とした笑話である。かうした教材によつて兒童生活に朗らかな笑ひの氣分を與へたい。

第三學期　一月分教材

十四　千　早　城（五時間）（說話——歷史教材）

日本の忠臣といへば、兒童も「楠木正成」を第一に擧げることを躊躇しない。その崇敬の的である忠臣正成の智謀を盡しての奮鬪振り。誰か感激の胸を躍らせないものがあらうか。歷史的に見れば皇室撫護史の代表であり、兒童の心理から見れば英雄の活躍に對する滿足となる。

十五　た　こ（二時間）（生活教材――韻文）

風寒い港の空を背景として、舞ひ揚る凧の姿――その自然と人生との諧調を、靜かに觀照してゐる作者の聲である。自然の情景に對する凧揚げの情景が如何に調和してゐるかを讀んで、兒童の詩境を開拓して行きたい。

十六　雪の夜（四時間）（生活――都市教材）

前段は雪の夜の家庭の内部を描寫したもの、後段は雪の夜の外景を描寫したものであるが、全篇を流るゝものはその二つのものが交渉し協和して描き出してゐる和やかな情景である。雪の夜を迎へて親しく語つてゐる家庭の人々の氣持と共に、雪の情景の巧みな表現を讀ませたい。

十七　雀の宿（三時間）（生活――田園教材）

動物愛の表現であるが、之は「雀」といふ野外にあるもの、寧ろ時には人間に迷惑を與へるものに對して寄せられた情愛で、この點から見て、動物愛が一層宗教的の立場に近づいたものとも見える。兒童の心にかうした傳統的な情愛の世界、作者の暖い思ひやり等を生かして、動物に對する愛の世界を高揚させたい。

二月分教材

十八　火　事（五時間）（生活――公民教材）

公民的意味からいへば「防火思想の鼓吹」であるが、之を表現するに文學的立場から燒け出された叔父・叔母に對する同情の念が切々と描かれてゐる。かうした情愛の世界を根底として、その上に防火思想を確立して行くやうに工夫されなければならない。

十九　梅（二時間）（生活――自然教材――韻文）

傳統的な趣味に生きる梅の花の性格を歌ひ出したもの。純然たる詩の境地で、理解には相當の困難を感ずると思ふが、相應しい月の夜を背景にほのかに匂つてゐる梅の花を、作者と共に靜かに觀照したい。

二十　小さい温床（四時間）（生活――都市教材）

前課「梅」が自然を背景として傳統的な花の姿を描いたものとすれば、之は現代の科學を應用した温床に、現代的な花の姿を描いたもの。兒童の科學的生活を開拓し、園藝の趣味を培養したい。

二十一　雪　舟（四時間）（說話――偉人教材）

藝術上の偉人としての雪舟幼年時代の逸話である。偉人と言へば武人に限られてゐるかの如く考へる兒童にとつて、文化的の偉人を與へ、かうした方面に對する感激から、次第にこの方面へ眼を開かせてやることは重要である。雪舟の心境は勿論、和尙の心持もよく想像させて見なければならない。

二十二　潛水艦（五時間）（公民――理科教材）

現代科學の粹を蒐めた兵器の代表者である。潛水艦の構造・性能・任務等の一般的な理解から、現代科學の進歩を思はせると共に、擬人體としての表現法から、この兵器を一個の英雄として、その活躍振りに兒童の英雄崇拜的な心理に一種の滿足を與へたい。

三月分教材

二十三　春の雨（三時間）（生活――自然教材――韻文）

早春の自然を背景として、細い糸のやうな春雨のしと〳〵とふる情景、春雨をうけて流るゝ水の姿を觀照したもの。流れ〳〵て行く春の水に永遠を憧憬する兒童の心を乘せてしみ〴〵と觀照させたい。

二十四　東　京（六時間）（地理教材）

帝都としての東京の紹介であり、現代大都市としての東京名所の案内である。挿繪に結合して、帝都としての東京、國民的な意味を持つた東京、現代都市としての施設を持つ東京、傳統的な色彩の殘つてゐる東京の姿をよく讀ませたい。そしてかうした地理的方面の趣味を增養したい。

二十五　東鄕元帥（五時間）（修身教材）

現代の英雄としての東鄕元帥――然も關東大震災といふ非常時に當つて、燦然として現れた元帥の誠忠・沈着といふことから、質素な生活、公共的精神といつたやうなものを讀みとらせ、元帥に對する追慕の情を一層深くしたい。尙、之を公民的教材として見れば非常時に際する態度といふやうなものを暗示することが大切である

後篇　讀本指導各說

各課解說の要領

一、教　材
　1. 教材　2. 資料　3. 連絡　4. 新出文字及表記
　5. 難語句　6. 文章　7. 挿繪　8. 教具
二、教材觀
三、指導觀
四、指導の實際
　A 配當時間　B 指導要領
五、練　習
　1. 練習文　2. 家庭學習　3. 考査問題

一　神武天皇

一、教材

(1) 教材一　神武天皇

・新出漢字　――　讀音漢字　(イ)(ロ)……資料説

大和へ御進軍になつた神武天皇は、八咫烏(ハ)をお使として、其の地方に勢力を張つて居た兄うかし(ニ)、弟うかし(ホ)兄弟の所へ、お つかはしになりました。さうして、天皇にお仕へ申すやうに、お傳へさせになりました。

すると、兄うかしは、物も言はず、かぶら矢(ホ)を取つて弓につがへ、八咫烏をめがけて、ひようと放ちました。八咫烏は、其 のまゝとんでかへりました。

兄うかしは。すぐに手下の者を呼集めて、戰の用意をしようとしましたが、案外にも、手下が集つて來ません。すつかりあ わてた兄うかしは、しばらく考へて居ましたが、やがて天皇のいらつしやる所へ參りました。さうして、

「きつきは、お使とも知らず、まことに失禮な事をいたしました。申し上げるまでもなく、私ども兄弟は、まごころをもつ て、お仕へいたします。つきましては、新しく家を建てゝ、ふばかりのおもてなしをいたしたいと存じます。どうぞ、此 のお願をお聞きとゞけ下さいませ。」

と、まことしやかに申しました。天皇は、御心のうちに、なかしいなとお思ひにはなりましたが、其の願をお許しになりました。 兄うかしは、かへつて、きつそく家を建てにかゝりました。大勢の人を集めて、晝も夜も、働かせましたので、間もなく、 大きな家が出來上りました。

弟うかしには、どうも兄のする事がわかりませんでした。天皇のお使に弓を引いた兄が、すぐ又天皇をお招きすると言つて、

新しく家を建てたばかりか、よく見ると、其の家の中には、ちやうど、獸を取るのに使ふやうな、おとしの大きいのがしかけてあります。

「はゝあ、こんな事をして、だましうちにしようとするのか。まことに恐れ多い事だ。」

かう氣がついた弟うかしは、いろ〳〵と兄をいさめましたが、兄はどうしても聞入れません。「もう仕方がない。」と思つて弟うかしは、急いで天皇の所へ參りました。

「兄にゆだんなさいますな。新しく建てた家には、大きなおとしがしかけてあります。どうぞ、御用心下さいませ。」

天皇は、弟うかしのまごころが、よくおわかりになりました。すぐに、二人の大將を、兄うかしの所へ、おさし向けになりました

二人は、兄うかしの家へ行つて、外から大聲に、

「兄うかし、出て來い。」

と呼びました。

何事かと思つて出て見た兄うかしは、びつくりしました。二人の強さうな大將が、目ないからして立つて居ます。

「何の御用でございますか。」

と、兄うかしが申しますと、

「お前は、天皇をお迎へして、おもてなしをすると申した。一たい、どういふ風におもてなしをするのか、一つ、此の新しい家にはいつて、やつてみろ。」

と言ひながら、一人は弓に矢をつがへ、一人は劔を拔いて、つめ寄りました。

二人の樣子に、兄うかしは、すつかり氣をのまれてしまひました。さては、自分の惡だくみがあらはれたなと思つて、すごすごと、家の中へはいつて行きました。

其の時です、どしんと大きい音がしました。見ると、兄うかしは、自分のしかけたおとしにかかつて、あはれな最期をとげて居ました。

兄うかしは亡びました。弟うかしは、兄の手下を連れて、あらためて神武天皇に降參いたしました。

(2) 資料

○本文は古事記に據る。原文左の如し。

故爾に、宇陀に兄宇迦斯・弟宇迦斯二人ありけり。故先八咫烏を遣して、二人に問曰しめたまはく、今天神の御子幸行ませり、汝等仕へ奉らむや。是に兄宇迦斯、鳴鏑（鏑矢）を以ちて其使を待ち射返しき。故其の鳴鏑の落ちたりし地を、訶夫羅前と謂ふ。待撃たむと云ひて、軍びとを聚めしかども、得聚めざりしかば、仕へ奉らむと欺陽りて大殿作り、其の殿内に押機（陷穽の類）を作りて待ちける時に、弟宇迦斯先參向へて、拜みて曰さく、僕が兄兄宇迦斯、天神の御子の御使を射返し、待攻めむと爲て、軍を聚むれども、得聚めざれば、殿を作り、其の内に押機を張りて、待取らむとす。故參向へて顯白すとまをしき。爾に大伴連等が祖道臣命、久米直等が祖、大久米命二人、兄宇迦斯を召して、罵詈て云ひけらく、伊賀 我が作り仕奉れる大殿内には、おれ（己れの義か）先入りて、其の仕奉らむと爲る樣を明白しまをせといひて、横刀の手上握り、矛ゆけ矢刺して、追入るゝ時に、己が作りおける押に打たえて死にき。即ち控出して、斬散りき。故其地を、宇陀の血原とも謂ふ。然して其の弟宇迦斯が獻れる大饗をば、悉に其の御軍人どもに賜ひき。此の時御歌曰したまはく、

宇陀の高城に、鴫罠張る、（押機を設けたるをいふ）我待つや、鴫は障らず、勇細（鯨の勇しきをいふ枕詞）鯨障る。前妻が、魚乞さば、立柧棱の實の（立柧棱—かなめといふ木か。）なけくを（長きなの意か）幾許聶ね。（聶 肉を小さく薄く切るをいふ。）後妻が魚乞さば、柃實の（柃—ちさかきといふ木）おほけくを、（大きなるを）幾許聶れ。ええしやこしや。（ええおかしやと誡めていふ語。）此は、いごのふぞ。（いごのふは不詳）あこしやこしや。此は嘲咲ふぞ。故其の弟宇迦斯。

（イ）神武天皇　御名は狭野、又神日本磐余彦火々出見尊と申し奉る。彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊の第四皇子にましまし、母は海神の女玉依姫。第一代の天皇にまします。瓊々杵尊以来代々日向國高千穂宮にましまして四方を統治なされたが天皇の時に及び皇兄五瀬命と議して天業を恢弘しようと謀り、都を東國に移さうとの旨を決して舟師を率ゐて日向を發し、豊國宇佐をへて、筑紫岡田宮　至りこゝにましますこと一年、更に進んで安藝多祁理にましますこと七年にして、更に海路より浪速をすぎ日下の蓼津にいたり、土賊長髄彦と戰つたが利あらず。五瀬命また流矢にあたり給ふ。こゝに於て天皇路を轉じて、紀伊國竈山にいたり給ふたが、五瀬命その傷重くして遂にこゝで薨ぜられた。かくて天皇は進んで丹敷戸畔を誅し、さらに大和の菟田に入つて兄猾を誅し、弟猾を降し、ついでまた兄磯城等を誅して、兵威とみに振ふ。饒速日命これを聞き大いにおそれ、長髄彦を殺して降伏す。ついで土蜘蛛・新城戸畔・居勢祝・猪祝等皆誅に服し、中州全く平定す。こゝに於て都を大和國畝傍橿原に奠め、はじめて天皇の位につく。これ我が國初代の天皇にして實に紀元元年辛酉の歳である。位にましますこと七十六年にして崩し給ふた。御壽百二十七（或は三十七）。大和國高市郡山本村畝傍山東北陵に葬る。

（ロ）大和　東は伊賀伊勢、西は河内、南は紀伊、北は山城に至る東西凡そ十里餘、南北凡そ二十五里あり。畿内に屬す。國内山嶽その中を占め、南方一帶連峰連つて平地を見ず。北方平野ひらけて吉野・大和二河之を貫く。歴世遷都の跡多く古蹟遺し。

（ハ）八咫烏　神武天皇御東征の時これを導き奉つた靈烏。名を鴨建津身命といひ、神魂命の孫であるといふ。天皇熊野山中に入つて行き惱ませられた時八咫烏飛翔して皇軍を導き、遂に菟田に出でしめ奉つたといふ。天皇即位の二年功を賞せられ子孫は加茂縣主となつた。後慶雲二年（七〇五年）八咫烏社を大和宇陀郡に建てゝ命を祀つた。

（ニ）見うかし・弟うかし　兄猾・弟猾。神武天皇御東征當時大和に棲みし賊の一黨。

（ホ）かぶら矢　鳴鏑（鏑矢）鏃の一種であつて、木にて長く圓くふくらめて作り、中を空にして三つの孔をうがち、鏃尻を嵌へて用ふ。射れば空氣を通じてひゞきあり。その形蕪に似てゐるが爲にかく名づけたといふ。

（ヘ）二人の大將　本文中「すぐに二人の大將を、兄うかしの所へおさし向けになりました」とある二人の大將は古事記によれば、道臣命及大久米命をさす。八頁挿繪がそれである。

(3) 連　絡　本課に關係ある既出教材には次の如き神話教材がある。

國びき（卷三、二）白兎（卷四、一六）天照大神（卷五、一）八岐のをろち（卷五、五）天孫（卷五、二一）

又本卷には、次の如き歴史教材があるので、豫め、それとの連絡並にその奥に潜む編纂者の意圖を考へておきたい。

日本武尊（六）　神風（一〇）　千早城（一四）

又小學國史上卷の「神武天皇」に關する記載を一讀しておく必要がある。

(4) 新出文字及表記

（イ）御進軍　勢力　張つて居た　お仕へ申す　敗ちました。参りました　家を建てる　お許し

働かせました　お招き　お迎へ　どういふ風に　亡びました　降參

(5) 難語句　進軍　勢力を張る　つかはす　仕へる　かぶら矢　矢をつがへる　意外　手下

失禮　心ばかりのおもてなし　存じます　聞きとどけ、　まことしやか　お招き　おとし

だましうち　いさめる　御用心　さし向けて　目をいからす　つめ寄る　氣をのまれる　惡

たくみ　あはれな最期　最期を、とげる　あらためて　降參

(6) 文　章　口語の崇敬體である。特に天皇への敬語に注意して取扱ひたい。

(7) 挿　繪

二頁と三頁　「兄うかしが物も言はず、かぶら矢を取つて弓につがへ、八咫烏をめがけて、ひようと放たう」としてゐる所である。二頁の繪によつてかぶら矢をよく觀察せしめたい。尙泰然として木の枝に止つてゐる八咫烏の樣子と矢をつがへてゐる奸惡な兄うかしの有樣を考へさせ、古代人の服裝等についても注意をさせたい。

八頁と九頁　天皇の命令をうけて兄うかしの家にやつて來た二人の大將が「お前は天皇をお迎へして、おもてなしをすると申した。一たいどういふ風におもてなしをするのか、一つ、此の新しい家にはいつて、やつてみろ。」と一人は弓に矢をつがへ、一人は劍をぬいてつめ寄つてゐる所。二人の大將とは道臣命、大久米命の二人である。驚愕してゐる兄うかしと威風あたりを拂つてゐる二人の大將の樣子を窺はせ、併せて古代の素朴な風俗を悟らすべきである。兄うかしの背後に見へるのが、新しく建てたおとしのある家の一部である

(8)　**教具**　特に必要なきも、兒童學習の參考として讀本掛圖、神武天皇に關する繪畫等の準備があればよい。

二、教材觀

(1)　卷五「天の岩戸」と相對して、人皇第一代神武天皇の御盛德を揭げてゐる。

然も舊讀本卷五では、「金鵄勳章」の起源として神武天皇御東征の御鴻業を物語つてゐるが、本卷では「神武天皇といふ題目の下に、御東征の挿話として宇陀の兄宇迦斯、弟宇迦斯の興味ある物語が選ばれてゐる。

一讀、兄宇迦斯、弟宇迦斯兄弟の物語が全面を被ふて居て、神武天皇の御盛德、御人格といふものが、くつきりと描き出されてゐないために、「神武天皇」といふ題目の力が、非常に稀薄に感ぜられるが、然し全文を靜かに讀み味つて行く時、

イ、神武天皇が大和を平定して、建國の基を築かれる迄には、かうした御危難が至る所に在つたこと。

ロ、然もその度に御稜威の光によつて、御危難が打開されて來たこと。

等が自づと悟られて、神國日本の建設に何とも言へぬ深い感激を覺えると共に、天皇に叛く者は、如何なる奸智に長けてゐる者でも自滅するといふことが嚴として表現されてゐることが悟られる。更に大義親を滅するといふ言葉の意義が嚴然とした事實となつて現はれてゐることも知られるのである。

(1)　物語の展開は

一、天皇が八咫烏を使者として兄弟に降參を勸められた。

二、兄は八咫烏を討つて、皇軍に矢を向けようとしたが部下が集らないので、僞つて天皇を陷れようとした。

三、弟は兄の悔悟を諫つたが、その効のないのを知つて兄の惡企みを申上げた。

四、天皇は二人の大將を差し向けられ、遂にその惡企みを露顯させ兄は自ら堀つた陷穴に入つて自滅した。

五、弟は兄の部下をつれて天皇に降參した。——興味の中心は第四節で、こゝが挿繪となつて現はれてゐる。

三、指導觀

(1)　單なる物語としてみれば、善因善果、惡因惡果の物語で、他を陷入れようとした自分が、反つて自ら堀つた陷穴に落ちて自滅するといふ有ふれた筋の物語に過ぎない。

然し、本文は單なる昔話ではなくて、全體が「神武天皇」といふ御人格に統一されたものであり、然もその御人格は常に御寬仁の御度で、戰の前に必ず親しく眞心をもつてお招きになられるといふ偉大な御人格——こゝに皇道の大精神が出てゐる——神武天皇の日本建國といふ偉大な御盛業を背景としての一挿話であることを忘れてはならない。

此の意味で、本文の讀解の處には、敬材觀にも揭げたやうに、

イ、神武天皇が大和地方を平定され、建國の基を開かれるためには至る所にかうした危難のあつたこと。

ロ、然しその危難も天皇の深い御稜威によつて、常に打開されて來たこと。

等の感激が滑んで居らなくてはならないと思ふ。

更に、天皇の御爲には肉身　兄をも捨てゝ盡さなければならない所に、日本國民としての大義の嚴存するといふことを、自然の中に悟らせる工夫がなくてはなるまい。

(2) 文章の叙述が、「大和へ進軍になつた神武天皇は、八咫烏をお使として……」となつてゐる。此處で

イ、大和とはどこか

ロ、何のために進軍されたか

ハ、八咫烏とは何か

といふ補充的な談話が必要となり、本文讀解の後には「かういふ樣々な危難を冒されて大和地方を平定せられ、第一代の天皇の御位に卽かれた」といふことを附加へて置く必要があると思ふ。

(3) かうした物語の內容に相應しい力强い筆致をよく讀ませ、敬語の使用に慣れさせたい。

四、指導の實際

▲ 配當時間　五時間

第一時　全文取扱

第二時　最初から、四頁四行まで

第三時　四頁五行から、六頁八行まで

第四時　六頁九行から、終まで

第五時　全文取扱及び練習

R　指導要領

第一時

(1) 本時の主眼

○全文の通讀を主として、物語の筋を捉へさせる。

○「大和へ御進軍」の意義、「八咫烏」の意味を補充談話として與へる。

(2) 指導過程

(イ) 通讀

(ロ) 話合

○「神武天皇」について既有觀念を整理する。

○「どんなお話であつたか」といふ問から、兒童の讀み得た所を發表させる。

(ハ) 通讀

(ニ) 深究

次の問答から、答をノートに筆寫させる。

○神武天皇がどんなことをなさつた時の話か

○大和へ御進軍

○その時に天皇はどんなことをなさつたのか

○兄うかしはどうしたか

○弟うかしはどうしたか

○天皇はどうなさつたか

○兄うかしはどうなつたか

○弟うかしはどうなつたか

○八咫烏

兄うかし

弟うかし

○新しく家を建てゝ

○兄をいさめましたが天皇の所へ參りました

○二人の大將

○亡びました

○天皇に降參

此の語句を中心として物語の筋を捉へさせると共に、「大和へ御進軍」「八咫烏」について、補充談話をなす。

ホ) 通讀

（ハ）練　習

新出漢字の書方を指導練習する。

第二時

(1) 本時の主眼

天皇が八咫烏を使者として遣はされた事から、兄うかしが惡計を回らし、天皇に奏上して、御許しを得たこと。

(2) 指導過程

（イ）通　讀（全文）

（ロ）話　合

ノートについて前時の復習をし、本時教材の範圍を定める。

（ハ）通　讀（本時教材）

（ニ）深　究

問答によつて、

其の地方に勢力を張つて居た

天皇にお仕へ申すやう

物も言はず

すつかりあわてた兄うかしは、しばらく考へて居ました

まことに失禮な事をいたしました

まごころをもつてお仕へいたします

心ばかりのおもてなしをいたしたい

まことにとしやかに

其の顏をお許しになりました。

の語句を書かせ、兄うかしがどんなことを考へ、どんな巧な言葉をもつて天皇を誘ひ申し上げたか、天皇はどうしてお許しになつたか等をよく讀み取らせ、想像させてみる。

（ホ）通　讀

（ヘ）練　習

「其の地方」「勢力を張る」「意外」「心ばかりのおもてなし」「まことしやか」等の意味を明確にすること、敬語の練習等。

第三時

(1) 本時の主眼

兄うかしの惡計を悟つた弟うかしが、兄を叛逆の徒にしたくないと諫言したが聽き容れられず、遂に肉身の兄を捨てゝ天皇に奏上する——私情を棄てゝ大義に就いた弟うかしの眞心を賞せられた天皇は、直ちに二人の大將を差向けられたこと。

(2) 指導過程

（イ）通　讀（全文）

（ロ）話　合

ノートについて前時の復習をし、本時教材の範圍を定める。

（ハ）通　讀（本時教材）

（ニ）深　究

問答によつて

大きな家

「はゝあ、こんな事をして、だましうちにしようとするのか。まことに恐れ多い事だ。」

「もう仕方がない。」

「兄にゆだんなさいますな。新しく建てた家には、大きなおとしがしかけてあります。どうぞ、御用心下さいませ。」

弟うかしのまごころ

おさし向けになりました

の語句を書かせ、「まごころ」の一語の內容として、弟うかしの言葉を吟味し、肉身の兄を捨てゝ大義に就くまでの心持などを十分に想像させたい。

「まことに恐れ多い。」「もう仕方がない。」の二語を貫ぬく弟うかしの心境をよく讀みとらせたい。

（ホ）通　讀

（ヘ）練　習

敬語の使用について特に注意すること

第四時

(1) 本時の主眼

惡計は露顯し、兄うかしは自ら堀つた陷穴に落ちて亡び、弟うかしはその部下を率ゐて天皇に降參

するといふ、本篇のクライマックスであり、大團圓である。

(ニ) 指導過程

(イ) 通　讀（全文及び前時教材）

(ロ) 話　合

ノートについて前時の復習をし、本時教材の範圍を定める。

(ハ) 通　讀（本時教材）

(ニ) 深　究

問答によつて

「兄うかし、出て來い。」

びつくりしました

「お前は、天皇をお迎へして、おもてなしをすると申した　一たい、どういふ風におもてなしをするのか、一つ、此の新しい家にはいつて、やつてみろ。」

氣をのまれてしまひました

すごすごと、家の中へはいつて行きました

あはれな最期をとげて居ました

の語句を書かせ、挿繪と結びつけて、大樽方の威力に漸ちた言葉や態度と共に、兄うかしか、「びつくりしました」から「最期をとげて居ました」までの、苦悶の氣持や、動作など十分に想像させ、最後に神武天皇が大和地方を平定せられて、日本建國の基を開かれるためには、かうした汎ゆる危難を冒されたのであること、然もかう！た危難から救はれることの出來たことも、結局は天皇の御稜威であり、弟うかしの如き國民としての大義を辨へてゐるもののあつたことを悟らせたい。

(ホ) 通　讀

(ヘ) 練　習

「つめ寄りました」「氣をのまれて」「惡だくみ」「最期をとげる」「あらためて」等の語句の意義を明かにすること。漢字の練習。

第五時

(1) 本時の主眼

全文の通讀、文字・語句の應用練習をなし、補充教材によつて、神武天皇御盛業の眞銘を一層深くさせたい。

(2) 指導過程（省略）

五、練　習

(1) 練習文　やた烏

神武天皇は、はじめ日向の高千穗の宮にいらして、天下をお治めになりましたが、日向は政をおきゝめすのにひどく御不便なので、みことのお兄さまの五瀨命と御相談の上、

「これは、もつと東の方へ移つた方がよいでおらう。」

と、軍勢をめしつれて、まづ筑紫國に向つてお立ちになりました。そして岡田宮といふお宮に一年の間おとゞまりになり、さらに安藝國へお上りになつて、多家理宮に七年間おとゞまりになり更に備前へお進みになつて、八年の間、高島宮にお住ひになりました。そしてそこから船をつらねて、浪の上を東に向つてお上りになりました。

東へ〳〵とかぢをとつて、やがて摂津のナミハヤの海を乘りきつて、河内國の、青雲の白肩津といふ瀨へおつきになりました。

するとそこには、大和の鳥見といふところのながすね彦といふものが、兵を引きつれてまちかまへてゐました。天皇は、いざお船からお下りにならうとしますと、急にどつと矢を射向けて來たので、たてをおさり出しになつて、さんざんくる矢の中をくゞりながら御上陸なさいました。そしてすぐにはげしい戰をなさいました。

そのうち　五瀨命が、ながすね彦のするどい矢のために、大傷をおうけになりました。天皇はその傷をおおさへになりな

から、

「わたしたちは日の神の子孫でありながら、お日さまの方に向って攻めかゝつたのがまちがひである。だから、彼等の矢にあたつたのだ。これから東の方へ進まはりをして、お日さまを背中にうけて戦はう。」

とおつしやつて、みんなをめ〳〵集めて、もう一度お船におめしになり、大急ぎで海のまん中へお出ましになりました。

紀伊國の男の水門までお出でになると、お兄さまのお傷のいたみがいよ〳〵はげしくなりました。

「あゝ、くやしい、彼等からおはされた手傷で死ぬのか。」

と、残念そうにおさけびになりながら、おかくれになりました。

天皇はやがて、同じ紀伊の熊野といふ村におつきになりました。

すると、雲の上から神のみ聲がありました。

「大空の神の子よ、こゝから奥へ入つてはいけません。この向ふには、あらくれた神たちがたくさんゐます。今これから私が、やた烏をさし下すから、その烏の飛んで行く方へついてお出でなさい。」

と、天皇をおさとしになりました。

間もなく、おほせの通りやた烏が下りて來ました。命はその烏のあとについてお進みになりますと、やがて大和の吉野川の川口におつきになりました。すると、そこに魚をとつてゐるものがゐました。

「お前は誰だ。」

と、おたづねになりますと、

「私はこの國の神で、名はにへもちの子と申します。」

と、お答へ申上げました。

それから、なほ進んでお出でになりますと、今度は、おしりにしつぽのついてゐる人間が、井戸の中から出て來ました。そしてその井戸がぴか〳〵光りました。

「お前は何者か」

と、おたづねになりますと、

「私はこの國の神で、ゐひかと申す者でございます。」

と、お答へいたしました。

命はそれらの者を、お供におつれになつて、そこから山の中を分けていらつしやいますと、岩をおしわけて出て來た者があります。

「お前は誰か。」

と、お聞きになりますと、

「私はこの國の神で、名はいはむしわくの子と申します。大空の神の御子孫がお出でにゐとうけたまはりまして、お供に加へていたゞきに上りました者でございます。」

と、申し上げました。

命は、そこから、いよ〳〵けはしい深い山をふみ分けて、大和のうだといふところへお出ましになりました。このうだには、兄うかし弟うかしといふ兄弟のあらくれものがゐました。（日本建國物語より抜出）

(2) 家庭學習

（イ） おうちの方に神武天皇のお話をおきゝしなさい。

（ロ） 二月十一日の紀元節、四月三日の神武天皇祭のいはれをおきゝしなさい。

（ハ） 神武天皇をおまつりしてあるお宮はどこにあるか、どなたがにおきゝしなさい。
（ニ） 天皇のお敬ひ申上ることばを、文の中から書取しなさい。

(3) 考査問題

イ、神武天皇のおえらいところはどういふことでわかりますか。
兄うかしはどんな悪だくみをしましたか。さうしてどうなりましたか。
弟うかしのどんな心がけがよいと思ひますか。

ロ、つぎのかん字にかなをつけなさい。
進軍——前に進む　勢力——強い力　仕事——お仕へ申す　雨が降る——降参

ハ、つぎのことばをわかりやすく言ひなさい。
勢力を張る。意外に強い。まことにしやかに言つた。寝も夜も働く。最期をとげる。

ニ、つぎの言葉で短い文をつくりなさい。
心ばかり　すご〳〵　氣をのされる　寝も夜も

二　祭に招く

一、教材

(1) 教材　ニ　祭に招く　・新出漢字　——　讀替漢字（イ）（ロ）……資料解説

此の間、なば様がお出でになつた時、あなたは、おかぜで、二三日學校をお休みになつたとの事でしたが、もうすつかり、

おなほりになりましたか。

さて、此の二十五日は、御承知の通り、私の村の氏神様のお祭です。ちやうど日曜日ですから、二十四日の午後から、ねえさんと二人でいらつしやいませんか。二十四日の晩も、すねぶんにぎやかです。いろ〳〵の店も出ますし、花火も上ります。今年は、うちの畠の柿も、たくさんなりました。どうか、ぜひお出で下さい。母も御待ちして居ます。

十月十八日　　きよ子

かれ子様

返事

お手紙ありがたうございます。私のかぜは、ごくかるうございましたから、二日學校を休んだだけで、なほりました。どうか御安心下さい。

さて、二十五日のお祭には、わざ〳〵お招き下さいまして、ありがたう存じます。姉も大へん喜んで、ぜひ參りたいと申します。ついては、二十四日午後三時頃そちらへ巻く乘合自動車で參りますから、どうか、よろしくお願ひいたします。母よりも、よろしくとの事でございます。さやうなら。

十月二十日　　かれ子

きよ子様

(2) 資料　特になし。

(3) 聯絡

（イ） 手紙文は、いうびん（巻四の一三）に、はがき文の初歩として、年賀状、並に簡單な通信文が採られ、參宮だより（巻五の二）には相當の長篇の通信文を學び、更に日記（巻五の一九）中に、はがき文による夏休中における兒童往復文がある。

（ロ）「祭」は、一ヶ年の兒童生活中に於ける重要な季節的行事であるが、既出の此の種教材には次の如きものがある。

巻一――サクラ（一頁）、テンチヤウセツ（七頁）、ウンドウクワイ（九頁）、　巻二――オ月サマ（二）オ正月（一一）、　巻四――カケツコ（四）、豆まき（一七）、ひなまつり（一九）、　巻五――天長節（四）、鯉ノボリ（六）、遠足（七）、日記（一九）、　巻六――祭に招く（二）、村祭（三）、

（八）女兒らしい陰影に富んだ文としてはじめて現れたもので、七山羊、一七雀の宿、二〇小さい温床、二四東京の一部と連ねて、言葉の微妙な味に注意させたい。

(4) 新出漢字及表記　祭（マツリ）店（ミセ）母（ハヽ）返事（ヘンジ）姉（アネ）

(5) 難語句　さて　御承知　氏神様（ウヂガミサマ、氏神とは（一）自分の氏の先祖の靈を祀る神様のこと。（二）後に地主神（ぢぬしがみ）を氏神といふ樣になつた。でその里に生れた人を氏子といふ）午後　返事　ごくかるい　御安心下さい　ぜひ参りたい　ついては　乗合自動車　よろしくお願ひいたします。

(6) 文章　とゝのつた形式の手紙文としては、巻宮だより（巻五、二）につぐものであり、國語崇敬觀の女兒らしい招待文とその返事である。兒童手紙文のよい範文でもある。

(7) 挿絵　なし。

(8) 教具　なし。

二、教材觀

1「村祭」の讀文を次に控へて、村祭に友を招く手紙の文である。

二人の關係は、從姉妹同士さよ子は農村に住み、かね子は、程遠からぬ町（乗合自動車で一時間乃至二時間とかゝらぬ位の距離）に住むものと見てよからう。

(2) 往文は

一、病氣の見舞を述べ

二、氏神樣のお祭を知らせ

三、二十四日から泊りがけで、姉さんと來て欲しいこと

四、柿も澤山なつたこと

五、母も待つてゐること

復文は

一、手紙の禮

二、病氣が輕かつたこと

三、お招きに對する禮

四、二十四日乗合自動車で姉と共に行くこと

五、お母さんからもよろしくといふこと

かうした文としては、最も普通の書き振りではあるが、よく委曲を盡くし、全面に亘つて如何にも女らしい細やかな感情が流露されてゐる。

三、指導觀

(1) 規格な手紙の文として、最初の発出である。

往文の中心は、「どうか、ぜひお出で下さい。」の一語であり、復文の中心は、「どうか、よろしくお願ひします。」の一語に在ることは勿論であるが、

往文に於ては、

先づ季節の見舞を述べ、二十四日の祝の宴やかうを指し、更に柿の豊山なったことを知らせ、最後に出も待つてゐるといふ一語を加へて、受取るものが、喜んで、絶ち心安く出掛けることの出来るやうに、心の用ひられてゐる點は味ふべきである。

復文に於ては、

御見舞に對する禮を述べ、柿も大くん喜んでゐることから、乘合自動車の時刻を通知し、最後には、その後言も加へて、好意に對して如何に喜び、如何に楽しんでゐるかを表はしてゐる點は、また味ふべきである。

(2) 手紙の文としての指導

一、誰が（發信者）
二、誰に（受信者）
　　} 兩者の關係・住居する所等
三、何時（日附）
四、何を（內容——目的・用件）

等を吟味すると共に、その用件・目的に關しての發信者の心遣ひ——人を招く場合には、受信者が是非行きたいといふ心持になるやうに眞心を籠めて誘ふといふ點な點——を味はせなくてはならない。

四、指導の實際

A　發信者問　三時間

第一時　全文通讀と往文の取扱

第二時　復文の取扱と前回文讀解のまとめ

第三時　練　習

B　指導實錄

第一時

(1)　予習の事實

○全文通讀によつて、手紙の用件、發信者・受信者の關係、住居の場所等を明かにする。

○往文の取扱で、作者の心づかひの現はれた點を吟味する。

(四)　指導實錄

（イ）通　讀（全文）

（ロ）話　合

題目「柿に招く」の「招く」の意義から、手紙の用件を明かにし、「誰が誰を招のか」といふことから、さよ子・かね子の二人の關係、住む所などを考へさせたい。

（ハ）通　讀（往文）

（ニ）深　究

文の體裁に從つて、

●ちうすつかり、お元氣になりましたか

●氏神樣のお祭

ねえさまと二人でらっしやいませんか

チわふんにきやかです

柿もたくさんなりました

どうか、ぜひお出で下さい

母もお待ちして居ます

の語句を書かせ、「この中で、題目から考へてこうしても無くてはならぬ語句は何か」といふ質問から、○○○の二語を捉へさせ、之を中心

に作者の心づかひ等を讀み味はせる。

（ホ）通　讀

（ヘ）練　習

「家」「宅」「母」の漢字練習・「最末知の通り」

「氏神様」等の意味を明瞭にする。

第三時

(1)　本書の主題

○復文の意味

○書簡文の普通文と異る特殊語について調べ

(2)　語句研究

（イ）　通讀（往文）

（ロ）　語句

ノートによつて、前時の復習

（ハ）　通讀（復文）

（ニ）　研究

問答によつて

お手紙ありがたうございます

こちらが、御安心下さい

おそいノを用ゐて下さいましと、おのが父らは

ございます

ぜひ帰りたいと申します。

こちらが、よろしくお願ひいたします。

母さまも、よろしく

の語句を書かせ、「この中で特に大切な語句は何か」といふ意味の質問から、○○○の語を中心として一語を會得すると共に、前書ノートした語句と對照して、「返事」といふものの内容を明瞭にした。

（ホ）　通讀（復文及び往文）

（ヘ）　整理、練習

手紙の文と普通の文との異る點

返事に認むべき要點

等について、本文及びノートそれを主要語句について整理する。

「頂」「事」「後」の漢字練習、「お願ひ下さい」

「まして」「ございます」等の語句の

意味を明瞭にすること

第三時

(1)　本書の主題

書用文を讀み、手紙文獨特の意味をたす。

(2)　語句研究（本書）

五、授　業　案

(1)　書簡文　見本書

昨、年そこつで失礼をしましたのに、重ねまたのお手紙を頂きまして、有難く存じます。

「失礼をいたしました。」

さて、ちょうどそこへ

「ごめ、ごめんで来ました。」

と、にぎ〜しがら言つた。父さんが

「いれかはり年で百姓三人ちの見学者を見に行かう。」

とおつしやつたので、私たちは大喜びで

「早く行かう、早く行かう。」

と、せきたてた。兼吉がすぐ立つてから、父さんとひかさんと私と三人で出かけた。

第一番に本田社行きの車に乗つた。大きな家が四軒、高い塀を回らして見物人をよこさぬようにしてあつた。塀にはは

「人こみで何とも見えない。」

と、言つて父さんひかさんにおぶされて見てゐた。塀は人こみのあたりはかすかに開く程で見た。

それから、たくさんの人にもまれながら、つぎの方へ歩き出した。ウキ〜、キク〜、ヒー〜、トル〜と言つて

りひゞく音と、其所此所で太鼓をはり上げて一生けんめいに見物人を呼びあつめる聲とが、いりまぢつてやかましいほどにぎやかである。

僕たちはねことわすみの見世物に入つた。白いねずみが、白ぶちのねこにだかれて、赤いふとんの中でねたり、白いべつのねずみがはたをくはへてはこんだり。三メートルもある長いはしごに上つて戸を明けたり、人力車に人形を乘せてひつぱつたり、其のほかいろ〳〵なげいも見た。

其所を出て、今度はもう獸の小屋に入つた。もう獸使がおぼかみやくまを棒でつついて、怒らせると、恐ろしいうなりごえをたてゝ怒る。ライオンもへゆもゐた。それに二メートルぐらゐのわに、どうのまはり三十センチ程の大ぢやもゐたが、どれも動かない、父さんに聞いたら

「寒さによはつて動けないのだらう」

とおつしやつた。

この小屋で人形しばゐも見た。岩見重太郎といふどうけつが、ひひをたいぢする勇ましい所だつた。重太郎は大きなひひ二匹と一生けんめい戰つた。時々赤い大きなひひの口にかまれさうになつてあぶないことがあつたが、二匹ともさしころしてしまつた。勇しくて面白かつた。妹たちもとても面白かつたと喜んだ。

此所を出てまた人ごみにもまれながら見世物小屋のかんばんをみてあるいてみると、「ドドン、ドン　ドン」

と、おみこし樣がお通りになるたいこが聞えて來た。

（見宜作）

(2) 家庭學習

イ、今までお習ひした手紙の文には、どんなものがありましたか、しらべなさい。

ロ、このお手紙をあなたのお友達に出すつもりで、紙に書いて、封筒に入れてごらんなさい。

ハ、この手紙文の言葉遣で、女らしいと思はれる言葉は、どれどれですか。

(3) 考査問題

イ、さよ子さんの手紙を讀んで、つぎの問に答へなさい。

○ 誰から誰に出したお手紙ですか。

○ 大切な用向として何が書いてありますか。

○ お祭は何月ですか。どこのお祭ですか。

○ その外の二十四日には、どんなことがありますか。

ロ、かね子さんからの返事を讀んでつぎの問に答へなさい。

○ なぜはじめに「お手紙ありがたうございます」と言ふたのでせう。

○ かね子さんはねえさんを「姉」かあさんを「母」とよんでゐます。なぜかう言つたのでせう。

○ 「かぜが、ごくかるい」といふのは、どういふ意味ですか。

三　村　祭

一、教　材

(1) 教材　三村祭　・新出漢字　——　讀替漢字（イ）ロ）…實料解說

村の鎭守の神樣の、
今日は、めでたいお祭日。
どん〳〵ひやらゝ、

どんひやらゝ、
朝から聞える笛たいこ。
年も豐年滿作で、

村はそう出の大祭。
どん〳〵ひやらゝ、
どんひやらゝ、

夜までにぎはふ宮の森。

治る御代に、神様の　　恵あふぐや、村祭、
　　どん〳〵ひやらゝ、　　どんひやらゝ、
　　聞いても、心が勇み立つ。

(2) 資料　特になし。

(3) 連絡　兒童生活に重要な季節的行事としての「村祭」に關しては前課の本項を參照されたし。

(4) 新出文字及表記

イ、今日（ケフ）笛（フエ）作（サク）代（ヨ）恵（メグミ）

ロ、本課ではじめて現れた特殊な讀替「今日」の如きものは、本讀本編纂者はなるべく高學年に掲出する意向から、本卷では此の外に「明日（一一〇頁）」「上手」（一一四頁）」「心地」（一三五頁）の三ヶ所より現れてゐない。

(5) 難語句　鎭守（一）兵をおいてその地をしづめ守ること。鎭守府などその意（二）その土地をしづめ守つてゐる神様即ちうぶすなの神のこと）豐年（穀物のみのりのよいこと）滿作（米などのよくみのること）そう出（全部の人の出ること。）にぎはふ　治る御代　恵あふぐや（恵とはなさけまたはあはれみ。あふぐやのやは感動の助動詞）

(6) 文章　七五調、一聯四節、三聯から成立つ韻文で古風な素朴さをもつてゐる。

(7) 挿絵　村祭の有様を印象的に象徴的に描いたものである。十四頁は鎭守の森に鳥居・幾等が見える。十五頁は豐年滿作の平和な村の有様。この絵によつて詩の氣持を十分に觀賞せしめたい。

二、教材觀

(1) 前課「祭に招く」と連絡し、村祭の賑はしさと、村人の躍る喜びとを卒直に歌ひ出たもので、內容は古風だが、素朴な韻文である。

從來、文部省編纂の「尋常小學唱歌」に載せられたもの——但し「どん〳〵ひやらゝ、どんひやらゝ」の部分が繰返しになつてゐたが——曲も極めて輕快で、子供達が喜んで歌つたものの一つである。

(2) 七五調、一聯四節、三聯から成立ち、然も各聯の各節を次のやうに對照してみると、作者の措辭に於ける工夫等が明瞭となる。

第一聯
節一　村の鎭守の　神様の
節二　今日はめでたい　お祭日。
節三　どん〳〵ひやらゝ　どんひやらゝ
節四　朝から聞える　笛たいこ

第二聯
年も豐年　滿作で
村はそう出の　大祭。
どん〳〵ひやらゝ
どんひやらゝ
夜までにぎはふ
宮の森

第三聯
治る御代に
神様の
恵あふぐや
村祭。
どん〳〵ひやらゝ
どんひやらゝ
聞いても心が
勇み立つ。

即ち第一、第二聯は村祭の賑やかな光景を如實に描き出したものとすれば、第三聯は神の恵みを讃へて、全村民が神を祀るといふ一事に一心協和、共に勇み立つてゐる氣分を卒直に表出したものであるといつてよい。更

第二節で「めでたいお祭日」第三節で「書物の語るふるさと祭」の三節を通じて、祝祭に参与する人の気持が明確にされてゆく。何を節に表現されてゆく「こんにちはやまんばあさん」は、祝祭に参与する人の心の共象的な現はれと見ることが出来よう。

三、指導觀

(1) 第一節に於て、先づ「鎮守の森祭のめでたいお祭日」であること、第二節に於て、「今年は豊年で！豊富やれる祭」であること、第三節に於て、「家代に生れ、書の語を聞いて生きて行くことの出来る幸せ」を喜び、終りその心持が「こんにちはやまんばあさん……」の歌に籠められてゆくことを学ばせたい。

(2) 音読に熟達し、書物に親れ、全体の人々が集ひ合つて自分達の仕事の上に、書物を活用して行かうとする——書を記る者も読者にあり、書に生きる生活も出現に於ける。本談の前後の関係にからした心持を語ることが大切である。

(3) 十分に朗読させ、美しの心をリズムに乗せて表出させることが大切である。

四、指導の實際

A 配当時間 二時間

第一時 全文通読 教室

第二時 全文通読 書面 黒板

B 指導要領

第一節

(1) 学習の目標

○全文に流る雰囲気を、美しの心持を中心として味はせ、更に朗読する。

○漢字・語句の練習

(2) 学習指導

(イ) 黙 読

(ロ) 話 合

書物、中心として吟味した「どんなお祭か」「何故こんなに豊やかなのか」「どうしてお祭をするのか」といつた様な語句について、相談と連絡し、見事の表象に活用して理解させたい。

第三節——「どうして祝祭が行はれるか」といふ問を中心として、「治る時代に、書物の恵まるゝこと、祝祭」の句の意義を明かにしたい。

(ホ) 黙 読

第二節

(1) 学習の目標

○全文に流る雰囲気を、美しの心持を中心として味はせ、更に朗読する。

○漢字・語句の練習

(2) 学習指導

(イ) 黙 読

(ロ) 話 合

相談に連絡して話合を進め、見事の表象に結合して、楽しい、嬉しい祭の気分を想起させる。

(ハ) 練 習

全文練習。一時間に適方練習を加へて

(ニ) 研 究

第一節——「どんなお祭か」といふ問を中心として、「めでたいお祭日」であることを明かにし、見事の表象に結びつけて、祭の様子を想像させる。——「鎮守の森祭」の意味を明かにする。

第二節——「なぜこんなに豊やかなのか」といふ問を中心として、「年も豊年満作」の意味を明かにし、友までこんな風に暮はつてゆく全文の朗読から感銘をさせ、書の意味を明かにする。

合をする。

（八）通　讀

（ニ）深　究

「三つの歌にあると同じ言葉は何か」といふ問から、どん／＼ひやら〻どんひやら〻の句を取らせ。

五、練　習

(1) 練習文　みな神さまが

一

かゞやくもの
きれいなもの
大きなけものも
小さなけものも
かしこいのも
ふしぎなものも
みな神さまが
おつくりになつた。

二

咲きみだれてる
小さな花の
うたうたつてる
小さな鳥の
もえるような色も
かはいゝはねも
みな神さまが
おつくりになつた

三

むらさきがかつた
高い山だの
遠く流れる
長い川だの
密にまつかな
夕日や朝日
みな神さまが
おつくりになつた。

四

冬のあひだの
つめたい風や

「何の音か」「誰がしてゐるのか」「どんな氣持で」「聞いてゐる人の心持は……」等の問によつて、村人達の喜びの心持を味はせたい。

（ホ）暗　誦

（ヘ）練　習

夏のあひだの
たのしい光
またおにはの
うれたくだもの
みな神さまが
おつくりになつた。

五

青い林に
そびえてゐる木も
ぼくらの遊ぶ
廣い野原も
毎日つんでる
とうしん草も
みな神さまが
おつくりになつた。

六

神さまはぼくらが
さうしたものを
ながめるために
目を下さつた。
また神さまの
おえらい力を
たゝへるために
口を下さつた。

（世界童謡集）

(2) 家庭學習

イ、あなたの村のお祭はいつですか。

ロ、お宮はどこにありますか、何といふ神様をおまつりしてありますか。

ハ、あなたの村のお祭のやうすを詩か文につゞりなさい。

ニ、此の詩を文に書直しない。

(3) 考査問題

イ、この詩を讀んで、つぎの問に答へなさい。

○ にぎやかなやうすが現れてゐることばはどれですか。

○ 村の人々が大そうよろこんでゐるやうすのわかることばはどれですか。

○ 村の人々が、お社を大切にしてゐる心持がどこでよくわかりますか。

ロ、次のかん字に讀がなをつけなさい。

村祭の笛たいこ　治る御代　神様の惠　遲事　母と姉　降參　寢も夜も働く　願を許す　家を建てる　勢力を張る

ハ、つぎのなりものの音をかなで書きあらはしなさい。

かね　すゞ　ラッパ　オルガン　ピアノ

四磁石

一、教材

(1) 教材　四磁石

・新出漢字　――　讀書漢字（イ〈ロ）……資料參照

エンガハテ、雜物ヲシテイタフシヤクダオバアヽンガ、針ヲ落ジニナッタ。

見ルト、針ハ、エンガハノ板ト板トノスキ間ニ、落チコンデ居ル。次バシノ先アカキ調サウトシタガ、スキ間ガセマクテナカ〳〵取出セナイ。フト、ユフベオ宮ヘ參ッテ、ニイサンニ貰ッテイタダイタ磁石ノ事ヲ思ヒ出シタ。急イデ取ッテ來テ、針ノ上ヘ持ッテ行ッタ。スルト、針ハ、生キ物ノヤウニ、ピョントトビ上ッテ、磁石ニクッ着イタ。見テイラッシヤクタオバアサンハ、「アリガタカ、オ前ハ、ナカ〳〵ヂエガアルネ。」トホメテ下サクタ。

ソレカラ、磁石デ、イロ〳〵ナ物ヲ吸着ケテアソンダ。ピン、ブリキノオモチヤ、釘、柄アモコク吸着ク。中デモ、オモシロカッタノハ、釘ダ。磁石ヲソバニ持ッテ行クト、コロ〳〵トコロガッテ來テ、ヒッツクトクッ着ク。後ニハ、磁石ヲ釘箱

ノ中ヘ入レテ、カキマハシタミタ。スルト、小サイ釘ガ、磁石ニタクサン着イタ。中ニハ、釘ノ先ニ、外ノ釘ガブラ下ッテ居ルノモアル。タダ、鋼ノ釘ハ、イクラ磁石ヲ持ッテ行ッテモ、クク着カナイ、ソコヘ、チャウド、ニイサンガオ國デニナッタノデ、聞イテミタラ、

「磁石ハ、鐵ヤニッケルハ吸着ケルガ、銅ヤ、眞鍮ヤ、アルミニウム　吸着クナイ。」

トオッシヤッタ。サウシテ、

「オモシロイ事ヲ教ヘテ上ゲヨウ。ソレヲ、砂ノ中ヘッッコンデゴラン。」

トオッシヤッタ。

砂カラ取出シテミルト、黑イ粉ノヤウナモノガ、磁石ニ一面ニ着イテ居タ。先ノ方ニハ、コトニ、タクサン着イテ居タ。

コレハ、砂ノ中ニアル砂鐵ガ、クッ着タノダサウダ。

(2) 資料

磁石　磁石は鐵を引きつける性質を持ってゐる。この性質を磁氣といひ、磁氣を持ってゐるものは一般に磁石と呼ばれてゐる。だから磁鐵鑛の様なものも磁石といはれる。この磁氣を持ってゐる現象を磁氣感應或は磁氣誘導といふ。磁石は磁鐵鑛の様な天然のもの外に人工的に製作せられたものがある。即ち人工磁石で、その形狀は色々あるが、大見使用の目的によって、馬蹄狀・棒狀・針狀の三種に分けられる。

これを製作するには電磁石の様な強い磁石の傍に鋼鐵を近づければ出來る。軟鐵では磁石の傍にある間は磁氣を持ってゐるが、遠ざけるとその性質を失ってしまふ。故に鋼鐵製のものを「永久磁石」といひ軟鐵製のものを「一時磁石」といふ。鐵の外にニッケルやコバルトも磁氣をおびるがその力が弱い。

一つの棒を大磁石の北極（N）に近づけると、その磁の磁石に近い端が南極（S）となり反對の端が北極（N）となる。かゝる性質を當磁性體といふ。これと逆って、黃銅とか銅の様なものは磁石に近い方の端が同じ極になり、反對側が異った

極になる。かゝる性質のものを、反磁性體といふ。故に磁石に觀か近づければ吸ひつくが、蒼鉛を近づけると近い端が同じ極になるから撥ねつける。

(5) 連絡

（イ）本課の如く兒童生活に現はるゝ科學的觀察又は、その萌芽を教材としたもので、既に學習されたものの中特に目立つものに、次の樣なものがある。

巻一――デンワアソビ（二四頁）　ハコニハ（三八頁）　巻二――キシヤ（一九）　巻三――自動車（二一）　むしば（二三）　巻四――月と蛍（七）　いうびん（一三）　北風ト南風（二〇）　巻五――おたまじやくし（三）　動物園（九）　雲（一一）　水の旅（一五）　クモノス（一七）

尙本巻で現れるものとしては、磁石（四）　僕の望遠鏡（九）　小さい温床（二〇）　潜水艦（二二）などがある。

(4) 新出文字及表記　鍵（ヌヒ）　板（イタ）　釘（クギ）　銅（ドウ）　砂（スナ）　粉（コ）　砂（サ）

(5) 難語句　落チコンデキル　カキ出ス　磁石　生キ物ノヤウニ　チエ　吸着ク　カキマハス　銅　鐵　ニツケル　眞鍮　アルミニウム　砂鐵

(6) 文　章　國語常體の文章で、綿密な觀察力がよく現れてゐる。

(7) 挿　繪　十七頁おばあさんが條の板のすき間に落した針を作者が磁石をもつて取出してゐるところ。持つてゐる磁石は馬蹄型磁石である。針がぴんととび上つて磁石にくつ着いた瞬間であらう。

十八頁作者が磁石を釘箱の中へ入れてかき廻したあと磁石に澤山の釘がくつ着いて出たところ。釘に釘がついて下つてゐるのは磁氣感應によつて釘が磁氣をおびたからである。

(8) 教　具　馬蹄形磁石及鐵、銅、アルミニウム片、砂鐵

二、教材觀

(1) 前課に連絡し、作者が祭の夜店で買つて載いた磁石によつて、板の隙間に落した針を取出し、釘や玩具を吸着かせ、砂の中の砂鐵を吸着かせて遊んだ――兒童の生活に見出される遊びを捉へた興味ある理科的教材である。（舊國語讀本にも「磁石」の教材はあつたが、本課はその材料を一層豐富にすると共に、叙述も亦具體的となり、兒童の生活に一層近いものとなつてゐる）

(2) 文の叙述は、

一、祖母さんが縫針を落した

二、作者が磁石で取上げて、祖母さんにほめられた

三、色々なものを吸着けて見たが、釘を澤山吸着けたのが殊に面白かつた

四、兄さんから「銅や眞鍮やアルミニウムは吸着かない」といふことを教へられた

五、兄さんから教へられて、砂中の砂鐵を吸着けた

といふ展開になつてゐるが、作者がかうした現象に飽くなき興味を持つて觀察し、疑問を解決し、生活に利用としようとする態度が、一篇の主流となつてゐる

尙、科的順序からいへば、

一、兄さんに磁石の性質を聞き

二、自分でそれを實驗して見

三、祖母さんの針に應用してみる

といふのが普通であるが、文學的な表現に於ては、反つてこの逆に進めた方が變化もあり、又自然である。

三、指導觀

○この一文を通して作者の態度を觀ると、

第一に作者は磁石に對して、「磁石は金物を引く力がある。」といふことが解つてゐたのであるが、之を利用して、板の隙間に落ちた針を取上げようとした所に、研究的な態度を見ることが出來る。

——文中、「フト、ユフベオ宮ヘ參ッテ、ニイサンニ貰ッテイタダイタ磁石ノ事ヲ思ヒ出シタ。」の個所が重要な意義を持つ個所となつてゐる。

第二に釘に對する實驗であるが、特に「釘ノ先ニ外ノ釘ガブラ下ッテ居ルノモアル。」といふ點から、磁力の感應性を發見した點。

第三に、銅の釘が吸着けられないのを知つて、兄さんに質疑し、「磁石ハ鐵ヤニッケルハ吸着ケルガ、銅ヤ眞鍮ヤ、アルミニウムハ吸着ケナイ」といふ知識を得たこと。

——文中、「ニイサンガオ出デニナッタノデ、聞イテミタラ」の一句は作者の態度を表現した重要な句である。

第四に、砂の中に磁石を突込んでみたことから、砂の中に砂鐵といふ黑い粉のやうなものが入つてゐること、及びその着き方から、磁石は尖端ほど磁力の强いことを發見したこと。

など、科學的に發展されて行く、研究的な態度を隨所に見出すことが出來得るのである。

教授者はまづこの點に着眼し、こゝに讀みの重點を置いて取扱はなくてはならない。

○故に取扱の實際に於ても、常に兒童をこの態度の上に立たせ、作者は如何にして磁石に對する樣々な新知識を得、之を生活に利用したか等を發見させる態度で讀解させなければならない。

四、指導の實際

A 配當時間　三時間

第一時　全文取扱

第二時　最初から十九頁三行まで

第三時　十九頁四行から最後まで、練習

B 指導要領

第一時

(1) 本時の主眼

全文の通讀を主として、叙述の展開を明かにする

(2) 指導過程

(イ) 通讀

(ロ) 話合

磁石に對する各有の經驗——「どんなことを知つてゐたか」「不思議だと思つたことはないか」本文を讀んでの理解——「この文を讀んで始めて知つたことはないか」等について。

(ハ) 通讀

(ニ) 深究

問答によつて、叙述の展開を現はす重要な語句を書取らせる。

針ヲオ落シニナッタ。

ピョントトビ上ッテ、磁石ニクッ着イタ。

イロイロナ物ヲ吸着ケテアソンダ

銅ノ釘ハクッ着カナイ。

黑イ粉ノヤウナモノガ、磁石ニ一面ニ着イテ居タ。

之によつて、針を吸着けて取つたこと、釘や玩具などを吸着けたこと、銅の釘はどうしてもくつ着かなかつたこと、砂の中の砂鐵を吸着けたことなど、作者の生活を概觀させる。

（ホ）通　讀

（ヘ）練　習

新字の書方指導練習。

第二時

(1)　本時の主眼

○作者が祖母さんの落した針を磁石を使つて取上げ祖母さんに褒められたこと

○磁石で色々な物を吸着けて遊んだ――その中で釘が轉がつて來てくつ着く興味と、磁力が釘に移つて、他の釘を吸着けることの發見。

(2)　指導過程

（イ）通　讀（全文）

（ロ）話　合

前時ノートした語句を中心として話合をし、本時教材の範圍を定める。

（ハ）通　讀（本時教材）

（ニ）深　究

問答によつて。

針

火バシノ先デカキ出サウトシタガ

磁石ノ事ヲ思ヒ出シタ

針ハ、生キ物ノヤウニ、ピョントトビ上ツテ

「アリガタウ。オ前ハ、ナカ〳〵チエガアルネ」

イロ〳〵ナ物

何デモヨク吸着ク

釘

コロ〳〵トコロガツテ來テ、ピシヤツトクツ着ク

釘ノ先ニ、外ノ釘ガブラ下ツテ居ル

の語句を書取らせ、之を中心として。

「この人は磁石についてどんな事を知つてゐたか」

「それをどんな風に上手に使つたか」

――祖母さんがちゑがあるといつたのは――

「いろ〳〵な物とは何であつたか」

「釘はどんな所が面白かつたのか」

「こゝでこの人が始めて見つけたことはどんなことであつたか」

等について讀み取らせたい。

（此の場合文章に結合して挿繪の取扱は勿論、實演を試みることも必要である。）

（ホ）通　讀

（ヘ）練　習

漢字及び語の應用練習。

第三時

(1)　本時の主眼

○銅の釘のくつ着かなかつたことから疑問を起し、兄さんへ對する質問から、磁石の性質に對する新知識を得、更に兄さんに指導されて砂中の砂鐵を吸着かせ、砂の中に砂鐵といふものあることを知ると共に磁石は尖端が吸引力の強いといふ新しい事實を發見するに至つたこと。

○磁石の性質のまとめて、作者の態度を讀みとることを主として、全文の統一。

(2)　指導過程

（イ）通　讀（全文、前時教材）

（ロ）話　合

前時のノートを中心として復習

（ハ）通　讀（本時教材）

（ニ）深　究

問答によつて、

銅ノ釘ハクツ着カナイ。

「磁石ハ、鐵ヤニツケルハ吸着ケルガ、銅ヤ、眞鍮ヤ、アルミニウムハ吸着タナイ。」

砂ノ中

一面ニ着イテ居タ

先ノ方ニハ、コトニ、タクサン着イテ居タ

砂鐵ガタツ着タノダサウダ

の語句を書取らせ、之を中心として、

「どういふものがくつ着いて、どういふものがくつ着かなかつたか」

「砂の中に入れて見たことで、どんなことがわかつたか」

等を確かめると共に銅、鐵・ニツケル・眞鍮・アルミニウム・砂鐵等の金屬に對する兒童の知識を纒め、それがどんなものか、どんなものに使はれてゐるかを一通り明かにする。

（未）通　讀

（へ）全文の統一

○「此の人は磁石についてどんなことを知つたか」

五、練　習

(1) 練習文　磁石遊び

一、針でも細い針金でもよろしい。兩はしに少し太いキビカラをみぢかく切つてさします。これがたくさん出來たら、それを積み上げます。それからじやんけんで順番をきめて、磁石でこの針を一本一本すひとらうといふのです。一番たくさんとつた人が勝ち。ただしとる時他の針をちよつでも動かすと、磁石は次の人に渡さなくてはなりません。そばの針が動くまでいくらとつてもよろしい。

二、畫用紙の上にセルロイドの小さな人形をなどらせます。先づ小さなセルロイドの人形か、キビカラをみぢかく切つたのといふ質問から磁石の性質について纒め

○「此の人はどうしてこんなことを知ることが出來たか」といふ質問から、作者の研究的、發見的な態度を讀みとらせたい。

——特に「磁石ノ事ヲ思ヒ出シタ」「中デモ、オモシロカツタノハ」「聞イチミタラ」「砂鐵ガクツ着クノダサウダ」等の言葉を吟味することが大切である——

（ト）練　習

練習問題（別掲）による。

を川意して、そのそこへ小さなブリキ板をつけます。それを紙の上において紙の下に磁石をもつていつて、ちようど紙のうらをこすりまはすやうにします。いろ〳〵な形の人形がおもしろいなどりをします。

三、ペン先を磁石にくつつけておきます、しばらくしてそれをお茶わんの水にそつとうかせます、そして針が釘をそのペン先にちかづけてごらん。ペン先がどうすが。

（國民理科抄）

眠つてゐるの

お日樣が、かくれますと、
お月樣が、空に出ます。
けれども、お日樣はまた出ます。
すると、お月樣がかくれます。
花は眠つてゐます。
けれども、死んだのではありません。
氣持のいゝ朝になりますと。
元氣よく目をさます。

冬が來ますと、
花は死ぬのでせうか。
いえ、そうではありません。
ただ、かくれてゐるのです。
しもと、雪の下に、
冬は、夏のかげに。
夜はお日樣のかげに。

（）家庭學習

イ、此の文を讀んで、あなたは磁石について、どんなことがらを知りましたか。

ロ、磁石を持つてゐたら、この通りじつけんしてごらんなさい。

ハ、この文のやうに、何か一つじつけんしてごらんなさい。

（）考査問題

イ、作者は、磁石について、何々を知りましたか。

四、つぎの□の中にことば入れなさい。

○板のすき間におちた針の上に□を持つて行くと、針は□のやうにぴょんととび上つて、□にくつ着いた。

○釘のそばへ□を持つて行くと、□ところがつて來て、□とくつ着く。

八、金へんのつくかん字を五つ書きなさい。

ニ、「フト」「コトニ」のことばをつかつて、短い文を一つづつつくりなさい。

一、教材五　稲刈

(1) 教材　五　稲刈

・新出漢字　――　讀音漢字（イ）（ロ）…　資料解說

學校がすむと、すぐ、たんぼへ行つた。今日は、うちの稲刈だ。よい天氣で、あちらでもこちらでも、稲を刈つて居る。田のあぜに、むしろを敷いてもらつて遊んで居た弟が、遠くから僕を見つけて。

「にいちやん。」

と大喜びである。

「ただ今。」

と言つて、僕はかばんを下す。

稲を刈つて居られたおとうさんとおかあさんは、腰をのばして。

「やあ、もう學校がすんだか。早かつたな。」

「そこのかどの中に、おいもがあるから、二人でおあがり。」

と言はれた。

むしたさつまいもをかごから出して、弟と一しよにたべた。

稲がだん〳〵刈られて來るせるか、いなどが、たくさんこちらへ飛んで來る。さうして、稲の葉や茎に止る。取らうとしても、なか〳〵つかまらない。

大きなのが一匹、すぐそばの稲の葉に止つた。そつと近づくと、くるりと葉の裏へ廻つて、足の先だけ見せて居る。右の手で、すばやく、葉と一しよにつかまへた。左の手で、頭のあたりをつかむと、後足をふん張つて、逃げさうにした。あわてて、ぎゅつとつかんだら、後足が取れてしまつた。下に置くと、飛べないので、地面をはつて歩く。

弟は、いなどを飼つて置くのだと言つて、田の土で囲をこしらへた。いなどは、せまい囲の中から、外へはひ出さうとする。

「此の牛は、しやうがないぞ。」

と、大きな聲で、弟がひとり言を言ふ。弟は、牛を飼つて居るつもりなのである。僕は、なかしくなつて、ふき出した。

赤とんぼが、すい〳〵と、空を飛んで居る。

ざく〳〵と、稲を刈る音が聞える。僕も、何か手傳はうと思つて、おとうさんやおかあさんの方へ行つた。刈つたあとには、くゝつた稲の束が田の上に並べてある。

おかあさんは、刈るのをやめて、稲束をまとめて、稲がけの方へ運び始められた。僕も、少しづつ持つて運んだ。

一人ぼつちになつて遊んで居た弟が、たいくつして、

「あゝん。」

と言つた。おかあさんが、

「お前行つて遊んでやりなさい。」

と言はれたので、僕は、又弟の方へ行つた。それから、夕方まで、弟と一しよに遊んだ。

(4) 資料

(イ) いなご　昆蟲であつて蝗蟲科に屬してゐる。害稻の蟲としてよく知られてゐる。前翅が長くて尾端に超えてゐるものを「親長いなご」といひ短くて尾端に達しないものを「小親いなご」と呼んでゐる。共に全體綠色であつて、胸部の兩側に各一本の太い縱條がある。前者は本州以南印度、ジャバ等の熱帶地方にまで廣く分布し、後者は臺灣位までにとどまる。內地に於ては年に一回發生し主に禾本科植物、殊に稻・蘭草等に大害をなしてゐる。

(ロ) あかとんぼ　身體の赤色を呈するとんぼ類の通稱。即ち「なつあかね」「あきあかね」等の如き「あかね屬」をいふ。古來「赤卒」と記されたものと略ぼ同義であるが、「しやうじやうとんぼ」(猩々蜻蛉)にあてられたことがある。

(3) 連絡　本卷から現れた特色の一つである農村に取材した教材である。本卷には此の外に　村祭(三)　山羊(七)　牛かへ(一二)　火事(一八)　などがある。が、尙卷五までに現れたもので、特にこれに近いものには、次の樣なものがある。しかしそれ等と本課の「稻刈」と比較すると、本課の方がずつと田園情調がにじみでてゐる。

卷一——ソラガヘレタ(一二頁)　ヒバリ(一三頁)　オツカヒ(二二頁)　ホタル(三二頁)　ホシ(四六頁)　卷二——山ノ上(一)　オ月サマ(四)　クンチヤン(七)　ユキ(一四)　卷三——春が來た(一)　とび(四)　長い道(二二)　卷四——ヲヂサンノウチ(八)　ユイサンノ入營(一四)　卷五——遠足(七)　蠶(一一)　田植(一二)

(4) 新出漢字及表記　稻刈(イネカリ)　數(シ)いて　遊(アソ)んで　飛(ト)んで　裏(ウラ)　廻(マハ)つて　飼(カ)つて　園(カコヒ)　ひとり言(ゴト)　東(タバ)　運(ハコ)び

(5) 難語句　稻刈　たんぼ　あぜ　むしたさつまいも　いなご　すばやく　あわてる　地面　ひとり言　ふき出　じた手傳はう　まとめる　一人ぼつち　たいくつ

(6) 文章　國語の常體である。對話の言葉遣が從來よりもずつと砕けて、親子、兄弟の情愛がよく現れてゐるやうだ。

(7) 挿絵

二十二頁　作者が學校をひけてから、すぐ、たんぼへ出かけて行つた有樣である。本文の（弟が遠くから僕を見つけて「にいちやん」と、大喜びである。「たゞ今。」といつて僕はかばんを下す。稻を刈つて居られたおとうさんとおかあさんは、腰をのばして、「やあ、もう學校がすんだか。早かつたな」云々）の場面である。この繪を通して一定總出の稻刈と、その雰囲氣とをよく觀察せしめなければならぬ。背景の稻かけや鳴子についても注意すべきである。

(8) 特に必要なきも、稻作なき地方にては學習資料として、稻作に關する繪畫・寫眞あらばよろし。

二、教材觀

(1) 「稻刈」といつても、稻刈そのものの說明でもなければ稻刈の情景の描寫でもない。所謂子供の生活材料で「稻刈の日」とでも表した方が適當であらう。作者が父母の稻を刈つてゐる傍で、弟を遊ばせてやつたといふ、長閑な田園を背景に、平和な親子四人の生活、然も微笑まれるまでに親愛の情の溢れた幼い兄弟の睦み合ひ——かうした和やかな叙述であると思はれる。

(2) 叙述の展開は、

一、學校がすむと、すぐたんぼへ行つた。

——今日は稻刈なので家には誰もゐない。朝學校へ行く時に、父母からさう言はれてゐたのであらう。

二、弟が遠くから見つけて大喜びをする。

——兄さんの歸りをどんなにか待つてゐたゝとでおらう。

三、弟と一人でむしたさつまいもをたべる。

——父母の心づくし、どんなにかおいしかつたことか。

四、いなごを一ぴきやつとつかまへて弟にやる。

——いなごをつかまへる若心。

五、いなごを貰つた弟の喜び。

——いたごを牛にしてゐる弟らしい心持。

六、赤とんぼが飛ぶ。

——秋晴の空の心地よさ。

七、稻刈を手傳ふ。

——少しでも父母の手傳をしようとする心

八、再び弟と遊ぶ。

——兄さんに行かれた弟の淋しさ、兄さんの仕事はやはり幼い弟を遊ばせて、父母が十分に働くことの出來るようにして上げることにあつた。

三、指導觀

(1) 赤蜻蛉のすい〳〵と飛ぶ秋晴れの空、稻刈を中心として和やかな田園生活の氣分をまづ讀まなければならない。

然して作者の弟に對する優しい情愛、作者に對する父母の優しい心遣、弟の子供らしい姿……かうした微笑ま

れるまでに和やかな心情の表現として、全文を讀み味はせると共に、兄弟の愛を包むに親子の愛があり、その二者を包んで自然の愛がある。かうした淨化された田園趣味に兒童を十分浸らせることが大切である。

(2) 挿繪に現はされた田園の氣分、作者を中心としての父母、弟の顏や態度に現はれてゐる氣持、はてはむしろの上に置かれた藥罐や、さつまいものかごまで、文章と結合して十分に讀ませなくてはならない。

四、指導の實際

A 配當時間 四時間

第一時 全文取扱。

第二時 最初から二十三頁二行まで。

第三時 二十三頁三行から二十五頁三行まで。

第四時 二十五頁四行から最後まで。全文

B 指導要領

第一時

(1) 本時の主眼

全文の通讀を主として事實的方面の概觀をする

(2) 指導過程

(イ) 通讀

(ロ) 話合

題目を中心として

○どんな景色が見えるか

○稻刈をしてゐるのは誰か

○この文を書いた人はどんな仕事をしたか

といふやうな點について話合をする。

(ハ) 通讀

（ニ）深　究

問答によつて

うちの稲刈

弟

おとうさんのおかあさん

さつまいも

いなご

赤とんぼ

稲束を運ぶ

夕方まで

等の語を書取らせ、之を中心として叙述されてゐる事實について概覽する。

（ホ）通　讀

（ヘ）練　習

新出文字の書方指導

第二時

(1) 本時の主眼

挿繪と連絡し、作者が見た弟の喜びと、父母の優しい心づかひとを讀ませ、本課の冒頭すでに情景の溢れた生活から展開されてゐることを讀みとらせたい。

(2) 指導過程

（イ）通　讀（全文）

（ロ）話　合

前時のノートを中心にして復習し、本時教材の範圍を定める。

（ハ）通　讀（本時教材）

（ニ）深　究

問答により、

すぐ、たんぼへ行つた

遠くから僕を見つけて、

「にいちやん」

「たゞ今。」

「やあ、もう學校がすんだか、早かつたな。」

「そこのかごの中に、おいもがあるから、二人でおあがり。」

弟と一しよにたべた

等の語句を書取らせ、挿繪に結合して、作者の心持を中心として、弟・父母等の言葉・動作に現はれた心情を樣々に想像させて、田園生活を背景とした一家の和やかな氣分の中に兒童を立たせたい。

（ホ）通　讀

（ヘ）練　習

文字・語句の練習・應用

第三時

(1) 本時の主眼

作者がいなごを捉へて弟を遊ばせてゐる可憐な情景を讀ませる。

(2) 指導過程

（イ）通　讀

（ロ）話　合

前時のノートを中心として復習し、本時教材の範圍を定む。

（ハ）通　讀

（ニ）深　究

問答によつて、

いなご

たくさんこちらへ飛んで來る

なか〳〵つかまらない

大きなのが一匹

あわてて、ぎゆつとつかんだら

弟

「此の牛は、しやうがないぞ。」

僕

をかしくなつて、ふき出した

等の語句を書き取らせ、いなごを中心に、作者や弟の動作・心持など樣々に想像させたい。

特にいなごを捉へる樣子の細かな叙述、弟の子供らしい無邪氣な動作など、よく讀ませたい。

（ホ）通　讀

（ヘ）練　習

文字・語句の練習・應用

第四時

(1) 本時の主眼

○作者は子供心にも忙がしさうな父母の働きを見て手助けを始めたが、結局作者の手助は幼い弟を樂しく遊ばせて、父母の働きを十分にさせる所にあつたことを讀ませる。

○全文にかへつて朗讀

(2) 指導過程

(イ) 通讀

(ロ) 話合

前時のノートを中心にして復習

(ハ) 通讀

(ニ) 探究

問答により

すい〳〵

さく〳〵

五、練習

(1) 練習文 牧場

父さんが見て來たフランスのゐなかには、却といふものがありません。お來のごぜんのかはりにパンをたべる國では、書

何か手傳はう

少しづつ持つて運んだ

「あゝん」

「お前、行つて遊んでやりなさい」

又弟の方へ行つた

弟と一しよに遊んだ

等の語句を拾取らせ、之を中心として、忙がしさうな父母の働きを見て、手傳をしたこと、然し弟のたいくつさうな姿を見て、再び弟を遊ばせたことを讀ませ、結局これが作者としての稻刈の手傳であつたことを思はせたい。

(ヨ) 通讀

(ホ) 全文朗讀

(ヘ) 練習

文字・語句の練習・應用

を作ります。ですから耕地のおほくは麥畑です。

日本には牛と馬とがあります。フランスには馬と牧場とがあります。日本で牧場といへば遠い野原の山おくにでもあるやうに思はれますが、フランスあたりのゐなかでは、そこらの農家の近くがみんな牧場です。羊や牛は朝ひかれて行つて、晩にはまた牧場からひかれてかへるのです。ゐなかの子供は、まるで羊や牛のお友だちのやうなものです。

日本には桑畑がたくさんあつて、それでおかひこをやしなひますが、フランスあたりでは牧場に羊をたくさんかつて、その毛は著物になり、そのちゝは子供にのませ、その肉はおそうざいとしてたべるのです。

父さんは汽車でフランスの中部から西南の地方を旅して見ました。行く先々に牧場がありました。日本で汽車の窓から青田をながめるやうに、青々とつらなりつゞいたところは大てい牧場でした。そこにも、ここにも牛や羊のむれを見て來ました。

(藤村讀本)

(2) 家庭學習

(イ) 文を讀んで、つぎの言葉をしらべなさい。

○お父さんやお母さんの心持の現れてゐる言葉 ○作者の心持のよく現れてゐる言葉 ○かはいらしい弟の心持の現れてゐる言葉 ○空や田の美しい景色の現れてゐる言葉

(ロ) もみから白米になるまでの順序と百姓さんの苦心とを誰かにきいてしらべなさい。

(3) 考査問題

イ、 つぎの□の中に言葉を入れなさい。

大きな一匹のいなごがすぐそばの稻の葉に止つた。取らうとして、□近づくと、□と葉の裏へ廻つて、足の先だけ見せ 居る。右の□で、□、葉と一しよにつかまへた。左の手で、頭のあたりをつ

かむと、後足を□□、逃げさうにした。あわてて、□□とつかんだら、後足が取れてしまつた。
ロ、つぎのかたかなをかん字になほしなさい。
アニとオトウト　チゝとハハ　タとハタケ　ハとクキ　マヘとウシロ　ヒダリとミギ　キミとボク　フタと
チ
ハ、「だん〳〵」「なか〳〵」「すい〳〵」「ざく〳〵」をつぎの文の□の中へ一つづつ入れなさい。
○稲を刈る音が□□と聞える。○いなごを取らうとするが□つかまらない。○赤とんぼが、□
と飛んでゐる。○田の稲が□□と刈られて東の山が出來て行く。

六日本武尊

一、教材

(1) 教材六(イ) 日本武尊

(一) 川上たける　・新出漢字 ―― 讃美漢字 (イ)(ロ)……教材解説

熊襲(くまそ)のかしら、川上たけるは、力のあるにまかせて、四方をうち從へ、後には、朝廷(てうてい)の御(み)にも從ひませんでした。
「西の國で、自分より強い者はない。」と思ふと、たけるは、だん〳〵ぞうちやうして來ました。
「一つりつぱな宮殿を建て、たくさんの長隊に守らせて、いばつてやらう。」と考へました。
いよ〳〵、家も出來上つたので、或日、お祝の酒もりを開くことになりました。
其の日は、朝から、大勢の人が出はいりしました。手下の者はもちろんのこと、手傳のために、たくさんの男や女が、集つ

て來ました。
其のうちに、一人の美しい少女がまじつて、かひがひしく働いて居ました。酒もりが始ると、此の少女も、中(なか)へ出て、酒をついで廻(まは)りました。
上座にすわつて、いばつて居たたけるは、此の少女を見ると、自分のそばへ呼んで、すわらせました。
さうして、酒をつがせては、しきりに飲んだり、歌つたりしました。
だん〳〵と、夜がふけて來ました。客は、次第(しだい)にかへつて行きました。すつかりよつて、よいきげんになつたたけるも、もうねようといふので、よろ〳〵しながら、奥の間へ行かうとしました。
此の時でした。今までやさしくお給仕をして居た少女は、すつくと立上つて、
「たける、待て。」
と言ふが早いか、ふところにかくして居た劍を抜いて、たけるの胸を突きました。
「あつ。」と叫んで、たけるはたふれましたが、
「お待ち下さい。これほどに強いあなたは、たゞの人ではない。一たい、どういふお方ですか。」
と苦しい息の下から尋ねました。
「われは女ではない。天皇の御子、やまとをぐなだ。汝、恐れ多くも、朝廷の御(み)に從ひ申さぬによつて、汝をうてとの勅(ちよく)をかうむり、こゝへ來たのだ。」
「なるほど、さういふお方でいらつしやいましたか。西の國では、私より強い者はないので、たけると申して驕りました。
失禮(しつれい)ながら、今、お名をさし上げます。日本で一番お強いあなたは、日本武尊(やまとたけるのみこと)と御(み)せられますやうに。」
と言終つて、たけるは息がたえました。
景行天皇の御子、やまとをぐなの皇子(みこ)は、御年十六、かうして、たゞお一人で、熊襲をお亡しになりました。さうして、こ

れから後、日本武尊と申し上げることになりました。

（二）草薙劍

熊襲をうつて、都へおかへりになつた日本武尊は、其の後、東の國の惡者を平げよといふ勅令を受けになりました。そこで、尊は、わづかの供人を連れ、東をさして御出發になりました。皇大神宮に仕へて居られた尊の御叔倭姫命は、尊が二度の大任をお受けになつたのを、勇ましくも、又いたはしくお思ひになつたのでせう、特に、大切な天叢雲劍を尊にお授けになつて、

「もしもの事があつたら、忘れずに、此の袋の口をおあけなさい。」

とおつしやいました。

尊は、東へ〳〵と進んで、駿河の國にお着きになりました。此の國に居た惡者のかしらは、かねて、尊の御勇武を聞傳へて知つて居ましたので、一通りではとても勝てない、だましうちにする外はないと思ひました。

そこで、尊をうや〳〵しく迎へて、いろ〳〵おもてなしをしながら、申しました。

「此の國の野原には、大きな鹿がたくさん居ります。おなぐさみに、狩をなさつてはいかがでございます。」

尊は、「それおぼもしろからう」とおつしやつて、野原へお出でになりました。さうして、身の丈にもあまる草を分けて、ぢん〳〵奥はいつていらつしやいました。すると、かねてから、此の野原を圍んで待ちかまへて居た惡者どもは、一度に、草に火をつけました。火はものすごい勢でもえて來ます。

「さては、だましたのか。」

と、尊はしばらく考へていらつしやいましたが、ふと御心に浮かんだのは、御叔倭命のお言葉です。急いで袋の口をおあけになると、中に火打石がありました。尊は、すぐに、おさとりになりました。天叢雲劍を抜いて、手早くあたりの草

なぎはらひ火打石で火をきつて、其の草におつけになりました。すると、ふしぎにも、今までもえさかつて來た火は、急に、方向をかへて、向かふへ、向かふへと、もえ移つて行きました。

あわてたのは惡者どもです。火に追はれて、逃げようとする間もなく、片はしから、やき立てられ、やき殺されてしまひました。

あやふい御命を、お助けになつたお礼は、生殘つた惡者どもを平げて、なほも東へお進みになりました。

此の時から、此の御劍を、草薙劍と申し上げることになりました。

(2) 資料

本文は大體古事記に據つてゐる樣であるが、所々日本書紀に據つたと思はれる點もあり、創作物としての興味を起さしめる爲にその進の方法に劇的表現を用ひてゐる。

一

（イ） 日本武尊　御名は小碓尊、また日本童男とも稱す。景行天皇の皇子であつて、母は皇后の稚目大郎姫である。景行天皇の二十七年八月、熊襲が反すると、十月勅を奉じて西征し、十二月熊襲の國に至り、形勢地理を察した上、遂に女裝して魁帥川上梟帥の宴に入つて之を刺す。梟帥重傷を負つて將に死せんとする時、皇子の武勇を稱し、日本武皇子の號を上る。これより世人が日本武尊と稱する樣になつた。熊襲を平げた後、海に浮び進すがら吉備（今の三備地方）蝦夷等の賊を征し、明年二月京に歸る。

四十年東夷叛す。進發嚮應たるものがあつたので、更にその十月勅を奉じて東征の途に上ることとなつた。途中伊勢神宮を拜し、進んで駿河に至り、十號を平げて相模より海を渡つて上總に就し、また海路により草浦（安房の海岸とのことであるが不詳）より玉の浦（今の九十九里の海濱であらう。）を經て蝦夷の境に入つた。蝦夷等竹の水門（當隙の海岸）によつて防戰したけれども皇子は之を破り服屬せしめた上日高見國より陸路によつて歸り、新治筑波を過ぎて甲斐に至り酒折宮に入つた。たまたま一日歌をもつて侍者に尋ねていふには

「新治筑波を過ぎて幾夜かねつる」

と。侍者が答へていふには

「かゞなめて夜には九夜日には十日を、」

と。これが連歌の起源であるとの事である。此の時にあたり信濃、越の地方が皇化に從はなかつたので、甲斐より武蔵・上野を經て信濃に入り、更に吉備津彦を越國につかはして形勢民情を觀察せしめ、進んで美濃に至つて吉備津彦の越より歸るのと會し、共に尾張に至つて拾何月を經し、ついで近江勝炊山の賊を征伐したが、山中に病を得て伊勢に歸り能褒野に薨じた。年三十、其の地に葬むらる。

（古傳によると、白鳥があつて、能褒野の陵より飛び去つて倭琴彈原に留つたので更に陵を其の地に造つた。ところがまた飛んで河内の舊市に留つたので其處にも陵を造つたとある。故に時の人此の三陵を稱して白鳥の三陵といつてゐる。）

天皇、皇子の死を深く哀悼し給ひ、その功名を傳へんが爲に武部をお定めになられた。武部とは卽ち御名代の民のことである。

（四）熊襲　國名または人種の名である。國名としては薩摩・大隅・日向の地方に當つて居り、記紀の國に球磨郡日向國に隼人郡がある。人種として熊襲は此の地方に據つて居り、あつて王化に從ふことなく、日本民族からは異族として目されてゐた。南方より渡來の人種とする說がある。景行天皇及び日本武尊之を征し給ひしも、新羅の後援によつて頗る強く、神功皇后が新羅を征せらるゝに及んでその勢が漸く衰へて來た。

（五）臭大神宮　卷五指導書中の「二、參宮だより」資料參照

（二）天孫降臨　卷五指導書中の「八、八岐のをろち」資料參照

（六）駿河の國　東は相模・伊豆、西は遠江、北は甲斐・信濃、南は海に至る一帶の地方、東西十八里南北十二里であつて東海道に屬す。富嶽北方に聳えてそれを中心に東西は山脈連亙し、その間を富士川南流して海に入る。

（八）東の國の惡者　こゝでは蝦夷をさす。蝦夷とはアイヌ族の古稱であつてもと「エミシ」とも稱せられた。史にその古

據するところを日高見國（北上川の流域地方か。）といつてゐる。景行天皇の代日本武尊命を奉じて始めてこれを征伐し漸次皇化に服したが、なほしば〳〵叛いて北邊を騷した。齊明天皇の代、阿部比羅夫秋田津輕地方を平げ進んで渡島（北海道）の蝦夷を服した。時に蝦夷に三種の別がある。その遠きものを「粛愼」といひ「熊襲蝦夷」之に次ぎ、「熟蝦夷」最も近く朝廷に內附してゐた。聖武天皇、鎭守府を陸前の多賀城におき征夷大將軍しきりに蝦夷征伐の軍を起し、坂上田村麻呂その最も强硬なる陸中膽澤の賊を殲滅して鎭守府を膽澤にうつした。之より後皇威東國にあまねく、蝦夷の反亂も次第になくなつて來た。

（ト）火打石　石英の一種。極密、堅硬、不透明で通常暗灰色、時赤色、時褐色等の色を呈す。斷口は多角狀或は貝殼狀となり稜角が銳い。古來矢の根、槍の先端に用ゐ、或は火打鎌に打付けて火を出すに用ゐられた。

(3) 連　雜　本卷の一、神武天皇の本項を參照のこと。

(4) 新出文字及表記　うち從（シタガ）へ　仰（オホセ）　宮殿（キュウデン）　兵隊（タイ）　守（マモ）らせて　お祝（イ）（ヒ）　少（セウ）女　座（ザ）敷　刈（カ）弟（シダイ）　お給（キフ）仕　樂（ツ）きました。　苦（クル）しい　勅（チョク）　居（ヲ）りました　出發（シュッパツ）　先（マ）づ　武運（ブウン）　大任（ニン）　特（トク）に　お授（サヅ）け袋（フクロ）　丈（タク）　勢（イキホヒ）　火打（ウチ）石　方向（カウ）

(5) 難語句　熊襲　かしら　力のあるにまかせて　四方をうち從ふ　朝廷　仰　ぞうちやう　宮殿　建てる　酒もり　もちろん　かひがひしく　しきりに　夜がふける　次第　よいきげん　お給仕　すつくと　言ふがい　早か　一たい　苦しい息の下　汝　恐れ多くも從ひ申さにぬよつて　勅をかうむる　息がたえる　惡者　供人　御出發　とちゆう　御武運をおいのりになる　大任　勇しくも又いたはしく　お授け　かねて　御武勇　聞傳へる　一通りでは　だましうち　うや〳〵しく　おなぐさみ　身の丈にあまる　ものすごい勢　火打石　おさとり　ふしぎにも　もえせまる　方向　片はしから　あやふい

(6) 文章　國語尠敬體の文章であるが、特に敬語の取扱に注意したい。尚文章の程度も既出の文に比して、熟語が多く「朝廷」「宮殿」「勅」「武運」等可成此の程度の兒童には難解と思はるゝ言葉が多い。嫌め解釋に就いて工夫しておきたいものである。

(7) 挿繪

三十頁（今までやさしくお給仕をして居た少女は、すつくと立上つて、「たける、待て。」と言ふが早いか、ふところにかくして居た劍を拔いて、たけるの胸を突きました。）とする。その突かんとする瞬間の光景である。果敢なる命の御樣子と、驚愕してゐる川上たけるの有樣とを觀察せしめて緊張したその一場面を深く想像せしめたい。

三十八頁命が天叢雲劍を拔いて手早くあたりの草をなぎはらつてゐる有樣である。從容としたその態度と周宇の間に現はされてゐる命の意氣を、この繪によつて觀はしめたい。

二、教材觀

(1)「(一)川上たける」は熊襲征伐に於ける日本武尊の武勇と智略。「(二)草薙劍」は日本武尊の蝦夷征伐に於て顯はれた神劍の靈威を叙述したもの。

前者は舊國語讀本にも採られてゐるが、構想や叙述が一層物語として相應しく書き改められてゐる。

後者は今回新しく採られたもので、この兩者を採つたことによつて、單に日本武尊の勇武・知略の物語といふよりは、一層國史物語としての使命を持つて來たやうに思はれる。

勿論「草薙劍」を附加へることによつて、卷五「天の岩屋」に出て來た三種の神器に連絡せられ首尾一貫するわ

けであるが、然し一面この兩者を讀本に、然もかく詳しい叙述によつて提出されたとすれば國史の教授に於て「日本武尊」について特に教授する要が無くなるであらう。あつたとしても、この物語の結末を附加する程度であつて、教科内容の整理といふことから見ても果して今回の改正は妥當なものかどうか疑問である。寧ろ「草薙劍」の如きは、國史教授に割愛することが至當でなかつたか——。

(2)「川上たける」に於て、特に構想の改められた點は、舊讀本の書出しを結尾に變更したことで、卽ち本文では尊は最初は單なる美しい少女として描出されて居り、最後になつて、之が日本武尊であつたのだといふ——かうした物語には相應しい。從つて讀者の興味を惹く點からいつてもかうした構想が適當であると思はれる。

「草薙劍」はその後を享けてゐるから、前者とは逆な構想をとり、一貫的な物語の形式となつつゐる。

三、指導觀

(1)「川上たける」に於ては、日本武尊の勇武・智略を描いて、日本武尊といふ御名の起因を物語つたものであるが、文中、

「かうして、たゞお一人で熊襲を、お亡しになりました。」の一句に、武勇と智略とが讀まれるわけである。

尙川上たけるについては、朝敵とは言へ、一方の首領、然も死期の立派な態度を思ふ時、朝敵の奉つた御名をそのまゝ御名とした所以が明かになることと思ふ。

「草薙劍」に於て、日本武尊の蝦夷征伐は、正しく神明の加護によつたもので、之が文中

「あやふい御命をお助りになつた尊は」

とある所以であり、この具象化されたものが、草薙劍といふ名に變つた點である。

かくて歴史上皇威伸展史ともいふべき立場にある本課の使命を、兒童の英雄崇拜の心に立たせて眺めさせたい。

(2) 本課には、「朝廷」「ぞうちやう」「すつくと」「勅をかうむり」「御武運をいのり」「二度の大任」「いたはしく」「もえせまつて」等、相當に解釋の困難な語句がある。兒童の讀解に即して丁寧に取扱はなければならない。

四、指導の實際

A 配當時間 六時間

第一時 全文取扱

第二時 最初から三十頁一行まで

第三時 三十頁二行から三十三頁二行まで

第四時 三十三頁三行から三十五頁五行まで

第五時 三十五頁六行から最後まで

第六時 全文取扱及び練習

B 指導要領

第一時

(1) 本時の主眼

全文の通讀を主として、物語の筋を明かにする

(2) 指導過程

(イ) 通讀

全文の通讀。但し新出文字も相當多く、文章も長いから讀みの指導を十分にしなければならない。

(ロ) 話合

「日本武尊」といふ題目を中心に、(一)(二)に分けて、どんな話か、兩者を通して日本武尊をどんな方だと思つたか等について自由に發表させる。

(ハ) 通讀

(ニ) 探究

問答によつて、

(一) 川上たける

熊襲のかしら

お祝の酒もり

美しい少女

胸を突きました

息がたえました

日本武尊

(二) 草薙劍

東の國の惡者

倭姫命

天叢雲劍

小さい袋

だましうち

やき殺され

草薙劍

の語を書取らせ、物語の筋を明かにする。

(ホ) 通讀

第二時

(1) 本時の主眼

「(一)川上たける」の中、川上たけるが美しい少女の酌に酔つてしまつたこと。

(2) 指導過程

(イ) 通讀

(ロ) 話合

前時ノートによつて(一)の部分だけ復習し、本時教材の範圍を定める。

(ハ) 通讀

(ニ) 探究

問答によつて

川上たける

朝廷の仰にも従ひません

だん〳〵ぞうちやう

りつぱな宮殿を建て

美しい少女がまじつて。かひ〳〵しく働いてるました

だん〳〵と、夜がふけて來ました

すつかりよつて、よいきげんになつた

よろ〳〵しながら

等の語句を書取らせ、之を中心として、川上たけるとはどんな者であつたか、之を討つといふことはどんな困難なことであつたか、美しい少女を見出してたけるはどんなに喜んだか等を色々に想像させて讀ませたい。

（ホ）通讀

（ヘ）練習

第三時

(1) 本時の主眼

尊の武勇と奇略、遂に朝敵たけるを殺して、熊襲を亡したこと。並に御名を日本武尊と改められたこと

(2) 指導過程

（イ）通讀

（ロ）話合

前時のノートによつて復習

（ハ）通讀

（ニ）深究

問答によつて、

此の時でした

「たける、待て」

「お待ち下さい。これほどに強いあなたは、たゞの人ではない。一たい、どういふお方ですか。」

「われは女ではない。天皇の御子、やまとをぐなだ。汝、恐れ多くも 朝廷の仰に従ひ申さぬ

によつて、汝をうてとの勅をかうむり、こゝへ來たのだ」

「なるほど、さういふお方でいらつしやいましたか。西の國では、私より強い者はないのでたけると申して居りました。失禮ながら、今、お名をきし上げます。日本で一番お強いあなたは、日本武皇子と仰せられますやうに。」

御年十六、かうして。たゞお一人で。熊襲をお亡しになりました。

の語句を書取らせ、日本武尊の勇武奇略を思はしめると共に、一面川上たけるの流石に立派な死期を思はしめ、尚朝敵の申し上げた御名をそのまま御名となさつた寛仁の御態度など、十分に讀み味はせなければならない。

（特に○○○の個所を中心として、全文を反省、統一したい）

（ホ）通讀（（一）全文）

（ヘ）練習

第四時

(1) 本時の主眼

（一）草薙劍の中、日本武尊がまづ皇大神宮に參詣し、倭姫命から劍と袋とを授けられ、駿河に進まれたこと。

(2) 指導過程

（イ）通讀

（ロ）話合

第一時のノートによつて物語の筋を反省し、本時教材の範圍を定める。

（ハ）通讀

（ニ）深究

問答によつて、

東の國の惡者を平げよといふ勅

伊勢の皇大神宮

二度の大任をお受けになつたのを、勇ましくも、又いたはしくお思ひになつたのでせう、「もしもの事があつたら、忘れずに、

此の愛の口をおあけなさい。」

駿河の國

だましうちにする外はない。

等の語句を書取らせ、之を中心として、東國の征伐は熊襲征伐よりも一層困難であつたこと（地理上から見ても）。皇大神宮に詣つて御武運を祈られた尊の御心情、倭姫命の優しいお心遣ひ等について十分に想像させ乍ら讀み味はせたい。

（ホ）通　讀

（ヘ）練　習

第五時

(1) 本時の主眼

賊の惡計に陷つた尊が、神明の加護によつて危機を脱せられたこと、並に草薙劍と變つた所以。

(2) 指導要項

（イ）通　讀

（ロ）話　合

前時のノートについて復習し、本時教材の範圍を定める。

（ハ）通　讀

（ニ）深　究

問答によつて、

うや〳〵しく迎へて

「此の國の野原には、大きな惡がたくさん居ります。おなぐさみに、狩をなさてとはいかゞでございます。」

「それはおもしろからう。」

火はものすごい勢でもえて來ます。

「さては、だましたのか。」

すると、ふしぎにも、

片はしからやき立てられ、やき殺されてしまひました。

あやふい御命をお助りになつた尊。

草薙劍と申し上げる

等の語句を書取らせ、之を中心として、賊の惡だくみ、之に陷つた尊の御心情、神明の加護等を讀

ませ、草薙劍と改つた所以を明かにしたい。

（特に○○○の個所を統一點として全文を反省させる）

（ホ）通　讀

（ヘ）練　習

五、練　習

(1) 練習　白い島

東の國の墨者なお平げになつて、尾張までおかへりになつた尊は、みやすひめのお家へおとまりになりました。そして草薙劍を、ひめにおあづけになつて、近江のいぶき山の、山の神をせいばつにお出でになりました。

尊はこの山の神ぐちゐはす手でもころすとおつしやつて、どん〳〵上つてお出でになりました。

すると、ふいに大きなひようがど。つとふり出しました。尊はそのひようにおそはれると一しよに、ふら〳〵お目まひがして、お氣がとぼくおなりになりました。それは、山の神がひどくおこつて、どく氣をふくんだひようをふらして、尊をおいぢめ申したのでした。尊は、やうやくのことで山をお下りになつて、たまゝ　ちべといふところにわき出てゐる清水のそばでお休みなさいました。いくらか御氣分がたしかにおなりになりました。しかし、尊はそのどく氣のために、すつかりおかちだをこはしておしまひになりました。

美濃のたぎ野といふ野中までお出でになりますと、「あゝ、わしは、いつもは空をでもとんで行けさうに思つてゐたのに、

第六時

(1) 本時の主眼

ノートに書取つた語句の反省から本文の通讀に結びつけ、尚全篇に亘つての練習をする

(2) 指導要項（省略）

命はもう歩くことも出來なくなつた。足はちやうど細のかぢのようにまがつてしまつた。」と、おつしやつて、おなげきになりました。杖にすがつてひと足〳〵お進みになりました。

そんなにしてやつと伊勢のある村までいらつしやいました。尊は、その時、

「わしの足はこんなに三重にまがつてしまつた。どうもひどくつかれてあるけない。」

と、おつしやいました。しかし、それでも、むりにおあるきになつて、のぼ野といふ野へおおつきになりました。尊は、その野の中でつく〳〵とお家のことをお思ひになり、

「あの青山にとりかこまれた
うつくしい大和がこひしい。
しかし、あゝわしは、
そのこひしい土地へも、
かへりつくことは出來ない。
命あるものは、
めでたくかへつて、
あのへぐりの山の、
くまがしの葉を、
かみにかざつて舞ひたのしめよ。」
「おゝなつかしや、わが家のある、
はるかな大和の方から、雲が出てくるよ。」

といふいみをおうたひになりました。それと一しょに御病氣もひどく重くなつてきとくになりました。

「あのみやずひめの家において來た劍も、とう〳〵ふたゝび手にとることも出來ないか。」

と、おうたひになり、そのうたのなはるとゝもに、この世をおさりになりました。

大和からは、尊のおきさきやお子さま方が、すぐに下つてお出でになりました。そして、尊のお墓をおつくりになつて、そのぐるりの田の中におすはりになつて、泣いていらつしやいました。

すると、おなくなりになつた尊は、大きな白い鳥になつて、お墓の中からお出ましになり、空へたかくかけ上つて、はまべへ向つてとんでお出でになりました。

おきさきやお子さま方は、それをごらんになると、その後を追ひしたつて、けはしい道を一生けんめいにかけてお出でになりました。そしてしまひには、海の中までいつて、追つかけていらつしやいました。

白い鳥は人々を後において、海の中の岩から岩につたはつて、とんでいきました。おきさきは潮の中をあるきなやみながらお泣きになりました。

その鳥はとう〳〵伊勢から河内の志紀といふところへ來てとまりました。それで、そこへおはかをつくつて一たんそこへおしづめ申しましたが、しかし白い鳥は、後にまたとび出して、どこへともなく去つてしまひました。（日本紀國物語抄）

(2) 家庭學習

イ、卷五の「天の岩屋」「八岐のをろち」「天稚」の三課を讀んで、卷六の「神武天皇」「日本武尊」をよく讀みなさい。

ロ、「皇大神宮」「天叢雲劍」について、よくしらべなさい。

ハ、「一、神武天皇」から「六、日本武尊」までの間に出てゐる「進軍」「地方」「勢力」のやうな、かん字二

字の言葉を引取りなさい。

(3) 考査問題

イ、つぎの文を讀んで問に答へなさい。

景行天皇の御子、やまとをぐなの皇子は、御年十六。かうして、たゞお一人で、熊襲をお亡しになりました。さうして、これから後、日本武尊と申し上げることになりました。

○「かうして」とは、どのやうにして熊襲をお亡しになつたのですか。

○ 熊襲はどこにゐた惡者ですか、そのかしらを何と言ひましたか。

○「これから後」とはいつから後のことですか。

○ 日本武尊とは、どういふいみの御名ですか。だれがはじめにさし上げたのですか。

ロ、つぎの——をつけてあることばをうやまひのことばになほしなさい。

○ なるほど、さういふお方でしたか。

○ 日本武皇子とお言ひになりますやうに。

○ 日本武尊のおもてなしをしながら言ひました。

○ 日本武尊はしばらく考へてゐました。

ハ、つぎのかん字によみがなをつけなさい。

宮殿　兵隊　或日　大勢　手傳　座敷　上座　少女

給仕　御年　出發　武運　大任　勇武　御心

七山羊

一、教材

(1) 教材　七山羊(イ)

・新出漢字　——讀若漢字(イ)(ロ)……發音解說

草を刈つていらつしやるおとうさんの所へ、お手傳ひに行きました。

刈集めてある草を、山羊にやらうと思つて、私は、兩手で持てるだけ持つて、山羊小屋の方へかけて行きました。

「どうして靜かなのだらう。」と思つて、のぞいて見ると、山羊は一匹も居ません。

「あゝ、さうだつた。」

私は、大きな聲でひとり言を言つて、裏へ廻りました。稻が刈られたので、きのふ、たんぼに搬を作つて、山羊の運動場をこしらへてやつたのでした。

親山羊は、籠のきはに、秋の日をあびてすわつて居ましたが、私の足音が聞きつけて、すつくと立上りました。向かふの方で遊んでゐた二匹の子山羊は、鳴き聲を立てながら、こつちへかけて來ました。さうして、三匹とも、前足を柵にかけて、立上りました。

草をどさりと投げてやると、三匹が頭をくつつけて、おいしさうにたべ始めました。

親山羊は、去年のちやうど今頃、遠い〳〵山岡から、汽車に乘つて來たのです。月夜の晩に、此の村の停車場に下された時は、どんな心持がしたでせう。其の時、おとうさんと私と、停車場まで迎へに出てやりました。今年の春、此の二匹の子山羊が生まれました。今では、もうお乳が飲まなくなりましたが、生まれた頃は、乳房をくはへて、うまさうに、すつぱすつぱと吸つて居ました。そうして、子山羊が飲んだ後で、おとうさんは、お乳をしぼつて、私たちにも飲ませて下さいました。夏休過ぎ

から、子山羊に乳がいらなくなつたので、私たちは、毎日、たくさん飲むことが出来るやうになりました。

ぼんやり、こんなことを考へて居ると、

「道子は、ほんとうに山羊が好きだね。」

といふおとうさんのお聲。ふり向くと、私の後に、おとうさんが、にこ〳〵しながら、立つてゐらつしやいました。

すつかり草をたべてしまつた山羊は、やさしい目をしながら、又寄つて來ました。親山羊の白いひげの下を、一匹の子山羊がくぐり抜けて、柵に前足をかけながら、私たちをじつと見ました。

(2) 資料

(イ)山羊　偶蹄類の獸。あまねく家畜として飼養されてゐる。往時ペルシヤとアフガニスタンとの野生類の雜種から陶汰されたといはれてゐる。品種頗る多く、無角種・有角種があり、牡には顎に長毛がある。色彩・形狀・角形等種々あり。毛用・乳用等の目的で飼養する。革及び肉も良質である。殊に乳はその成分より見て脂肪・蛋白質が牛乳より優れて營養分が豐富であるからその用途が廣くなりつゝある。

(3) 連絡　本卷の三、村祭　五、稻刈と同樣農村に取材した教材である。その上女兒らしい心情のあふるゝ文でもある。本卷の二、祭に招く　一七、雀の宿　二十、小さい溫床などゝ共に、その方面への連絡も考へておきたい。

(4) 新出文字及表記　去(キヨ)年　停(テイ)車場　お乳(チヽ)　乳房(チブサ)　好(ス)き

(5) 難語句　山羊小屋　柵　運動場　日をあびる　乳房　くゞり抜ける

(6) 文章　口語崇敬體で、女兒らしい心情に溢るゝ文章である。

(7) 挿繪　道子さんが山羊に草を與へようとしてゐるところ。山羊の樣子の中にその可憐な氣持を觀察せしめ、道子さんの表情の中に優しい氣性を窺はしめたい。

(8) 教具　特に必要なし。

二、教材觀

(1) 「道子は、ほんたうに山羊が好きだね。」といふ父の言葉そのまゝに道子は山羊が好きである、と同樣に山羊もまた道子を好きであるに違ひない。この兩者を貫いて流るゝ親愛の感が、自づから溢れ出たものがこの一篇の姿であると見てよい。

特に作者の女の子らしい優しさと、溫味とは、この一篇を明るく、素直なものにしてゐる。（更に農家の副業として山羊を飼育するといふ所に實業的教材の色彩がある。）

(2) 一篇の想を三節に分けて眺める事が出來よう。卽ち、

第一節　山羊に草を與へたこと、山羊がおいしさうに食べ始めたことを叙し、

第二節　草を食べてゐる山羊を見守り乍ら、山羊に對する思出を語り、

第三節　父の聲に再び現實の世界に歸つて、草を食べ終つた山羊の樣子を叙してゐる。

然して第二節の思出によつて、一節、二節の現實の描寫に一層豊かな情味を與へてゐる。

三、指導觀

(1) 此の文の生れ出づる母胎ともいふべき、作者の山羊に對する深い親愛感を中心とし、その親愛感の流露してゐる象を味讀させたい。その爲に、

○山羊にやらうと思つて、私は、兩手で持てるだけ持つて、

○山羊の運動場をこしらへてやつたのでした。（父も亦山羊を可愛がつてゐる）

○月夜の晩……どんな心持がしたでせう。（特に女の子らしい想像）
○停車場まで迎へに出てやりました。（友を迎へる氣持にも似て）
○「道子は、ほんたうに山羊が好きだね。」
といつたやうな語句は、見逃してはならない語句である。

(3) 山羊の可愛らしい樣子といつたものを加賀に指導してゐる點（とそれが一面山羊が作者に對する親愛の情を示すものとも見られる）として、
○私の足音を聞きつけて、すつくと立上りました。
○鳴き聲を立てながら、こつちへかけて來ました。
○前足を柵にかけて、立上りました。（擬態）
○頭をくつつけて、おいしさうにたべ始めました。
○乳房をくはへて、うまさうに、すつぱすつぱと吸つて居ました。
○やさしい目をしながら、又寄つて來ました。
○白いひげの下を……私たちをじつと見ました。
等の句は、十分に讀み味はせなくてはならない。

四、指導の實際

A 配當時間　四時間

第一時　全文取扱
第二時　作者の山羊に對する親愛の情を中心として
第三時　山羊の可愛らしさを中心として
第四時　復習、練習

B 指導實際

第一時

(1) 本時の主眼
全文の通讀を主として文の構想について取扱ふ。

(2) 指導順序
（イ）通讀
（ロ）話合
「此の文を讀んでどんな事を思つたか」といふ質問を出發點として、「作者が山羊を可愛がつてゐること」「山羊が作者によくなつてゐること」「山羊の可愛いこと」等について自由な話合をする。
（ハ）通讀
（ニ）深究
問答によつて、
刈萱あてある事
山羊小屋の方へ
山羊の運動場
親山羊
二匹の子山羊
草をどさりと投げてやる
……
去年の今頃
今年の春
夏休み過ぎから
……
おとうさんが、にこ〳〵しながら
すつかり草をたべてしまつた山羊
の語句を書取らせ、全文が三節の段落を示してゐることから、各節に於ける事實の意味を明かにする。

(ホ) 通読
(ヘ) 練習

第二時

(1) **本時の主眼**

作者が山羊を如何に愛してゐるか――その親愛の情の表現を主として全文の取扱をなす。

(2) **指導過程**

(イ) 通読
(ロ) 話合

前時のノートによつて復習をし、「道子さんがどんなに山羊を可愛がつてゐたか調べませう。」といふ意味の問題を掲げ、

(ハ) 通読
(ニ) 深究

「道子さんが山羊を可愛がつてゐる様子のよく現はれたところを讀んでごらん。」といふ問題から、

山羊にやらうと思つて
兩手で持てるだけ持
山羊の運動場をこしらへてやりました
草をどさりと投げてやると

……………………

月夜の晩に、此の村の停車場に下された時はどんな心持がしたでせう
停車場まで迎へに出てやりました

……………………

「道子は、ほんたうに山羊が好きだね。」

の語句を書取らせ、之を中心として本文・挿繪に結合し乍ら、上述の問題を吟味し、作者の山羊を可愛がつてゐる心持を樣々に想像させたい。

(ホ) 通讀
(ヘ) 練習

第三時

(1) **本時の主眼**

山羊が作者に如何によく馴れてゐるかを中心として、山羊の可愛らしい樣子を讀ませる。

(2) **指導過程**

(イ) 通讀
(ロ) 話合

前時のノートによつて復習し、「今日は、山羊がどんなに道子さんに馴れてゐるか、山羊の可愛いところを調べてみませう。」といふ意味を掲げ

(ハ) 通讀
(ニ) 深究

話合に於て設定した問題についてよくその表現されてゐる點を讀み取らせ、

秋の日をあびてすわつて居ました
私の足音を聞きつけて、すつくと立上りました。
鳴き聲を立てながら、こつちへかけて來ました
前足を柵にかけて、立上りました
頭をくつつけておいしさうにたべ始めました
乳房をくはへて、うまさうに、すつぱすつぱと吸つてゐました

……………………

やさしい目をしながら、又寄つて來ました
ひげの下をくゞり抜けて、
柵に前足をかけながら、私たちをじつと見ました。

……………………

等の語句を書取らせ、之を中心として、山羊が作者に馴れ　ゐる樣子、可愛らしい樣子などを、樣々に想像させて讀ませる。

特に　親山羊は　。。。の部分、子山羊は、、、の部分によく表はれてゐることを注意したい。

(ホ) 通讀
(ヘ) 練習

第四時

(1) **本時の主眼**

○全文を統一してこの文の生れる母胎を讀みとらせる。

○漢字・語句の應用練習、補充文

五、練　習

(1) 練習文　　山羊のちゝ賣

(四) 教師過程（省略）

山羊のちゝ賣がパリーの町にありました。おもしろいふえをふいて來ました。角のかゝいらしい、目のやさしい、あしのほそい山羊がいく匹もぞろ〳〵つれて來ました。

山羊のちゝ賣は朝早く通ります。よんで買ふものがあれば、其の場ですぐ新しいちゝをしぼつてくれます。

山羊のちゝ賣のふえは、ちやうど日本の方のあめ屋の唐人（おサジン）ぶえによくにてゐます。

どうです。お前たちもあめ屋のふえはすきでせう。父さんが、パリーで山羊のちゝ賣りのふえを聞いた時には、しきりに子供の時分のことがこひしくなりました。あのあめ屋のふえを思出しました。もう一度、父さんもお前たちのやうな子供にかへつてゆきました。

（藤村讀本）

(2) 家庭學習

イ、讀本の卷一から卷六の此の課までの間に出てゐる家畜の名をしらべなさい。

ロ、あなたの家には、何か飼つてゐますか。飼つてゐたら、この文の樣な綴り方にしてごらんなさい。

ハ、あなたの村には、どんな家畜がゐますか。どの樣な役にたつてゐるかをしらべなさい。

(3) 考査問題

イ、次の□の中に言葉を入れなさい。

○すわつてゐた山羊は、私の足音を聞きつけて、□と立上りました。

○二匹の子山羊が、□を立てながら、こつちへ□來ました。

○子山羊が生まれた頃は、乳房をくはへて、うまさうに□と吸つてゐました。

○一匹の子山羊が、樹に□をかげながら、私たちを□見ました。

ロ、つぎのかなをかん字になほしなさい。

イヌ　ウサギ　ウシ　ウマ　カヘル　ヘビ　タヒ　コヒ

ハ、つぎのかん字によみがなをつけなさい。

靜かな聲　苦しい心　樂しい日　涼しい空　暑さうな天氣　明かるい窓　悲しさうな目　珍しい花

喜ぶ父　元氣な弟

八林の中

一、教材

(1) 教材　八林の中　　・新出漢字　——讀替漢字（イ）（ロ）……　發科解說

葉は落ちて　　かさ〳〵と鳴る落葉。

明かるいこずゑ、

林の中の　　切株に

小道を行くと、　　腰かけて聞く、

一足一足、　　林の中の

秋の靜かさ。
どこで鳴くのか、
ちゝ、ちゝと、鳥の聲。

高いこずゑは、
小枝小枝が
ふるへるやうに、
まつさをな空に、
くつきりと浮いて居る。

見上げると、

(2) 資料解說　なし。

(3) 連絡　特になし。

(4) 新出文字及表記　切株（カブ）

(5) 難語句　こずゑ　小道　落葉　切株　秋の靜かさ　ふるへるやうに　まつさを　くつきり

(6) 文章　口語常體の敍景詩である。

(7) 挿繪　葉のすつかり落ちつくした秋の風景である。一種の寂寥さを思はせる位だ。本課はあくまでも詩が本體であるから、この挿繪もその詩の情趣をくみとらせる爲の繪として兒童各自に見せるだけで輕く扱ひたいものである。

(8) 教具　なし。

二、教材觀

(1) 題材的に言へば、「林の中」であり、表現の對象から言へば「秋の靜かさ」である。
「秋の靜かさ」を「落葉のひゞき」に聞いたものが第一聯であり、「鳥の聲」に感じたものが第二聯であり、青空に浮く小枝に見出したものが第三聯である。

故に各聯の中心語句として
「かさ〳〵と鳴る落葉」
「ちゝ、ちゝと、鳥の聲」
「くつきりと浮いてゐる」
と見ることが出來得よう。

三聯を統一してゐる統一的語句としては
林の中の
秋の靜かさ

(2) 作者の姿から言へば、第一聯は、「歩みつゝ聽く秋の靜かさ」であり、第二聯は「坐して聽く秋の靜かさ」であり、第三聯は「仰いで見る秋の靜かさ」であるといひ得よう。

(3) 五・七・七・七・七・一〇（五・五）といふ音數で、七音が主音となり、五音が最初と最後に置かれる一聯のリズムを緊張させてゐると見ることが出來る。
秋の靜かさを歌ひ出づるには相應しい落付いた、ひきしまつたリズムである。

三、指導觀

(1) 自然に對して何かしら永遠なるものへ憧憬を持つといつた兒童の心の表現である。
「林の中の、秋の靜かさ。」といふ氣分を基調として、如何にして、そして何によつて此の氣分が醸され、如何なる形によつてこの氣分を描き出してゐるかといふ三點を指導しなければならない。

林の中を靜かに歩んで
（イ）如何にして——切株に腰をかけて
見上げると

かさ〳〵と鳴る落葉
(ロ)何によつて——ちゝ、ちゝと、鳥の聲
小枝がくつきりと浮いてゐる
(ハ)如何なる形で——リズムにのつた朗讀により、全文を書くことにより、暗誦することによつて悟らせる

(2) 此の程度の歌になると、童謡・童詩から遙かに進んで純然たる詩に近づいてゐる。
それだけに兒童の讀解も困難であり、特に落葉のひゞきに秋の靜かさを想ふといふ樣な心境や、小枝がふるへるやうに浮いてゐるといふ樣な表現は、三年の兒童として容易に味ひ得られぬ所であらうと思ふ。
挿繪は勿論、秋の靜かさを描いた繪畫等を利用するなり、教師の説明など適當に挿入して、兒童の心を出來るだけかうした心境に誘導しなくてはなるまい。

四、指導の實際

A 配當時間 二時間
第一時 全文取扱 (主として事實面)
第二時 全文取扱 (主として表現面)

B 指導要領
第一時
(1) 本時の主眼
全文の通讀及び筆寫により、主として何が書かれてゐるかを吟味する。
(2) 指導過程
(イ) 通 讀

(ロ) 話 合
「どんな氣持のする歌か」といふ問を中心に、「何時か」「何處で」「どんな氣持を歌つたのか」といふ點について話合をする。
(ハ) 書 寫
全文を書寫し、書寫したものについて讀みの練習。
(ニ) 深 究
○一番の歌について
小道を歩いて
落葉の音を聞いてゐる
○二番目の歌は
切株に腰かけて
小鳥の聲を聞いてゐる
○三番目は
空を見上げて
ふるへるやうな小枝を見てゐる
といふ點を明かにする。そして何を聞き、何を見ても、そこには「秋の靜かさ」が見出されるといふ點にまで結びつけたい。
(ホ) 通 讀
(ヘ) 練 習
第二時
(1) 本時の主眼
作者の心情を中心として、その心情が如何に表現されてゐるかを讀み味はせたい。
(2) 指導過程
(イ) 通 讀
(ロ) 話 合
前時の深究の中心を復習して、結局この詩は、「秋の靜かさ」を歌つたものであることを反省し、
(ハ) 通 讀
(ニ) 深 究
各節について、作者は「秋の靜かさ」をどこに見出してゐるかを中心に、

○一番目で
かさ〳〵と鳴る落葉
○二番目で
ちゝ、ちゝと、鳥の聲
○三番目で
ふるへるやうにくつきり浮いて居る

の語句を取らせ、中心の語句として
「林の秋の靜かさ」の一句を取らせ、教師の讀みを加へてその表現の巧みさを悟らせる

(ホ) 暗誦
(ヘ) 練習
新字・語句の練習、補充文

五、練習

(1) 練習文　ポプラとからまつ

「いよう、大きなポプラですね。何年ぐらゐたつたんでせう。」
「さあ、でもポプラはほんとうによくのびますからね。枝を折つて土にさしておくと、自分の力でぐん〳〵のびて行くんですよ。」
「かつかうのよい木ですね。」
お客さんは、大空の雲をはきあつめようとしてゐるやうなポプラの立木をかんしんしたやうに見上げました。
「人間もかうまつすぐ、ぐん〳〵とのびられたらしあはせでせうね。」
と言ひますと、
「せめて北海道の子供さん達でも、すなほにのびて行つたら、どんなにしあはせかしれませんね。」
と、お客さんは、私のかほをふりかへりました。
「ポプラだつて、こんなに大きくなつてゐるんですね。」

「ポプラッ、あゝ、落葉松のことですね。いや、大きくなつてゐますね。大きな所へ來ると、何でも大きくそだつんですね。」　（飯田廣太郎）

(2) 家庭學習
(イ) 本を見ずに、讀みと書くことの出來るまで練習しなさい。
(ロ) この詩をお話の文につゞりなさい。
(ハ) 卷五の八、青葉　一六、大川　と此の詩とをくらべて、そのちがひをしらべなさい。

(3) 考査問題
(イ) この詩を讀んで、秋だとわかる言葉を書きなさい。
(ロ) 靜かさのよく現れてゐる言葉を書きなさい。
(ハ) 秋の靜かさを作者は何によつて現してゐますか。
(1) (2) (3) の詩のじゅんに言ひなさい。
(ニ) (1) (2) (3) の詩を、それ〴〵繪に現しなさい。

九　僕の望遠鏡

一、教材

(1) 教材　九　僕の望遠鏡　・新出漢字　——讀替漢字(イ)(ロ)……資料解說

机の引出しをかたづけて居ると、いつか、おぢいさんにいたゞいた目がねの玉と、おとうさんに買つていたゞいた小さい望目

がれが出て來た。

「これは、いゝものが見つかつた。」と思ひながら、僕は、この二つを、重れたり別々にしたりして、机の上を見たり、外の景色をのぞいたりして居た。

其のうちに、ふと、おもしろいことを發見した。

左の手に目がれを持つて、目から遠くはなした。すると、向かふの景色が、小さく、さかさまに見えた。其のさかさまに見える景色を、大きくして見ようと思つて、右の手に蟲目がれを持つて、のぞいて見た。

僕は驚いた、どこかの屋根が、目がれの玉一ぱいに廣がつて、つい四五米ぐらゐの所にあるやうに見えるではないか。それは、こゝから百米もはなれて居る、向かふの家の屋根であつた。

「おもしろい。これで、いつか、おとうさんのお話に聞いた望遠鏡(イ)が、出來るかも知れない。」かう思ひつくと、僕は、もうじつとして居られなくなつた。

僕は雲用紙を取出した。さうして、其の一枚を、ぐる〳〵と卷いた。ちやうど、目がれの玉がはまるくらゐの大きさに卷いて、其の一方のはしに、目がれの玉をはめた。きちんとはまつた時、卷いた紙を、輪ゴムでぎり〳〵と卷いて、動かぬやうにした。これで、一本の筒が出來上つた。

次に、もう一枚の雲用紙を、ぐる〳〵と卷いた。

さうして、さつきの筒の中へ、ちやうど、それがする〳〵とはいるくらゐの大きさに作つて、それをのりづけにした。さうして、其のはしに、蟲目がれを取りつけた。少しむづかしかつたが、のりで、どうにかはりつけることが出來た。

かうして出來た二本の筒は、うまくくびあつて、長くのばしたり、ちゞめたりすることが出來た。

さあ出來たぞと思ふと、うれしくもある。胸もどき〳〵する。うまく見えるかどうか。

景色をのぞいて見た。長い物が、ぼんやり見える。二つの筒を、のばしたり、ちゞめたり、かげんしてゐるうちに、はつきり

した。電柱だ。針金が六本あることまでわかる。

もつと下を見る。屋根だ。しやうじだ。おや、唯かが、しやうじの間から顔を出して居る。

僕は、もう、むちゆうだつた。急いでおかあさんの所へ行つた。

「おかあさん、來てごらんなさい。早く〳〵。」

おかあさんは、目を丸くして。

「何です。大きな聲をして。」

「何でもいゝから、來て下さい。」

僕は、おかあさんを引張るやうにして、連れて來た。さうして、僕の望遠鏡をのぞいてもらつた。

「まあ、よく見えるね。でも、すつかりさかさまぢやないの。」

僕は言つた。

「さかさまでも、よく見えるでせう。」

「なるほどね。向かふの家の、おぜんたく物が見えます。あ、人がこつちを見て居る。森の木がきれいですね。」

しばらく見て居られたおかあさんは、おつしやつた。

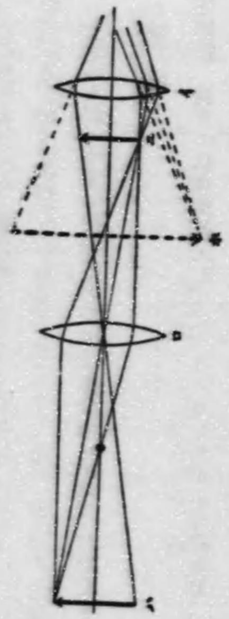
「お前はえらいね。誰に教へてもらつたの。」

僕は、すつかりとくいだつた。

「誰にも教へてもらはないのです。僕が考へて作つたのです。」

(2) 資料

望遠鏡 遠方の物體を擴大してはつきり見るための光學機械。屈折望遠鏡と反射望遠鏡との二種がある。屈折望遠鏡の中には天體望遠鏡・地球望遠鏡・ガリレオ望遠鏡などの種類がある。



屈折望遠鏡は對物レンズで物體の像を作り、それを接眼レンズで擴大する。

反射望遠鏡は凹面鏡で物體の像を作り、これを接眼レンズによつて擴大する。互に一長一短がある。

本文は屈折望遠鏡の理によつたものである。

屈折望遠鏡の原理を示すならば上圖の如くなる。(イ)は接眼レンズ。(ロ)は對物レンズ。(ハ)は物體。(ニ)は對物レンズによつて擴大された虚像である。

(2) 連絡　所謂科學的教材の文學的表現である此の文章は、既出の同種類の課(本書の四、磁石の本項參照)と一脈の連絡を持つものであり、これ等の教材を總合し、その底に流れてゐる編纂者の意圖するところを豫め考へておくべきである。

(4) 新出文學及表記

イ、机(ツクエ)　驚(オドロ)いた　書(グワ)用紙(シ)　筒(ツヽ)　電柱(チユウ)

ロ、略字——書(画)　既出の略字——萬(万)　蠶(蚕)　蟲(虫)　絲(糸)

(5) 難語句　蟲目がね　景色　發見　望遠鏡　筒　のりづけ　くひ合ふ　電柱　むちゆう　すつかりとくい

(6) 文章　口語常體の文章である。七、山羊の女兒らしい表現と、本課の男兒らしい表現とをくらべさせて、その言葉遣の相違を味はせて見ることも必要なことであらう。

(7) 挿絵　五十二頁は作者が作つた望遠鏡で電柱をのぞいて見てゐるところ。五十三頁の繪はその望遠鏡にうつつた電柱の虚像である。

(8) 教具　目がねの玉と蟲目がねとを用意して、あらかじめ兒童に與へておくこと、望遠鏡の實物を知らぬ兒童には適當な繪畫・寫眞によつて、文化的價値に關する豫備知識を與へたい。

二、教材觀

(1) 「僕の望遠鏡」といふ題目には、二つの意義が含まれてゐる。

一つは、「僕の作つた望遠鏡」であり、一つは、「さかさまに見える望遠鏡」である。

「僕の作つた」といふ點に、作者の生活態度の優れた點を見出すと共に、「さかさまに見える」といふ點に作者の生活に將來性のあることを示してゐる。(勿論さかさまに見える望遠鏡は、大體望遠鏡の一種としてそのまゝ望遠鏡とはなるが、然し之を如何にしたら双眼鏡の如く正しく見得ることが出來ようかといふ工夫は必ず出て來るものであらうと思ふ。)

然し三年の兒童にとつては、後者の問題は將來に殘すべきであつて、この意味で、母が、「でも、すつかりさかさまぢやないの。」と言つたきりで、どうしたら正しく見えるかといふ點に觸れず、(母は望遠鏡に二種あることを知らなかつたのかも知れないが)たゞその出來榮を褒め、その創作を賞讃してゐる態度は、適切だと思はれる。

(2) 叙述の展開は、

一、目がねの玉と、蟲目がねが見つかつた。

二、この二つのもので色々な物を見た。

三、おもしろい事を發見した。

目がねで見た小さなさかさまな景色を、

蟲目がねで大きくして見た
——望遠鏡が出來るかも知れない——
四、望遠鏡の製作
目がねのはまつた筒
蟲目がねのはまつた筒
二つの筒をくひ合はした
五、望遠鏡の試驗
二つの筒を調節して　はつきりと見える
六、成功の喜び
母を連れて來てのぞいて貰ふ
母の賞讃と作者の得意
となつてゐるが、勿論、全篇の中心は、最後の
「誰にも敎へてもらはないのです。僕が考へて作つたのです。」
に存する。

三、指導觀

(1) 科學的な生活敎材である。卽ち作者が望遠鏡を、自ら工夫し創作した苦心と喜びとを如實に表出したものであつて、我々は此の文を通して、兒童の心に芽生える科學生活への憧憬を高揚すると共に、工夫・創作の態度

を刺戟しなければならない。
卽ち科學的知識の授與ではなくて、科學生活の創造である。
(2) 此の意味で、本文の取扱に於ては、何處までも作者の態度——卽ち作者の言ふ如く、
「誰にも敎へてもらはないのです。僕が考へて作つたのです。」
といふ態度が中心であり、「僕が考へて作つた」といふ言葉に潜む作者自らの工夫・創作、從つてそれに伴ふ苦心と喜び……さうしたものをよく味讀させなくてはならない。
其の爲には、さうした作者の心境を叙述した言葉、
○「これは、い〳〵物が見つかつた。」
○ふと、おもしろい事を發見した。
○さかさまに見える景色を、大きくして見ようと思つて、
○僕は驚いた。
○「おもしろい。これで……出來るかも知れない。」
○かう思ひつくと、僕は、もうじつとして居られなくなつた。
○少しむづかしかつたが、のりでどうにか……
○さあ出來たと思ふと、うれしくもある。胸もどき〳〵する。
○うまく見えるかどうか。
○僕は、もう、むちゆうだつた。
○急いでおかあさんの所へ行つた。

○「おかあさん、來てごらんなさい。早く〳〵。」
○「何でもいゝから、來て下さい。」
○僕は、おかあさんを引張るやうにして、連れて來た。
○「さかさまでも、よく見えるでせう。」
○僕は、すつかりとくいだつた。
○「誰にも敎へてもらはないのです。僕が考へて作つたのです。」

等十分味讀させなくてはならない。

四、指導の實際

A 配當時間　五時間

第一時　全文取扱　主として製作の過程を概覽
第二時　最初から五十頁六行まで
第三時　五十頁七行から五十三頁八行まで
第四時　五十三頁九行から最後まで
第五時　全文取扱　補充文

B 指導要領

第一時

(1) 本時の主眼

全文の通讀を主とし、望遠鏡製作の過程を知らしめる。

(2) 指導過程

(イ) 通　讀
(ロ) 話　合

題目「僕の望遠鏡」について、
○望遠鏡についての兒童の既有觀念を整理
○「僕の望遠鏡」といつたのは——「僕の作つた望遠鏡」であること。
○「どんな望遠鏡であつたか」といふことから
「さかさまに見える望遠鏡である」
等について話合をし、望遠鏡に二種あることに觸れておく。

(ハ) 通　讀
(ニ) 深　究

「どういふ風にして望遠鏡を作つたか」といふ問から出發して、
目がねの玉
蟲目がね
書用紙
二本の筒
さかさまでも、よく見える
おかあさん
等の語句を書かせ、どんな風にして望遠鏡を製作し、どんな望遠鏡が出來かか等を一通り吟味する。

(ホ) 通　讀
(ヘ) 練　習
新字の書方指導。

第二時

(1) 本時の主眼

作者が目がねの玉と、小さい蟲目がねで遊んでゐる中に、望遠鏡が出來るかも知れないと考へつき、じつとして居られなくなつたこと——如何にして僕の望遠鏡は作られることになつたかの考察。

(2) 指導過程

(イ) 通　讀
(ロ) 話　合

前時のノートによつて復習し、本時教材の範圍を定める。

（ハ）通　讀（本時教材）

（ニ）深　究

問答によつて、

「これは、いゝ物が見つかつた。」

ふと、おもしろい事を發見した。

目がねの玉

目から遠くへはなした

向かふの景色が、小さく、さかさまに見えた。

蟲目がね

のぞいて見た　（驚いた）

目がねの玉一ぱいに廣がつて

「おもしろい。これで。いつか、おとうさんのお話に聞いた望遠鏡が、出來るかも知れない。」

もう、じつとして居られなくなつた。

等の語句を中心とし、特に。。。の個所に現はれた作者の心持を樣々に想像させて、「じつとして居られなくなつた氣持」をよく讀ませたい。

（ホ）通　讀

（ヘ）練　習

第三時

(1) 本時の主眼

意々望遠鏡の製作に掛り、苦心して作つた結果成功を見たこと。

(2) 指導過程

（イ）通　讀（全文及び前時教材）

（ロ）話　合

前時のノートを中心に復習し、本時教材の範圍を定める。

（ハ）通　讀（本時教材）

（ニ）深　究

問答によつて、

目がねの玉をはめた――一本の筒

蟲目がねを取りつけた――一本の筒

（少しむづかしかつたが）

さあ出來たぞと思ふと、うれしくもある

胸もどき〳〵する

うまく見えるかどうか

景色をのぞいて見た

はつきりした

しやうじの間から顏

等の語句を書取らせ、望遠鏡の製作――特に。。。の個所について、作者の心持を想像させなければならない。――引續に連絡して――

（ホ）通　讀

（ヘ）練　習

第四時

(1) 本時の主眼

成功した喜びに母を連れ出し、母から褒められて一層嬉しくなつた作者の心持を讀ませる。

(2) 指導過程

（イ）通　讀（全文及び前時教材）

（ロ）話　合

前時のノートを中心として復習し、本時教材の範圍を定める。

（ハ）通　讀（本時教材）

（ニ）深　究

問答によつて、

僕は、もう、むちゆうだつた。

「おかあさん、來てごらんなさい。早く〳〵。」

おかあさんは、目を丸くして

おかあさんを引張るやうにして

「まあ、よく見えるね。でも、すつかりさかさまぢやないの。」

「さかさまでも、よく見えるでせう。」

「なるほどね。向ふの家の、おせんたく物が見えます。あ、人がこつちを見て居る。森の木がきれいですね。」

「お前はえらいね。誰に教へてもらつたの。」

僕はすつかりとくいだつた。

「誰にも教へてもらはないのです。僕が考へて作つたのです。」

等の語句を書取らせ、此處に溢ぎる作者の喜び得意さと、母の感心してゐる心持をよく味はせたい。特に最後の一句に、作者の得意の絶頂が存すると共に、作者の偉いところがあつたのであることを考へさせたい。

（ホ）通　讀

（ヘ）練　習

第五時

(1) 本時の主眼

全文の反省と補充文の讀解。

(2) 指導過程

（イ）通　讀

（ロ）問　題

一、作者はどんなことから望遠鏡を作らうとしたか。

二、作つて行く途中、出來上つた時の作者の心持はどうであつたか。

三、どんな望遠鏡が出來上つたか。

等の問題によつて全文を反省し、更に三の問題については、

「さかさまだが、よく見える」といふ答から、

「では、こんどこの人がもつと工夫するとしたらどんな工夫をするだらうか」といふ問題を與へ、

「もう一種の正しく見える望遠鏡」といふ答から、

「さあどうしたらさかさまに見えないやうな望遠鏡が出來るか――之がこの後に工夫する所だね。」と將來の暗示として與へておきたい。

（ハ）通　讀

（ニ）補充文、練習

五、練　習

(1) 練習文　　望遠鏡の發明

イタリーの西海岸にあるピサといふ町に、三百七十年ほど前にガリレオといふ學者が生れました。

ガリレオは、はじめ醫者にならうといふ考であつたが、學者になる勉强をして、二十五さいの時に大學校の先生になつたほどでありました。その勉强のしぶりは昔の學者のしたあとをまねをするやうなことはしないで、自分で考を立てゝ自分でしらべてゆくといふ心がけで、勉强しました。

そしていくつものたふとい發明をしました。その中に望遠鏡の發明もあるのです。

ガリレオが四十五さいの頃、鄂の次だらから、

「オランダのめがね屋が、ふしぎなめがねを、ドイツの王子さまにけんじやうした。そのめがねは、遠くにあるものが、近くにあるやうにはつきり見えるきかいである。」

と知らせて來ました。しかしそのきかいのくみたてについては、少しも書いてなかつたので、ガリレオは、このきかいについて、夜中考へました。やうやく朝方になつてそのくみ立てを考へたといふことです。

そのきかいは、二枚のレンズで出來てゐて、一枚は大きく見えるので、一枚は小さく見えるのでした。之をくみ合はせて、くふうしたのでした。はじめは何にも見えなかつたが、いろ〳〵動かしてゐる内に、遠くにあるものが、三倍ぐらゐの大きさに見え出しました。そこでガリレオは、すぐこのきかいをかいりようしはじめて、間もなく、三百米にあるものが十米の近くにあるやうに見え、大きさは千倍ほどにも見える望遠鏡をくみたてることが出來たのでした。

ガリレオは大よろこびで、それを持つてベニスといふ大きな町に行き、お寺の一番高い所にすゑつけて海を見るやうにして多くの人々にそれを見せました。

「港でなら二時間も後でないと見えない神の船を見ることが出來る。」

といひました。

此の大發明で、ガリレオの名は世界のすみ〻まで名高くなりました。

はじめ考へたオランダからも、そのつくり方をならひにきたといふことです。　（少年物理歴史より抄出）

(2) 家庭學習

イ、作者が目がねの玉と蟲目がねとを見つけて、望遠鏡をつくるまでの苦心をじゅんにしらべなさい。

ロ、一つの發見をするたびに苦しんだり、考へたり、喜んだりした心持の現はれてゐる言葉をしらべなさい。

ハ、卷一のヒカウキ、グンカンから卷六の望遠鏡までの間に讀本に現はれた機械を書きなさい。

ニ、七、山羊の文とくらべて、男の子らしい心持のあらはれてゐる言葉を書きなさい。

ホ、あなたの發見をこの文のやうにつくりなさい。

(3) 考査問題

イ、つぎの心持を現す言葉は、どんな時に使ふか。一つづゝ例をあげなさい。

ふと　じっとして居られない　どうにか　胸がどき〳〵する　おや　むちゆう　目を丸くして

まあ　なるほど　とくい

ロ、つぎの文を讀んで問に答へなさい。

目がねの玉と、蟲目がねを見つけて、「これは、いゝ物が見つかった。」と思ひながら、僕は、此(1)の二つを、重ねたり別々にしたりして、机の上を見たり、外の景色をのぞいたりして居た。其(2)のうちに、ふと、おもしろい事を發見した。

(1) の「此の二つ」とは何のことですか。

(2) の「其のうちに」とは、どうしてゐるうちといふことですか。

ハ、絲　雲　雲　萬　蟲　の五つのかん字を書きなさい。

十神風

一、教材

(1) 教材　十神風

・新出漢字　——讀書漢字(イ)(ロ)……資料解說

博多の沖は、見渡すかぎり、元から押寄せた船でおほはれた。十何萬といふ大軍である。

四國・九州の武士は、博多の濱に集った。元の兵は、一人も上陸させぬといふ意氣ごみで、濱べに石垣をきづいて守った。

我が軍は、敵の攻寄せるのを待ちきれず、こっちから押寄せた。敵は、高いやぐらのある大船、こっちは、釣舟のやうな小舟であった。けれども、我が武士は、船の大小などは、少しも氣にしなかった。草野永郎の妹きは、夜、敵の船に押寄せて、首を二十一取って、敵の船に火をかけて引上げた。敵は、北の勢に恐れて、鎖のくさりで船をつなぎ合はせた。まるで、大きな島が出來たやうなものである。

（ハ）河野通有は、たった小舟二そうで向かった。

敵は、はげしく射立てた。味方は、ばたん〻とたふれた。通有も左の肩を射られたが、少しも屈せず、刀をふるって進んだ。いよいよ敵の船に押寄せたが、高くて、上ることが出來ない。通有は、帆柱をたふして、これをはしごにして、敵の船へなだりこんだ。味方は、後から後からと續いた。さん〻に切りまくって、其の船の大將を、生けどりにして引上げた。

其の後も、攻寄せる者がたえないので、敵は、一先づ沖の方へ退いたが、又押寄せて來るのは明らかである。實に、我が國にとっては、これまでにない大難であった。

恐れ多くも、(ニ)亀山上皇は、御身を以て國難に代らうと、おいのりになつた。武士といふ武士は、必死のかくごで防いだ。百姓も、一生けんめいで、ひやうらうを運んだ。全く、上下の者が心を一にして、國難に當つたのである。

此のまごころが神のおぼしめしにかなつたのであらう、一夜、大風が起つて、海はわき返つた。敵の船は、こつぱみぢんにくだけて、敵兵は、海の底にしづんでしまつた。生きてかへつた者は、數へるほどしかなかつたといふ。

(2) 資料

(イ) 元寇　文永・弘安の兩度元軍が我が國に入寇した。前者を文永の役と稱し後者を弘安の役と稱す。

文永の役――文永十二年、元の主帥忽必烈は洪茶丘等を大將として高麗兵を合して戰船四百五十隻、兵數萬をつかはして我が國に寇せしめた。十月賊先づ對馬を侵した。守護代の宗助國之れと戰つて戰死した。ついで壹岐を掠めたので守護代平景隆等大いに奮戰してこれにあたつたけれども遂にこれも戰死した。賊は勢に乘じて愈々進み筑前に迫つて來た。少貳景資等部下を督して大いにこれと戰つたけれども利がなかつた。たま〳〵風雨起り、それが爲に元軍多數の戰船を失つたばかりでなく我が軍の襲擊をしきりに受けたので十一月二十日の夜遂に退散してしまつた。これを文永の役といふ。

弘安の役――文永の役に利がなかつたばかりでなく、あまつさへ使者五名が鎌倉の龍口で斬られたので、忽必烈大いに怒つて弘安四年(文永の役後七年)洪茶丘等を大將として元兵三萬、高麗兵一萬を率ゐしめて再び我が九州に寇せしめた。壹岐・對馬を襲うて侵掠をほしいままにし、進んで筑前にせまつて來た。我が兵よく防ぎ、河野通有・竹崎季長等奇襲を試みて大いに敵を惱ました。ついで元の將范文虎は十萬の兵を率ゐて肥筑の海上に押寄せて來たが、目的を果さず、退いて肥前の鷹島によつた。たま〳〵七月の晦日の夜半から明くる閏七月一日にかけて大風俄に起つて、敵船碎破し覆沒するものその數を知らない有樣であつた。我が軍之に乘じて大いに討ち、或は殺傷し或は捕虜するなど思ひの限りをつくした。大將范文虎は僅かに死を免れて元に逃げ歸つた。これを弘安の役といふ。

本文はこの弘安の役を叙述したものである。

(ロ) 元　蒙古民族の建設した國。蒙古民族はもと不兒罕(ブルハン)山の邊に遊牧してゐたが、其の酋長鐵木眞(テムヂン)、諸部落を統一して西暦一二〇六年大汗の位につき西夏を降し、金を攻め、西遼を併せ、又諸をつかはして遠く中央アジアを征服した。其の子太宗は金を滅し、朝鮮半島を服し、又波蘭(ポツ)をつかはして西歐を侵略し、憲宗の時には旭烈兀(フラク)をしてペルシヤ・トルコ方面を征ぜしめ、或は安南・雲南方面を服した。世祖忽必烈の時にいたり都を燕京(北平)に定めて國號を元と稱し、一二七九年宋を滅して支那を統一し、日本征伐には失敗したが、南海諸國を入貢せしめて、歐亞大陸に跨る大帝國を建設した。しかしクヨルルタイによる王位繼承の爭を屢々起し、權臣の跋扈これに伴ひ、加ふるに財政の紊亂と漢民族の反抗とがあり、群雄各地に蜂起して遂に一三六八年朱元璋のために滅ぼされた。世祖が國號を元と稱してからこゝに至るまで僅かに九十八年である。

(ハ) 河野通有　鎌倉時代の武將。河野通信の曾孫。勇勇膂力あり、對馬守に任ぜられ、弘安年中蒙古の九州に寇するや、遍有能を防いで連戰十數合、大いにこれを破り敵將を虜にした。殊に單獨敵船に闖入奮戰した如き、戰場の壯話とされてゐる。贈正五位。

(ニ) 亀山上皇　第九十代の天皇。諱は恒仁。後嵯峨天皇の第七皇子。御母は藤原姞子。後深草天皇の同母弟。正元元年十一月御即位、文永十一年位を皇太子世仁に讓り、院政を聽き、後、出家して金剛源と號し嘉元三年崩御、寿算五十七。文永十一年蒙古入寇のとき、上皇の御身をもつて伊勢神宮に敵國降伏を祈り給ふた。

(3) 遠絡　本書の一、神武天皇の本項參照。

(4) 新出漢字及表記　沖(オキ)　押(オシ)寄せた　船(フネ)　濱(ハマ)　土(ジャウ)陸　石垣(ガキ)　大鼓(セン)　大小(セウ)　如(ゴトク)き　肩(カタ)　屈(クツ)せず　帆柱(ホバシラ)　退(シリゾ)いた　大難(ナン)　防(フセ)いだ　全(マッタ)く　當(アタ)つた　數(カゾ)へる

(5) 難語句　見渡すかぎり　押寄せる　おぼはれる　大軍　武士　四國　九州　博多　上陸　意氣ごみ

漕ぐ　石垣　きづく　我が軍　敵　待ちきれず　大船　やぐら　釣舟　氣にしない　引上げる　勢
はげしく射立てる　味方　屈せず　をどりこむ　生けどり　たえない　大難　御身をもつて國難に代らう
必死のかくご　防いだ　百姓　ひやうらう　上下の者　まごころ　神のおぼしめし　わき返る　こつぱみぢん

(6) 文章　口語常體の叙事文であるが、戰記らしい力に充ちたものである。一、神武天皇　六、日本武尊　の課同樣、新出漢字、難解な熟語の多い教材で此の頃の兒童の讀書力養成に適當な課である。

(7) 挿繪　河野通有が小舟に乘じて敵船にせまり、帆柱をたふして梯となし敵の船に躍り込まんとする有樣。大刀を振りかざして將に敵船に入らんとしてゐるのが通有。激浪に乘じて巨大なる敵船に小舟をもつて襲つてゐる通有の勇猛果敢な奮戰振を親はしむべきである。敵船を我が小舟とを比較し、また敵兵と我が將卒の武器とを對照して當時元軍の軍備が如何に進歩してゐたかを考へさすべきである。

(8) 教具　特に必要なきも學習資料として當時の國史地圖、風俗其の他を示す繪畫・寫眞等を兒童に與へておくのもよい。

二、教材觀

(1) 本卷で舊國語讀本卷六の教材を大體そのまゝ採つてゐるのは、本課と「千早城」の二篇があるのみである。本課の如きも、殆んど從來の文章と變りはない（漢字の使用などは異つてゐるが）たゞ訂正された點を比較してみると、

○五七頁二行「我が軍は」――從來のは「我が武士は」

○五十七頁六行「草野次郎」――從來のは「草野の次郎」（從つて今回のはクサノ、ジラウと讀ませる積りである

らう）

○五十八頁三行「河野通有は」――從來のは、この上に「此の時」といふ話が入つてゐる。

○五十八頁二行「いよ〳〵敵の船に押寄せたが、高くて、上ることが出來ない。」――從來のは「いよ〳〵おしよせたが、敵の船は高くて上ることが出來ない。」

○六十一頁四行「大風が起つて」――從來のは「大暴風雨がおこつて」

○尙、從來のには、結びとして

「それからこゝに六百餘年、まだ一度も外國から攻められたことはない。」

といふ一節があつたが、今回は之を全然削除した「神風」といふ物語教材から見て、最後の方は寧ろ削除した方が相應しく、文の餘韻も存すると思はれる。

挿繪は從來のは半頁程度のものであつたが、今回は上段二頁に亘つて大きく描かれてゐる。（勿論、擴大した方が氣分が鮮やかに出るわけだ）

(2) 我國にとつて從來嘗て無かつた一大國難――然もこの國難を打開した力は何であつたか。

國史教授に於て此の力を、

一、龜山上皇の御祈願

二、執權北條時宗の英斷

三、擧國一致の忠誠

四、天　祐――神　風

といふ樣に認めるのが普通であらう。

本文では「神風」を題目とし、然もその神風は如何にして起つたか、

「此のまごころが神のおぼしめしにかなつたのであらう」

と記されてある。「此のまごころ」とは、一、二、三を指すのである。（時宗の英斷だけは本文では除いてあるが）

然して、そのまごころは單に天祐を頼んで難を逃れやうとする消極的なものではなかつた。實に國難打開のために進んで奮鬪しようとする意氣に滿ちた進取的な態度であつた。

前半の叙述は正しくその燃ゆる意氣と、進取的な奮鬪の態度を明かに語つたものであると見てよい。

文の叙述もまたこの種の物語に相應しい力に充ちた、張りのある叙述であると思ふ。

(3) 叙述の展開は、

一、元の大軍の押寄せたこと

二、我が軍の防禦

三、我が軍の奮戰――草野次郎

四、河野通有の奮戰

五、我が國の大難

六、龜山上皇の御祈願と擧國一致の忠誠。

七、神　風――元軍の全敗

で、題目は「神風」であるが、主として叙述されてゐるものは、河野通有・草野次郎等の雄將を中心とする我が軍の眼覺しい奮戰振りである。（之が神風の起るに至つた一つの力であつたと見るのである）

三、指導觀

(1) どうして元軍が全敗したか（換言すれば如何にして國難から免れることが出來たか）と質ねたならば、兒童は「神風が起つたから」と答へるであらう。

題目から考察しても、それで一まづ正しい。

然らばどうして神風が起つたのだらうかと、反問すれば、それは

一つは「龜山上皇が御身をもつて國難に代らうと、おいのりになつた」――からであり、

一つは、「武士といふ武士は、必死のかくごで防いだ。百姓も、一生けんめいで、ひやうらうを運んだ。全く、上下の者が心を一にして、國難に當つた」

そして、

「此のまごころが、神のおぼしめしにかなつたのであらう」

からといふことになるわけである。

然して國民が擧國一致、然も進んで敵を討つたといふ勇武、進取の風が、草野次郎・河野通有の奮戰に表現されてゐる。

此の意味で、叙述の中心になつてゐるものは、兩將の奮戰であるが、この奮戰は「神風」といふ題目に對してどういふ地位にあるものであるかを教授者は明瞭に認識しておく必要があると共に、歴史的立場からいつて本課は正に國家擁護史として「千早城」の皇室擁護史と共に意義の深いものであることを考へておかなければならない。

(2) 戦記の文として相應しい力強い表現をよく讀ませ、文の調子を感得させたい。

四、指導の實際

A 配當時間　五時間

第一時　全文取扱

第二時　最初から五十八頁二行まで

第三時　五十八頁三行から六十頁六行まで

第四時　六十頁七行から最後まで　全文

第五時　練習　補充文

B 指導要領

第一時

(1) 本時の主眼

全文の通讀を主として、物語の筋を明かにする。

(2) 指導過程

(イ) 通　讀

(ロ) 話　合

題目「神風」といふ意味から、兒童の讀み得た點を自由に發表させる。

(ハ) 通　讀

(ニ) 深　究

問答により

博多の沖

元から押寄せた船

我が軍

草野次郎

河野通有

これまでにない大難

亀山上皇

武士

百姓

神風

敵の船、敵兵

の語句を書取らせ、之を中心として物語の筋を明かにすると共に、

「元とは何か」「何故日本に攻寄せて來たか」を簡單に説明し、地圖によつて「博多の沖」などを明かにすることも大切である。

(ホ) 通　讀

(ヘ) 練　習

第二時

(1) 本時の主眼

草野次郎の奮闘を中心に、敵を迎へ討つた我が軍の意氣込みを讀ませる。

(2) 指導過程

(イ) 通　讀（全文）

(ロ) 話　合

前時ノートを中心に物語の筋を復習し、本時教材の範圍を定める。

(ハ) 通　讀（本時教材）

(ニ) 深　究

問答によつて、

見渡すかぎり船でおほはれた

元の兵は、一人も上陸させぬといふ意氣ごみ

敵の攻寄せるのを待ちきれず

船の大小などは、少しも氣にしなかつた

草野次郎

夜、敵の船に押寄せて

まるで、大きな島

の語句を書取らせ、草野次郎の奮戰振りを中心に我が軍の燃ゆるやうな意氣を想像させたい。

(ホ) 通　讀

(ヘ) 練　習

第三時

(1) 本時の主眼

河野通有の奮戰を讀ませると共に、然し之は日本にとつてかつて無かつた大難であることを思はせる。

(2) 指導過程

(イ) 通　讀（全文・前時教材）

(ロ) 話　合

前時のノートによつて復習し、本時教材の範圍を定める。

(ハ) 通　讀（本時教材）

(ニ) 深　究

問答によつて、

河野通有

小舟二そう

味方は、ばた〳〵とたふれた

少しも屈せず、刀をふるつて進んだ

敵の船へをどりこんだ

大將を生けどり

又押寄せて來るのは明らかである

實に、我が國にとつては、これまでにない大難であつた

等の語句を書取らせ、之を中心として、挿繪にも結びつけて、通有の奮戰を想像させると共に、これが我が國にとつてこれまでにない大難であつたことを考へさせたい。（そのために教師の適當な說話を挿む必要がある。）

(ホ) 通　讀

(ヘ) 練　習

第四時

(1) 本時の主眼

國難に處して國民は如何にしたか——卽ち之が神風の起る起因となつて、遂に國難が打開され、國威意々揚つたことを明かにする。

(2) 指導過程

(イ) 通　讀（最初から前時まで）

(ロ) 話　合

前時ノートによつて復習し、本時教材の範圍を定める。

(ハ) 通　讀

(ニ) 深　究

問答によつて、

御身をもつて國難に代らうと
おいのりになつた
必死のかくごで防いだ
一生けんめいで、ひやうらう
を運んだ
← 上下の者が心を一にして

← 神のおぼしめしにかなつたのであらう

← 大風

← こつぱみぢんにくだけ
海の底にしづんで

の語句を書取らせ、之を中心として、この國難に處して、擧國一致盡忠の誠を致したこと、之が神意にかなつて神風の起つた所以を讀ませ、遂に國難の打開された喜びを讀ませる。

(ホ) 通　讀（全文）

(ヘ) 練　習

第五時

(1) 本時の主眼

○全文の復習と文字・語句の練習應用。

○補充文の讀解

(2) 指導過程（省略）

五、練　習

(1) 練習文　元　寇

元といふ國は支那の北の蒙古からおこつた國です。この蒙古にチンギスカンといふ英雄が出てから、ひじやうにいきほひが盛くなつて來て、ロシヤやドイツの方までせめて、大へん大きな國になりました。そして都を今の北平（ペーピン）にさだめました。

この蒙古兵の強いといつたらひじやうなものです。ロシヤなせめた時などは、ロシヤの方で一生けんめいふせぎましたが、たちまちまけて、生きかへつた兵は十人に一人のわり合だつたといひます。かうしてロシヤからドイツにまでせめこんでいつたのでした。どこでもいくさには勝つて、町をやきはらひ、人民をころし、さん〳〵あばれまはつたのでした。ですから支那も朝鮮も一たまりなくかうさんしてしまひました。

この強い蒙古軍が、勝つたいきほひで、我が日本へおしよせて来たのです。蒙古の王から手紙（國書）を送つてきました。その中に、自分のことを大蒙古國皇帝と書き、あてなは日本國王としか書かず、おまけにその終りのもんくは、

「こちらの言ふとほりにするか、それともいくさをするか、のぞむ通りにいたさう。」

といふいみでした。

さむらひの大將北條時宗はすぐこれを天皇へ申し上げました。天皇は蒙古の無禮をおいかりになつて、だんぜんごへんじを出されないといふことにきまりました。時宗はさつそく、九州のまもりにちゆういしました。それから後、蒙古からたび〳〵つかひがきますが、時宗はみなそれを追ひかへしました。

そのうちに蒙古は國の名を元（ゲン）とあらためました。我が國がどうしても下につかないので、王はたいへんはらを立てゝ、大軍をさしむけて我が國をおそひました。（日本歴史物語より抄出）

(2) 蒙古學書

（イ） 一、神武天皇　六、日本武尊　十、神風　とつゞけて、よく讀みなさい。

（ロ） 兄さんか姉さんから國史の上卷の元寇のお話を聞きなさい。

（ハ） 漢字二字の言葉を拾めて書取しなさい。

（ニ） 一から十までの新字の練習をしなさい。

(3) 考査問題

イ、つぎの文を讀んで問に答へなさい。

博多の沖は、見渡すかぎり、元から押寄せた船でおほはれた。十何萬といふ大軍である。

恐れ多くも、龜山上皇は、御身をもつて國難に代らうと、おいのりになつた。武士といふ武士は、必死のかくごで防いだ。百姓も、一生けんめいで、ひやうらうを運んだ。全く、上下の者が心を一にして、國難に當つたのである。

○「國難」といふのは、この文のどこをさすのですか。

○龜山上皇はどうなさいましたか。武士は……。百姓は……。

○「上下の者」とは、どういふことですか。

○「心を一にして」どんなことをしようとしたのですか。

○このために國難はどうなりましたか。

ロ、つぎのかん字によみがなをつけなさい。

帆柱——電柱　大小——小雪　大船——船の上　書用紙——白い紙　上陸——川上

ハ、つぎの文をわかりやすくなほしなさい。

○博多の沖は元の船でおほはれた。

○少しも屈せず刀をふるつて進んだ。

○攻寄せる者がたえない。

○武士といふ武士は必死のかくごで防いだ。

○一夜、大風が起つて、海はわき返つた。

十一　軍　旗

一、教　材

(1) 教材　十一　軍　旗　(イ)

・新出漢字　――讀特漢字(イ)(ロ)……資料解說

かしこくも、
天皇陛下
御手づから、授け給うた
尊い軍旗、尊い軍旗。

身をすてて、
皇國のために、
まつしくら、進む兵士の
しるしの軍旗、しるしの軍旗。

みだれ飛ぶ
たまに破れて、
殘のてがらをかたる
ほまれの軍旗、ほまれの軍旗。

おごそかな
ラッパのひゞき。
目の前を今過ぎて行く
尊い軍旗。拜せよ、軍旗。

(2) 資　料

(イ)軍旗　歩兵及騎兵聯隊に各一旗を有してゐて、聯隊の存否を表彰すべき貴重なる旗旗である。聯隊成立の際天皇より親授せられるものである。旭日及光線は赤色、竿頭菊花は金色、周圍は金モールで閉んである。その常備聯隊のものは紫色、後備聯隊のものは赤色の絹絲織飾房を附してこれを分つ。圓中の白く抜きたる

角(歩兵は八寸に七寸、騎兵は五寸四方)には聯隊番號を入れる。
大きさは歩兵軍旗は縱二尺六寸四分橫三尺三寸、騎兵軍旗は縱橫共に二尺四方。

(3) 連　絡

イ、新讀本に現れた軍事教材には次の如きものがある。

卷一――ヘイタイス、メ(六頁)　ヒカウキ(二一頁)　卷二――なし　卷三――なし
卷四――海軍のにいさん(三)　ニイサンノ入營(一四)　卷五――犬のてがら(二二)
卷六――軍旗(一一)　潛水艦(二二)

ロ、旗に關しては卷一にヒノマルハタ(七頁)がある。

(4) 新出漢字及表記　軍旗(キ)　陛下(ヘイカ)　給(タマ)うた　尊(タフト)い　拜(ハイ)せよ

(5) 難語句　かしこくも　御手づから　授け給ふた　尊い　軍旗　皇國　身をすてゝ　まつしくら
みだれ飛ぶ　ほまれ　おごそか　拜せよ軍旗

(6) 文　章　口語常體の叙情詩であるが、文語調に近い力のこもつた嚴肅な感じに充ちた語調である。

(7) 挿　繪　軍旗を先頭に皇軍が勇しく敵陣地に突進してゐる光景。この韻文の第二節がこれにあたる。

(8) 教　具　特に必要なきも、學習資料として、天皇旗・軍艦旗・軍旗等を示せる繪畫・寫眞等あらば、與へてよい。

二、教　材　觀

(1) 軍旗は天皇のシムボルである。軍旗といふ形は西洋のものであるとしても、その精神は我が國古來の傳統で

ある。從つて軍族の意義は西洋諸國と我國とでは全く異つてゐる。卽ち西洋に於て、軍族は神より授けられたもの――神のシムボルであるに對して、我國に於ては何處までも天皇御親授のもの――天皇のシムボルである。

故に軍族を護るといふことは、天皇を護ることであり、軍族の下に死すとは、天皇のために一命を捧ぐるの所以である。

本課はこの意味で、國家的意識、日本精神を「軍族」といふ具象的なものによつて明かに歌ひ出したものと見てよい。

(2) 歌は四聯より成り、一聯は五・七・五・七・七・七の輕快な中にも、一種の嚴肅さをもつたリズムである。

第一聯　軍族は天皇御親授のものであること
（尊い軍族、尊い軍族）

第二聯　天皇の居らるゝ所、戰は必ず勝つ
（しるしの軍族、しるしの軍族――シムボル）

第三聯　軍族の名譽
（ほまれの軍族、ほまれの軍族）
――「たまに破れて、戰のてがらをかたる」に軍族の永遠性が存する。（これ軍艦旗と異る所）

第四聯　此の歌の成因（拜せよ軍族）
卽ち今目の前を過ぎ行く軍族を拜する人々の心持を描いたものが第一聯より第三聯までの歌と見てよい。

三、指導觀

(1) 嚴かな喇叭の響きが聞え、今我々の目前を軍族が通る――思はず觀衆の口をついて出る「軍族々々。」その軍族といふ聲がこの讀文の題となり、この題の內容、卽ち思はず口をついて出た聲の響の泉を探つた時、それは「尊い軍族」「しるしの軍族」「ほまれの軍族」によつて現はされた日本國民としての誰しもが持つ感激・歡喜の心情であらう。

此の讀文を讀むことによつて、軍族に對する兒童の歡喜・憧憬の心の中に、この尊い意義を自覺させることが重要である。

四、指導の實際

A　讀書時間　三時間

第一時　全文　語句の意義を中心として

第二時　全文　各聯の中心を統一して

第三時　練習

B　指導要領

第一時

(1) 本時の全體

○全文の通讀及書寫、語句の意義を中心として、大體どんな事が歌はれてあるかを明かにする。

○此の歌がどんな時に歌はれたものであるかを明かにする。

(イ) 通　讀
(ロ) 話　合
「「軍旗」について兒童の經驗・觀念の整理。
「この歌はどんな時の歌か」――今目前を過ぎ行く軍旗を拜しての歌だといふこと――等について話合をする。
(ハ) 書　寫
全文の書寫及び通讀
(ニ) 探　究
書寫（教師は板書）したものについて、各聯の語義を明かにし、
第一聯では「天皇陛下、御手づから授け給うた」
第二聯では「皇國のために進む兵士のしるし」
第三聯では「たゞに破れて戰のてがらをかたる」
の事實を解らせる。
(ホ) 通　讀
第二時
(1) 本時の主眼

各聯の中心を統一して、軍旗の意義を明かにし、「尊い」所以を十分に納得させたい。
(2) 指導過程
(イ) 通　讀
(ロ) 話　合
前時の主眼を復習。
(ハ) 通　讀
(ニ) 深　究
問答によつて、
「尊い軍旗」の一語を抑へ、その內容として、
「尊い軍旗」・「しるしの軍旗」・「ほまれの軍旗」の三句を取り、その所以を歌について復習し、更に結びとして
「拜せよ軍旗」の一句をとつて、國民的な感情に浸らせたい。
(ホ) 暗　誦
第三時
(1) 本時の主眼

全文の暗誦、文字語句の練習應用及び練習文等

五、練　習

(1) 練習文　　名譽の聯隊旗

かねこくも、天皇陛下が、[illegible]。
「お前達軍人は力を合せ心を一にして、ますます軍隊の力をあらはし、我が大日本帝國を守れよ。」
と、おほせになり、御手づからしたしく軍旗をたまはるのであります。聯隊長は、
「ちかつて、充力をつくして、國をおまもりいたします。」
と、お答へ申していただくのであります。
旗ざをの先には、菊の花の御もんがかがやいてゐます。第何聯隊としるされてある文字は、天皇陛下がお書きになつたのであります。へりのこいむらさきのふさは、皇后陛下が、御手づからぬはせたまふたのであります。
このたふとい軍旗をあふぐ時、我が陸軍は、じつに天皇がしたしくひきいられる軍隊であることをふかく感じます。
ですから、此の軍旗を天皇陛下として、この上もなく、たふとぶのです。つゞけきの時、聯隊長は軍旗とともに、敵ぢんをつきやぶるのです。そして、たとへ聯隊がぜんめつするやうなことがあつても、軍旗は守りとほすのであります。
外國の軍旗には、かうしたたふとさがありませんから、古くなれば、新しいのと取りかへますが、日本の軍旗はきれがさけても、色がさめてもとりかへるといふことはありません。はげしい戰にもびくともだんぐわんの中をくゞつて、きれがぼろぼろになり、まわりのふさがわれかと、さをだけがのこるやうになるほど、そのたふとさはまし、めいよは一そうかがやくのであります。

(2) 指導過程（省略）

イ、軍旗と軍艦旗と國旗とを描きなさい。
ロ、此の詩が暗誦・暗寫が出來るまでによく讀み書きしなさい。
ハ、此の詩をお話の文に書きなさい。
ニ、軍旗についての勇ましい物語をどなたかにお聞きしなさい。

(3) 考査問題

イ、つぎの問に答へなさい。

○軍旗はなぜ尊いのですか。
○軍旗は何のしるしですか。
○軍旗にはどんなほまれがありますか。

ロ、軍旗・軍艦旗・國旗について、私たちはどうしなければなりませんか。

ハ、つぎの□□の中に言葉を入れなさい。

○軍旗は、かしこくも□□□□が御手づから、授け給ふたものであります。
○軍旗は、身をすてて、皇國のために、□□□に進む□□のしるしです。
○軍旗はみだれ飛ぶたまに破れて、□□をかたつてゐます。

十一　牛　か　へ

一、教　材

(1) 教　材　十二　牛　か　へ　・新出漢字　——讀書漢字(イ)(ロ)……資料解說

これまで家に居た時は、鼻がまつ黑で、後足の足先と尾の房の所だけが白い、まことに美しい牡牛でした。買つた時は、子牛で、私し、時時引出して、草をたべさせに行つたこともありましたが、近頃では、あまり大きくなつて、私などの手にをへないやうになりました。それで、父は、子供にあぶなくもあるから、乳牛にかへたいと言つて居ました。

きのふ、ばくちうが、若い乳牛を連れて來ました。角の形といひ、體のかつかうといひ、申分のない良い牛です。

大そうみんなの氣に入りましたが、かへるとなると、大分金を出さればなりませんでした。

父が、「まあ、考へて見ふう。」と言ひますと、ばくちうは一たん歸りました。私どもがあまりほしがつたので、父も、「來二後變ればよい。今年は、思つたより豊年だつたから、思ひ切つて、向かふの言ふ通りに金を出さう。」と言ひました。

今日、又ばくちうが來ました。さうして、とう〳〵取りかへることになりました。

牛小屋から、これまで飼つて居た牛を引出した時には、急にかはいさうになりました。父や兄は、牛の體をきれいにして、新しいくつをはかせてやりました。

母は、わざ〳〵麥を煮て、たくさん食はせました。

母は、ばくちうに向かつて。

「私のうちでは、此の牛を、うちの者同樣にして、かはいがつて居たのですから、どうぞ、よい所へやつて下さい。」

と、「農夫も農夫も、たのみました。」◎巻頭[illegible]
ばくらうが牛を連れて歩りかけると、うち中の者は、みんな、門口に立つて見送りました。
「もう。」と一聲鳴いた時には、母も姉も、涙ぐんでゐました。

(2) 教　材　なし。

(3) 連　絡　本巻の特色である農村に取材した教材の一つである。三、村祭　五、稲刈　七、山羊　などと相關聯した農村情調があり、編纂者の農村觀の一端もうかがはれる。

(4) 新出漢字及表記

(イ) 體(カラダ)　牡(オス)牛　牝(メス)牛　角(ツノ)　形(カタチ)　歸(かへ)りました
二俵(ヘウ)　豊(ホウ)年　煮(ニ)て　同(ドウ)様　門(カド)口

(ロ) 略字——體(体)　歸(帰)　豊(豊)

(5) 語句　まことに美しい　手にをへない　ばくらう(博労、馬喰と書く。(1) 馬を賣買するを業とする者の稱
(2) 支那、古の伯樂の轉訛、伯樂とは古の善く馬を御した人の名。莊子音藝「伯樂姓孫、名陽、善馭馬。」とある。)
申分のない　うちの者同様　涙ぐむ

(6) 文　章　口語の崇敬體で、純朴な農村人の心情のよく現れてゐる文である。

(7) 挿　絵　「ばくらうが牛を連れて歩りかけると、うち中の者は、みんな、門口に立つて見送りました。」と
いふ一場面である。六十六頁が作者の一家族。六十七頁はばくらうと牡牛である。「もう」と一聲鳴いたのはこの時である。母も姉も涙ぐんだのもこの時である。愛別離苦の心を抱いて見送つてゐる人々の心持を想像させたい。

牛の足には兄のはかせた新しいくつが見えるのも注意させたい。指してゐる姉の傍にゐるのが作者で一番後に立つてゐるのが兄である。母の背にねるのは弟。

(8) 教　具　必要なし。

二、教　材　觀

本課は尋常小學讀本巻六「牛かへ」を採つたものであるが。

(1) 農家の生活の一風景が如何にも鮮やかに描き出されてゐる好箇の生活教材である。
一編の重點は、動物愛の發露であるが、然も牛に寄する情愛を中心として貫かれた家庭愛の情調が眞によく表現されてゐる。

(2) 一編の構成は二つの部分から成立してゐる。
前半は　牛かへをするに至つた經過
後半は　牛に寄する人々の愛情
從つて前半は農村生活を背景にして牛かへの事實を叙述したのに對して、後半は溢らざる感情の表現である。
後者に重點の置かれてあることは勿論である。

(2) 舊國語讀本巻十「馬市見物」にもかうした心持の表現があるが、「馬市」そのものの説明が多くて、心情の表現が卒直に響いて來ない憾みがあつた。それに比して本課は端的に心情が流露されて居り、從つて讀む者の心に涙ぐましいまでに迫つて來る力がある。

三、指　導　觀

(1) 「私のうちでは、此の牛を、うちの者同様にして、かはいがつて居たのです……」といふ母の言葉は、その儘、この牛に對する一家の者の眞情であつた。今は手にをへないやうになつたとは言へ、子牛の時から丹精して育てあげた牛である。然も「もう」と一聲鳴いただけで、默々として運命の手に隨順しく行くその後姿を見送つた時、一滴の涙を禁じ得なかつた者は、獨り母や姉のみではなかつたであらう。

田園生活の斷片に輝く淨らかな情愛の世界を、兒童の心に描き出して、しみ〴〵と共感させなければならない。

(2) 地方によつて、特に都市の兒童には、「牛かへ」といふ事實は解らないであらう。之は文章を通してその意味を知らせると共に、「ばくらう」といふ言葉の意味なども、はつきりさせる必要がある。

四、指導の實際

A 配當時間 四時間

第一時 全文通讀

第二時 最初から六十七頁一行まで

第三時 六十七頁二行から最後まで

第四時 練習

B 指導要領

第一時

(1) 本時の主眼

全文の通讀を主として叙述の内容を讀ませる。

(2) 指導過程

(イ) 通讀

(ロ) 話合

兒童の讀み得た點から「牛かへ」とはどんなことをするのかを明かにし、本文を讀んで得た兒童の感想を自由に發表させる。

(ハ) 通讀

(ニ) 探究

問答によつて、

美しい牡牛

牝牛にかへたい

ばくらう

若い牝牛

とう〳〵取りかへる

……

父や兄

母

姉

等の語を書取らせ、文章・挿繪に結びつけて、叙述の内容を明かにする。

(ホ) 通讀

(ヘ) 練習

第二時

(1) 本時の主眼

牛をかへるに至るまでの經過を明かにする

(2) 指導過程

(イ) 通讀（全文）

(ロ) 話合

前時のノートによつて復習。本時教材の範圍を定める。

(ハ) 通讀（本時教材）

(ニ) 探究

問答によつて、

これまでうちに居た牛

買つた時は子牛で

近頃では、あまり大きくなつて

私などの手にをへない

若い牝牛

申分のない良い牛

大そうみんなの氣に入りました

私どもがあまりほしがつたので

今日

等の語句を書取らせ、之を中心として、どうして牛をかへねばならなかつたか、どういふ風にしてかへたかといふやうな、主として、事實的方面を明かにする。

（ホ）通讀

（ヘ）練習

第三時

(1) 本時の主眼

牛に寄する一家の者の情愛の流露を感得させる。

(2) 教授過程

（イ）通讀（全文・前時教材）

（ロ）話合

（前時のノートによつて復習。本時教材の範圍を定める。

（ハ）通讀（本時教材）

（ニ）探究

本時教材の全部を書寫させ、（教師は板書によつて）全面に流露されてゐる動物愛と、之に附調する家庭愛との恩情に讀み浸らせたい。

（特に作者の「念にかはいさうになりました」の心持を中心に、母がばくらうに頼んだ言葉、更には「もう。」の一聲を耳にした時の一家の人々の涙ぐましいまでに溢るゝ情愛を、しみ〴〵と味得させ、共感させたい。（挿繪の利用を十分に）

（ホ）通讀

（ヘ）練習

第四時

(1) 本時の主眼

全文の朗讀練習。文字・語句の練習・應用。

(2) 教授過程（省略）

五、練習

(1) 練習文　海

し　け

鉛色の空は次第々々に低くなつて來ます。

風がひゆうとうなつて來るたびに、前の松は身をふるはせて、頭を地に着けさうにします。うちよせて來る波は、岩をかみ、小じやりをとばしては、さあつと引いて行きます。もとより舟は一そうも出て居ません。いつも通る汽船も、高波をよけて、沖を通ると見えて、汽てきの音に少しも聞えません。

冬時の海には、よくこんなことがあります。

こん女時には、

「これが五日もつゞくと、ひぼしだ。」

と言ふれふしのこえが、其所此所にします。

ね　ぎ

空もみどり、

海もみどり、

空につゞく海のみどり、

海につゞく空のみどり、

すみきつて、

かゞみとかゞみ。

沖ものどか、

讀ものどか、
神へ急ぐ兄の小舟、
讀へ歸る父の小舟、
すれ合つて、
ふがほとふがほ。

（尋常小學國語讀本）

(2) 家庭學習

（イ）三、村祭　五、稻刈　七、山羊　とくらべてよく讀みなさい。
（ロ）七、山羊　とくらべて、その心持のちがひを書きなさい。
（ハ）作者の心持のよく現れてゐる言葉を書きなさい。

(3) 考査問題

イ、つぎの文を讀んで問に答へなさい。

牛小屋から、これまで飼つてゐた牛を引出した時には、急にかはいさうになりました。父や兄は、牛の體をきれいにして、新しいくつをはかせてやりました。母は、わざ〳〵麥を煮て、たくさん食はせました。母は、ばくらうに向かつて、

「私のうちでは、此の牛を、うちの者同樣にして、かはいがつて居たのですから、どうぞ、よい所へやつて下さい。」

と、幾度も幾度も、たのみました。

○急にかはいさうに思つたのは、たれですか。

○父や兄は、どうしましたか。なぜ、さうしたのですか。
○母は、どうしましたか。なぜ、さうしたのですか。
○「うちの者同樣にかはいがる」とは、どのやうにかはいがることですか。

ロ、「申分のない」「わざ〳〵」「涙ぐむ」の言葉をつかつて短い文を一つづつつくりなさい。

ハ、可言イ手女糸木金石米　のへんのつく漢字を一つづつ書きなさい。

十三　笑　話

一、教　材

(1) 教材　十三　笑話　・新出漢字——讀巻漢字（イ）（ロ）……資料解說

（一）

或男が、友だちに向かつて、

「馬のやうに足の早い獸は、大てい、ひづめが二つにわれて居るやうだ。」

と言ひました。友だちは、「そんな事はあるまい。馬は、ひづめが一つだけれども、早く走るではないか。」前の男、

「馬は、一つでさへ、あれだけ早いから、二つあつたら、早くて仕方があるまい。」

友だちは、又、

「そんなら、牛はどうだ。」

前の男、いよ〳〵負けぬ氣になつて、「牛は、ひつめがわれてゐてさへ、あの通りおそい。一つなら、とても勝けまい。」

(二)

おばあさんが鍋を買ひに行きました。五十錢のでは小さ過ぎるし、一圓のでは大き過ぎる、どちらにしようと迷ひましたが、「五十錢のでよからう。」と、小さい方を買つて歸りました。

歸つてから、よく考へてみると、どうも小さ過ぎる。「大は小をかねるといふから、やつぱり大きい方にしよう。」と、もう一度金物屋へ行きました。

小さい鍋を返し、大きい鍋を受取つて、おばあさんが、もう五十錢拂はうとしますと、金物屋の主人、

「お金は、もういたゞかなくてもよいのです。」

と言ひました。

「どうしてですか。」

「さきづき五十錢いたゞいて、今五十錢の鍋を返していただきました。帳方で、ちやうど一圓になります。」

(2) 資料　なし。

(3) 連絡　此の種の「笑話」教材は、本課がはじめてである。

(4) 新出漢字及表記

(イ) 笑話(セウワ)　鹿(シカ)　鍋(ナベ)　圓(エン)　迷(マヨ)ひました　拂(ハラ)はう

主(シュ)人

(ロ) 略字　圓(円)

(5) 語句　ひづめ　負けぬ氣　とても　大は小をかねる　金物屋

(6) 文章　口語崇敬體と主とした文である。言葉はわかり易いが、主眼とする「笑」の意味が、此の期の兒童に味へるかどうか。

(7) 挿繪　なし。

(8) 教具　なし。

二、教材觀

(1) 前課のしみ〴〵とした沈靜な氣分を轉換しての、朗らかな笑の世界である。

(一) は、尋常小學讀本から採つたもので、題をつけるとしたら、「負け嫌ひ」とか「負け惜しみ」とかいふことになるであらう。實際世の中にはかうした負け嫌ひの人間があつて、傍觀者から見ると、かうした笑話の材料となつたり、「無理が通れば道理が引込む」といつた諺になつたりする。かうした人間に對する一種の諷刺とも見られる。

(二) は、錯覺を利用した考へ物的な笑話で、實際がうした事實が複雜化されると普通の人でも解らなくなつてしまふことがあるので、この笑話の持つ可笑味は、どこまでもその考へ物的な所に在る。

三、指導觀

(1) 笑話は理屈なしに笑ふことが本質である。よし其處に痛切な諷刺があり、尊い教訓があつたとしても、それは笑の後に、自ら反省せらるべきものであつて、最初からさうしたものをねらつたのでは笑は生れない。笑の生れない笑話の取扱は本質を逸したものである。特に三年の兒童を對象として、この笑話から諷刺とか教訓と

かを感得させるようにすることは不可能である。文章の内容が解って、兒童が笑くはそれで良い。

(2) (一) の笑話では、「らく〳〵負け惜しみになって」といふ男の心持が中心で、

「足の早い馬はひづめが二つにわれて居る」

「一つでもく、あれだけ早いから、二つあったら早くて仕方がない」

と、早いといふ言葉に誇力を上昇的に込めて行つたものが、

「牛は……あの通りおそい。一つなら、とても動けない」

と逆轉して降下した所に、矛盾した論理があり、さうした論理を踏みかさして、平穏と勝つたつもりでゐる所に笑が生ずるのである。

この男の負け惜しみな心と、そこから生ずる矛盾した論理をよく讀ませる。

(二) の笑話は、結局

「こつを五十錢いたゞいて、今五十錢の錢を渡していたゞきました。兩方で、ちやうど一圓になります。」

といふ主人の言葉に現はされた見方の誤謬にあるのであるが、兒童の中には、或は之が正しいやうに思つて笑外誤つた所に氣の附かぬ者も居るかも知れない。笑く物を解くやうな態度でその誤つた所が明かになるとやつと笑ひ出すのである。

四、指導の實際

A 讀書指導 三時間

第一時 (一) の取扱

第二時 (二) の取扱

第三時 讀書、補充文

B 指導案概要

第一時

(1) 本時の主眼

(一)笑話によつて、負け惜しみの男の矛盾した論理に可笑さを感ぜさせる。

(2) 教授過程

(イ) 通 讀 (本時教材)

(ロ) 話 合

「どこが可笑しかつたか」といふ質問で、兒童の笑の對象となつたものを自由に發表させる。

(ハ) 通 讀

(ニ) 研 究

二人の對話の部分を讀取らせる。即ち

「馬のやうに足の早い獸は、大てい、ひづめが二つにわれて居るやうだ。」

「そんな馬はあるまい。馬は、ひづめが一つだけれども、早く走るではないか。」

「馬は、一つでもく、あれだけ早いから、二つあつたら、早くて仕方があるまい。」

「牛は、ひづめがわれて居てもく、あの通りおそい。一つなら、とても動けまい。」

然しで、この對話を中心として、可笑味を吟味すると共に、二人の態度・面つき・語調など、色々に想像させて、可笑味を一層深めを出させたい。尚、この笑話に題をつけさせてみることも笑話の起因を明かにするための一つの方法であらう。

(ホ) 通 讀

(ヘ) 練 習

第二時

(1) 本時の主眼

(二)の笑話によつて、者〳〵物的な笑を發見させる。

(ニ) 指導過程

(イ) 通　讀（本時教材）

(ロ) 話　合

「どこが可笑しかつたか」の質問から、兒童の笑の對象となつた點を自由に發表させてみる。

(ハ) 通　讀

(ニ) 探　究

問答によつて、

鍋

「五十錢のでよからう。」

「大は小をかねるといふから、やつぱり大きい方がよからう。」

小さい鍋を返し、大きい鍋を受取つて、もう五十錢拂はうとしますと、

「さつき五十錢いたゞいて、今五十錢の鍋を返していたゞきました。兩方で、ちやうど一圓になります。」

の語句を書取らせ、主人の言葉を中心として、事實と結びつけ、思考の錯誤を解らせたい。尙主人の顏、如何にも、すまして、はつきりと言つてゐる樣子など想像させると、一層笑が深くならう。之も題を工夫させて見ると面白い。

(ホ) 通　讀

(ヘ) 練　習

第三時

(1) 本時の主眼

全文の復習、文字語句の練習應用、補充文

（本文を話方として發表させる）

(ハ) 指導過程（省略）

(1) 練習文　虎と蟻

大きな虎が山おくで、

「どうも分らないのは、あの弱い人間がわれわれの仲間を生けどりにすることだ。」

とひとりごとを言ひました。其の時、

「あはゝ。

と笑ふものがありました。虎が見まはしましたが、だれもゐません。

「だれだい、今笑つたのは。」

「私です。蟻です。」

なるほど、ごまつぶ程の蟻が一匹虎を見上げてゐます。

「何で笑つた。」

「だつて分りきつた事でせう。人間があなた方を生けどりにするには、いく人かで力を合はせるではありませんか。私ども

だつて、大ぜいしてかゝれば、あなた方に負けません。」

虎はおこつて、蟻をふみつぶさうとしました。蟻は虎の指のまたからくぐつて、仲間の者にあひづをしました。

さあ大へん、何千匹か何萬匹か、數かぎりもない蟻がまつ黑になつて、出て來ました。さうして虎の目、鼻、耳、口、所きらはず食ひつきました。頭のてつぺんから尾のさきまで、からだ中すき間もなく。

虎はうん〳〵うなつて、かけまはるより外、どうすることも出來ません。とう〳〵弱つて、蟻にあやまつたと言ひます。

（尋常小學國語讀本）

(2) 家庭學習

(イ) 卷五の十、逃げたらくだ　十四、舟の上とたゝみの上　とくらべて讀んでごらんなさい。

五、練　習

（ロ）家の人から、色々な笑話を聞いて、ノートに書きなさい。
（ハ）あなたのお友だちや、あなたにこのやうなことがあつたら、ノートに書きなさい。

(3) 考査問題

（イ）つぎの□の中へかなを入れなさい。
○馬は、一つで□、あれだけ早いから、二つあつたら、早くて仕方がある□。
○牛は、ひづめがわかれて居て□、あの通りおそい。一つなら、とても動け□。
（ロ）「いよ〳〵」「とても」のことばをつかつて、短い文を一つづつつくりなさい。
（ハ）つぎのかん字とはんたいの意味のかん字を書きなさい。

遠い——○い	寒い——○い	勝ち——○け	暗い——○かるい	弱い——○い
細い——○い	浅い——○い	買ふ——○る	攻める——○る	古い——○しい

十四　千早城

一、教材

(1) 教材　十四　千早城　・新出漢字——頭・井・漢字（イ×ロ）……資料解説

（イ）楠木正成（くすのきまさしげ）がたてこもつた千早城（ロ）は、けはしい金剛山（ハ）にあるが、まことに小さい城で、軍勢もわづか千人ばかり、これを問んだ賊は、百萬といふ大軍で、城の附近一たいは、すつかり人や馬でうづまつた。

こんな山城一つ、何ほどの事があるものかと、賊が城の門まで攻上ると、城のやぐらから大きな石を投落して、賊のまわぐ所を、さん〳〵に射た。賊は、坂からころげ落ちて、たちまち五六千人も死んだ。

これにこりて、賊は、城の水をたやして苦しめようとはかつた。

先づ、谷川のほとりに、三千人の番兵を置いて、城兵が汲みに来られないやうにした。城中には、十分水の用意がしてあつた。二日たつても、三日たつても汲みに来ない。番兵がゆだんをして居ると、城兵が切りこんで来て、焼きうばつて引上げた。正成は、此の旗を城門に立てて、さん〳〵に賊の悪口を言はせた。賊が、これをよけようとして賊のまわぐ所を射させて、又々五千人餘りも殺した。

高いがけの上から丸木を落させた。さうして、これをよけようとして賊のまわぐ所を射させて、又々五千人餘りも殺した。

此の上は、ひやうらう攻めにしようと思つて、賊は、攻寄せないことにした。

或朝、まだ暗いうちに、城中から割つて出て、どつとときの聲をあげた。賊は、「それ、敵が出た。一人ものがすな。」と押寄せた。城兵はさつと引上げたが、二三十人だけはふみとゞまつた。賊が、遠方からこれを目がけて押寄せると、城から大きな石を四五十、一度に落したので、又何百人か殺された。ふみとゞまつて居たのは、みんなわら人形であつた。

もう此の上は、何でもかでも攻落してしまへといふので、賊は、大きなはしごを作り、これを、城の前の谷に渡して橋にした。櫓が五米、長さが五六十米、其の上に、賊が剣先にと渡つた。今度こそは、千早城も危く見えた。すると、正成は、いつの間に用意して置いたものか、たくさんのたいまつを出して、これに火をつけて、櫓の上に投げさせた。さうして、其の上へ油を注がせた。橋は、まん中からもえ切れて、谷底へどうと落ちた。又賊は何千人か死傷した。

賊が、千早城一つなもてあまして居ると、方々で、官軍が、賊のひやうらうの旗をふさいだので、賊はすつかり弱つた。百人逃げ、二百人逃げして、始め百萬といつた賊も、しまひには十萬ばかりになつた。それが、又前後から官軍に割たれて、ちり〳〵に逃げてしまつた。

(2) 資料

本文は太平記巻七の「千剱破城軍事」の項に據つてゐる。

(イ) 楠木正成　吉野朝廷第一の忠臣で河内金剛山麓の郷士である。元弘元年後醍醐天皇の勅を奉じて諸侍に先んじて兵を擧げ、護良親王を河内の赤坂に迎へ奉り、又千早城に據つて北條氏の大軍を惱ましめ、能城半年、遂に降らず。かへつて幕軍に勝を起し、大勢一變、鎌倉幕府の滅亡を速かならしめた。幕府滅び後功をもつて河内・攝津の守に任ぜられた。後足利尊氏叛して京都を占領するや、北畠顯家の上洛を待つて力を合はせて敵軍を討ち都を回復したが、延元元年尊氏西國九州の大軍を率ゐて東上するや、湊川に進擊して退路をたゝれ一族と共に戰死した。その誠忠武略は當時すでに敵味方から歎賞された。贈從一位、別格官幣社湊川神社に祀られ、宮城前に騎馬の銅像を建てられてゐる。河内の觀心寺及金剛寺は吉野朝及楠木氏由緣の寺として正成の自筆文書を多數に藏してゐる。

(ロ) 千早城　千剱破城とも書く。楠木正成の據つた城。大阪府南河内郡千早村金剛山の南西麓にあつて極めて天險の地であつた。元弘二年正成こゝに城を築き、翌三年二月吉野・赤坂陷り、關東の兵悉く本城にあつまり正成を攻めたが、正成孤軍奮鬪よく防ぎ遂に拔くことを得せしめなかつた。其の後歴々楠木氏の一族がこの城によつたが、室町時代に入つてからは全く廢城となつた。

(ハ) 金剛山　大阪府と奈良縣との境上にある山。金剛山脈の一峯峯。後醍醐天皇の時、楠木正成此處に千早城を築き、賊軍を苦しめたので名高い。山頂に葛城神社、山腹に金剛山寺がある。西麓千早村から登路三軒にして至る。

(3) 連絡　本巻の所謂歴史的物語教材の一つである。一、神武天皇　六、日本武尊　十一、神風　につゞくものである。詳細は本書の一、神武天皇の本項、並に本課の教材觀を參照のこと。

(4) 新出漢字及表記　刊(チ)早城(ジャウ)　人殺(ギャウ)　金剛山(サン)　賊(ゾク)　附(フ)近　惡口(アクコウ)　餘(アマ)り　討(ウ)つて　輜(ハヽ)　刺(ワレ)　危(アヤフ)く　油(アブラ)　注(ツヽ)ぐ　死傷(シャウ)

(5) 難語句　たてこもる　けはしい　軍勢　賊　附近　何ほどの事があるものか　たちまち　とりる　水をたやす　谷川のほとり　一番兵　城兵　城中　用意　惡口　くやしがる　ひやうらう攻め　どつとときの聲　一人ものがすな　ふみとゞまる　わら人形　たいまつ　注がせた　死傷　ふさいだ　ちり〳〵

(6) 文章　口語常體の戰記である。簡潔な力强い筆致で、合戰の模樣が叙されてゐる。この文體は高學年に及んで文語體に移る一つの過程と見るべきであらう。

(7) 挿繪　賊軍が千早城を陷落する爲に最後に橋を作つて谷間に架し、それを渡つて進まうとした時に、正成はいつの間にか用意して置いた浮山のたいまつに火をつけて、橋を燒かうとしてゐる繪である。七十六頁が賊軍、七十七頁が正成方である。七十六頁に記された橋の大きさから、挿繪を觀察させ、一面、千早城がどんなに險阻なところにあつたか、此の地を選んで天下の大軍を引受けた正成の達眼用意の程をも偲ばせたい。

(8) 教具　特に必要なきも、學習參考資料の程度で、當時の國史地圖、正成に關する繪畫・寫眞の類を掲示すればよい。

二、教材觀

(1) 舊國語讀本卷六「千早城」を採つたもの。修正された點（文字等を別として）を比較してみると、

○七十三頁一行　「楠木正成がたてこもつた千早城」――從來のは「楠木正成が守つた千早城」

○七十三頁二・三行　「けはしい金剛山にあるが、まことに小さい城で、軍勢もわづか千人ばかり。」――從來のは「けはしい金剛山上にはあるが、まはりが一里にも足らず、總勢わづか千人ばかり。」

○七十三頁三・四・五行　「百萬といふ大軍で、城の附近一たいは、すつかり人や馬でうづまつた。」――從來のは「百萬騎といふ大軍で、城の四方二三里の間は人や馬でふさがつた。」

○七十五頁二行　「賊の惡口を言はせた。」――從來のは「賊を惡口させた」

○七十五頁八行　「賊は攻寄せないことにした。」――從來のは「賊は城へ攻寄せないことにした。」

○七十五頁九行　「まだ暗いうちに」――從來のは「夜明頃」

○七十六頁三行　「一人ものがすな。」――從來のは「一騎も餘すな。」

○七十六頁六行　「二三十人だけは」――從來のは「二三十人は」

○七十七頁一行　「城から大きな石を」――從來のは「城から大石を」

○七十七頁五行と六行との間に入るべき、

「賊はうまくはかられたのである。」の部分削除。

○七十七頁五・六行　「何でもかでも攻落してしまへ」――從來のは「しやにむに攻落さう」

○七十七頁八行　「はしごを作り」――從來のは「はしごを作つて」

○七十七頁九行　「城の前の谷に渡して」――從來のは「城の堀に渡して」

○七十八頁一行　「幅が五米、長さが五六十米」――從來のは「幅が一丈五尺、長さが二十丈」

○七十八頁四行　「置いたものか」――從來のは「置いたか」

○七十八頁六行　「油を注がせた」――從來のは「油をふりかけさせた」

○七十九頁一行　「ひやうらう の道を」――從來のは「ひやうらう道を」

○七十九頁二行　「賊はすつかり鯛つた。」――從來のは「賊は人馬ともにつかれた。」

○七十九頁二――五行　「百人逃げ、二百人逃げして、始め百萬といつた賊も、しまひには十萬ばかりになつた。それが、又前後から官軍に討たれて、ちり〳〵に逃げてしまつた。」――從來のは「百騎にげ、二百騎にげして、はじめ百萬騎といつた賊も、しまひには十萬騎に減じ、前後から官軍にうたれて、殘少になつて退いた。」

○書讀本は最後に

「正成は實にえらい人である。」の一句で結んであつたが、新讀本は全く之を削除した。（かうした抽象的な說明語は削除する方が至當であらう）

かくてこの修正點を比較する時、今回の讀本が表現上如何なる點に留意してゐるかゞ推察されよう。

(2)　「神武天皇」が我が國の建國史、「日本武尊」が皇威伸張史、「神風」が國家擁護史とすれば、本課は正に皇室擁護史として、前三者と共に我が國歷史上の大きな史實であると言つてよい。

然して、一面は兒童の英雄崇拜の心理から見て、異常な憧憬と感激とを齎す正成の人格（こゝでは主として知謀と勇武に富んだ）を與へたものであるといつてよい。

(3)　敍述の展開は、

一、賊の大軍、千早城を圍む。

二、大石を利用しての戰法（知略の一）

三、賊の戰法――水をたやす。

四、賊の旗を奪取（知略の二）

五、惡口を利用しての戰法（知略の三）

六、賊の計略――兵糧攻め
七、藁人形を利用しての戰法（知略の四）
八、賊の戰法――總攻撃
九、火を利用しての戰法（知略の五）
十、賊軍敗北

となり、正成が常に賊の戰法の裏を掠いて、計り知られぬ知謀を示し、遂に賊の大軍を潰滅させた痛快な物語である。

三、指導觀

(1) 將帥としての正成が、百萬の敵軍を向かふに廻して、戰略の秘術を盡くした痛快な物語に、兒童は思はず快哉を叫び、正成の知謀と勇武に一層の憧憬を覺えることであらう。

本課取扱の着眼も亦其處に在るのであるが、然し之が單なる傳說や神話と異つて、事實の基礎に立つた歴史物語である以上、ある程度まで明かにして置かなければならない事實があり、その事件の將來に暗示して置かなければならないものがあるであらう。

卽ち本課に於ては、

「正成は何故千早城にたてこもつたか」
「之を圍んだ賊とは何か」

といふ事實から、

「正成はその後どうしたか」
「賊はその後どうなつたか」

といふ將來の問題に、簡單でも觸れて置くことが、歴史物語としての本課に於ては大切なことであらう。

(2) 正成は何故かうした戰術を選んだか――卽ち敵を近くに引寄せて置いて潰滅させようとした戰術は、正しく地理的狀態によるので、さうした點を兒童に考察させて見ると、正成の戰法といふもの、知謀の深いことなど一層明かに想像出來よう。（この點は本文に賊が「攻寄せ」とか「押寄せ」とかいふ語が、五個所にも出てゐることでも想像が出來る）

四、指導の實際

A 配當時間　五時間

第一時　全文通讀
第二時　最初から七十四頁九行まで
第三時　七十五頁一行から七十七頁四行まで
第四時　七十七頁五行から最後まで
第五時　練習

B 指導要領

第一時

(1) 本時の主眼

全文の通讀を主として事件の展開を讀ませる。

(2) 指導過程

（イ）通　讀

（ロ）話　合

「千早城」という題目について、「誰の城か」「正成について名詞を知つてゐるか」「こゝを讀んでどんな人だと思つたか」「ここが面白かつたか」等について話合をする。

（ハ）通　讀

（ニ）研　究

問答によつて、各節から

1. 小さい城——千人ばかり
   城は百倍
2. 大きな石
3. 水をたやして
4. 城をうばつて
5. 櫓口を高はせ
6. ひやうろう攻め
7. わら人形
8. 櫓
9. ちのこに

等の語句を讀んで意味を、前後の關係を明かにする。

（ホ）通　讀

第三節

(1) 教材の研究

千早城がどんな城であつたかといふことから、敵味方の兵數、及び正成が城の防禦の策を講じて見事に敵の攻を破つたこと。

(2) 教授の順序

（イ）通　讀（全文）

（ロ）話　合

前節のノートによつて概要に教材の意味について復習し、本節教材の範圍を定める。

（ハ）通　讀（本節教材）

（ニ）研　究

問答によつて、

○楠木正成のたてこもつた千早城

○人々は何をうつまつた

○何はこの城があるものか

○城のそばの所

　城の水をたやして苦しめよう

○城中には十分水の用意がしてあつた

○敵はあゆめんして戻つた

○城をうばつて引上げた

等の語句を讀んで、之を中心として「正成が千早城に立籠るやうになつたわけ」を概要に理解すると共に、

「正成の籠城に巧みであつたこと」「用意周到であつたこと」及び「なぞ城を守つたか」といふことから正成の籠城の策々巧妙であつたことを、よく理解させたい。

（ホ）通　讀

（ヘ）研　究

第四節

(1) 教材の研究

（イ）通　讀（前節教材）

（ロ）話　合

前節のノートを中心として復習し、本節教材の範圍を定める。

（ハ）通　讀（本節教材）

（ニ）研　究

問答によつて、

○城の城を城門に立てて

○ゾキ上がつて攻撃する

○城ら方の上から

　城の上は、ひやうろう攻め

○まえ面ら中

○「それ城が出た」

○これを面白がつて見物する

城の城を守つて城を防ぎ、城人形を使つて城をおどかす。其の城主城の心情を察知してゐる正成の活躍ぶりを讀ませる。

(2) 教授の順序

（イ）通　讀（前節教材）

（ロ）話　合

前節のノートを中心として復習し、本節教材の範圍を定める。

（ハ）通　讀（本節教材）

（ニ）研　究

(1) ○ふみとどまつた○は

等の語句を書取らせ、之を中心として、正成の奇略と、敵の狼狽等を樣々に想像させたい。

（ホ）通讀

（ヘ）練習

第四時

(1) 本時の主眼

賊軍最後の攻撃も遂に空しく、四方から起つた官軍のために遂に散々となつて潰滅した樣子を讀ませる。この物語の最高潮點である。

(2) 指導要項

（イ）通讀（前時教材）

（ロ）話合

前時ノートによつて復習し、本時教材の範圍を定める。

（ハ）通讀

（ニ）深究

五、練習

問答によつて、

○何でもかでも攻落してしまへ

○今度こそは、千早城も危く見えた

○楠は、まん中からもえ切れて

○賊が、千早城一つをもてあまして居る

○賊はすつかり弱つた

○前後から官軍に討たれて、ちり〳〵に逃げてしまつた。

等の語句を書取らせ、文章及び挿繪に結びつけて本物語の最高潮點を味はせ、賊軍の潰滅に快哉を叫ばしめたい。

（ホ）通讀

（ヘ）練習

第五時

(1) 本時の主眼

全文の朗讀を主とし、文字・語句の應用練習。

(2) 指導要項（省略）

(1) 練習文　鎌倉攻

「極樂寺坂の味方があやふうございます。」

といふ使の後から、

「大將も討死されました。」

といふ使が來たが、總大將の新田義貞はびくともしません。手もとの軍ぜい二萬騎を引きつれて、ただちに極樂寺坂へ向ひました。

稻村崎の北方に着いて、賊のそなへを見渡しますと、北の山手には木戸を立てて、數萬の兵が之を守つてゐます。又南の海上にはひしひしと軍船を浮べて、岸には大木がきりたふしてあります。鎌倉へは海陸ともに攻めこむすきがありません。

義貞は馬から下りてかぶとをぬぎ、はる〳〵と海上を拜しました。さて、心の中に、義貞今天皇の御ためにいくさを起して、賊臣北條をほろぼさうとしてゐます。海神れがはくは潮を退けて、道を開かせたまへと念じて、黃金作の太刀を取つて、海の中に投入れました。

すると、これまで滿ちてゐた稻村崎は、其の夜の月の入る頃、二十餘町にはかに干上つて砂地にかはり、落ちて行く潮にさそはれて、賊の軍船はことごとく沖へ流れてしまひました。

義貞は之を見て、「ものども進め。」と、其の遠干がたな眞一文字に鎌倉まして攻めこみました。賊のそなへは忽ちくづれて防ぐにも防がれず、ただあわてさわいでゐます。

北の時義貞が方々へ火をかけさせますと、潮風が之をあふり立てたからたまりません。鎌倉は一面火の海になつて、賊の大將高時以下北條方は、此の火の中にほろびてしまひました。

(2) 家庭學習

（イ）一、神武天皇　六、日本武尊　一〇、神風　一四、千早城　の四つをよく讀みなさい。

（尋常小學國語讀本）

（ロ） 楠木正成のすぐれたはかりごとを一つづつ順に書きなさい。
（ハ） どなたかに國史上卷の楠木正成のお話をききなさい。
（ニ） 漢字二字の言葉の書取をしなさい。

(3) 考査問題

イ、つぎの文を讀んで問に答へなさい。

賊が、千早城一つをもてあまして居ると、方々で、官軍が、賊のひやうらうの道をふさいだので、賊はすつかり弱つた。百人逃げ、二百人逃げして、始め百萬といつた賊も、しまひには十萬ばかりになつた。それが又前後から官軍に討たれて、ちり〳〵に逃げてしまつた。

○千早城は誰の城ですか。どこにありましたか。そこには誰がたてこもりましたか。

○賊は、なぜ千早城一つをもてあましたのですか。

○「ひやうらうの道をふさぐ」といふのは、どうすることですか。

○官軍とは、どちらの軍ですか。賊軍といふのは——。

○百萬の大軍が、どうしてちり〳〵に逃げてしまつたのですか。

○楠木正成は、どのやうな人だと思ひましたか。

ロ、つぎのかなをかん字になほしなさい。

グンゼイ　タイグン　フキン　ヤマシロ　バンペイ　ジャウヘイ　ヨウイ　ジャウモン　アクコウ
タイボク　アルアサ　ワレサキ　シシヤウ　クワングン　ゼンゴ

ハ、つぎの文の□の中へ、終りのことばを一つづつ入れなさい。

○楠木正成は千早城に□□□。
○□□山城一つ、何ほどの事があるものか。
○□□□、敵が出た、一人ものがすな。
○もう此の上は、□□□□攻落してしまへ。
○賊は、千早城一つを□□□。

もてあました　何でもかでも　たてこもつた　こんな　それ

十五　た　こ

一、教材

(1) 教材　十五　た　こ

空は青空、
うなりをたてて、
あがる字だこに
きれいなゑだこ。

一つ二つと
かぞへて居れば、

・新出漢字——讀書漢字（イ）（ロ）……巻末解說

とびも出てまふ、
大空高く。
風は強いが、
空は晴れて、

鳴るよ、凧鋼が、
もう、ひる近く。

(2) 資料　特になし。

(3) 連絡　正月頃の郷土的風景の一つであらうが、背景が港になつてゐるところに、一つの味があらう。

(3) 新出漢字及表記　港（ミナト）　汽笛（テキ）

(5) 難語句　字だこ　ゑだこ　まふ　鳴るよ　ひる近く

(6) 文章　七を主調として叙景詩である。

(7) 挿絵　印象的な情調に富んだ絵である。この絵によつて一層この詩の情調を感得させたい。近景は樹林、松らしい樹枝の上に鳶が止つてゐる。林ごしに晴れた港が見え船が数艘浮んでゐる。空には字だこに絵だこ。何だかたこの唸りが聞えてくる様な動的な絵に見える。

(8) 教具　必要なし。

二、教材観

(1) 童謡的世界を持つた詩であるが、然し之れは凧揚げの遊びの喜びを歌ひ出したものではなくて、何處までも凧揚げの情景を描き出したものである。

即ち風寒い港の冬空といふ自然を背景として、正月の喜びを象徴する如く揚つてゐる凧の姿を静かに眺めてゐる態度から歌ひ出されたものである。

(2) 七七調の四節三聯。明るい中にも落ちついたリズムを持つた歌である。

第一聯　青い空に揚つてゐる凧の姿
第二聯　大空高く舞ふとびの姿　} 自然と人生との諧調。

第三聯　晴れた港に鳴る汽笛——自然と人生との諧調。眞にこの三聯を貫いて流るゝものは自然と人生との諧調であつて、その調べに静かに耳を澄ましてゐるのが作者の態度であるといつていゝ。

三、指導観

時は正月の雲近い頃。所は餘り大きくない港。冷たい程に澄んだ大空と、肌に冷たい風……かうした自然の背景を描いてこの大空に浮き出でた凧の姿。

さうした東洋畫的な一幅の絵を鑑賞させる態度でしみじみと味はせたい。

四、指導の實際

A　配當時間　二時間

第一時　全文鑑賞

第二時　練習　補充文

B　指導要領

第一時

(1) 本時の主眼

本時に於て本課全體の取扱を完了する。

（一）指導過程

（イ）通　讀

（ロ）話　合

「どこか」「いつか」「どんなほか」「どんな氣持がしたか」等の問を中心に話合をする。

（ハ）書　寫

全文書寫　通讀

（ニ）探　究

書寫（教師は板書）によつて、作者はどこにゐ

て、何を、どんな風に見、聞いてゐるかといふやうな吟味から、作者と共に、風あげの情景を靜かに味はしめたい。

（ホ）朗讀

第二時

（ハ）本時の全體

全文の暗讀と練習。及び補充文の取扱。

（ロ）練習問題（省略）

五、練習

(1) 練習文　小だこ

空に上つてゐるたこを見ながら、

「僕には出來ない。とばうとすれば、おちるにきまつてる。」

と小だこが言つた。

「まあ、とんでごらん。ためしにとばなきや、とべるものか。」

と大だこが言つた。

「だつて、こはいもの。」

と小だこが答へた。

「さうか、それなら、もうさようならだ。」

大だこはそのまま空へ行つてしまつた。

そこで小だこは、うらやましくて、

どうかして、とばうとかたをゆする。

はじめはこはかつた。でもだんだんに

ゆう氣がでてきて、すんすん上つた。

やがて大だこのそばまで行つた。

小だこはどんなにうれしかつたらう。

大だこのそばにならんだ時は、

すつとすつと下の地べたの上に、

子供たちのかげが小さく小さく見えた。

大だこと小だこは、しづかな空で、

高い高い空でゆつくりやすんだ。

ここまでくるのは、鳥と雲ばかり。

「ああ、うれしいな、ゆう氣をだしてためしたからだ。」

と、小だこは言つた。

（世界童話集）

(2) 家庭學習

イ、此の詩をそらで讀み書き出來るやうにしなさい。

ロ、あなた方の遊びを一月二月……十二月のじゅんにしらべてごらんなさい。

(3) 考査問題

イ、この詩を讀んでつぎの問に答へなさい。

○よいお天氣だといふことが、どこの言葉でわかりますか。

○何時ころでせう。それが、どうしてわかりますか。

○この詩をよむとつぎのうちのどんなかんじがしますか。あたらないものをけしなさい。

明かるい　にぎやかだ　あたかゝい　くもつてゐる　しづかだ　美しい　はれてゐる　ひろびろとする

ロ、この詩をそらで書きなさい。

十六　雪の夜

一、教材

(1) 教材　十六　雪の夜　・新出漢字　――讀答漢字(イ)(ロ)……資料解說

おとうさんは、火鉢にあたりながら、新聞を讀んで居られる。おかあさんは、ねてゐる赤んぼうのそばで、着物を縫つて居られる。

誰もだまつてゐるので、聞えるものは、かちかちといふ時計の音と、鐵びんの、しゆんしゆんといふ音だけである。

しばらくすると、おとうさんが、新聞を置いて、

「靜かな晩だなあ。」

と言はれる。

おかあさんが、

「さうですねえ。」

と言はれる。

ほんたうに靜かな晩である。外は、もう、人通りがないと見えて、ひつそりとして居る。

「今夜は、大分積るかも知れないぞ。」

と、おとうさんが言はれた。夕方から、雪が降出して居るのである。

「あしたは雪合戰が出來るでせうか。」

と、私が言ふと、おとうさんが、

「大丈夫出來る。さつきのやうなちやうしで降續くと、朝までには、すゐぶん積るよ。けれども、春雄、あんまり積つたら困るだらう、學校へ行くのに。」

「いゝえ、大丈夫です。どんなに積つても、僕は平氣です。」

「春雄は元氣だからね。」

と、おかあさんが笑はれた。

「おとうさん、もうどのくらゐ積つたでせう。」

「さあ、二階へ上つて、見てくるかな。どうだ、春雄。」

と言ひながら、おとうさんが立上られた。私も立上つた。

茶の間を出ると、急に寒い。

二階へ上つて、ガラス戸から外を見ると、全體が、何だか、ぼんやりと明かるい氣がする。さうして、屋根も、木も、道も、皆まつ白になつて居る。窓の前の電燈線が、白い、太いひものやうになつて居る。

もう十割も積つたらうか。雪は、まだ、ひつきりなしに降續いて居る。

向かふの門燈の光の前だけ、降る雪が、黑く流れるやうに見えるのもおもしろい。

(2) 資料　なし。

(3) 連絡　雪を題材とし又は背景としてゐる。教材は、本卷までにつぎの如し。

卷二――一四、ユキ　一五、雪ヨフレフレ　卷四――一五、すゞめ　二〇、北風と南風　卷六――一六、雪の

夜　一七、僅の宿

(4) 新出漢字及表記　火鉢（ヒバチ）　新聞（ブン）　合羽（カワセン）　全體（ゼンタイ）　窓（マド）　電燈（トウ）
　線（セン）

(5) 難訓句　ひつそり　雪合戰　ちやうし　平氣　電燈線　ひつきりなし　門燈

(6) 文　章　口語常體の描寫文で、雪の夜らしい靜かな和やかな情趣がよく現れてゐる。

(7) 挿　繪　門燈の光に降る雪の感じがよく現はれてゐる。雪の夜の靜かな情趣がよくこの繪によつてうかゞはれる。

(8) 教　具　必要なし。

二、教材觀

(1) 「雪の夜」の描寫文であるが、對象的に言へば、前段は雪の夜の家庭――家の內部を描寫したもので、後段は雪の夜の光景――降る雪の描寫である。
然も描寫の態度は、所謂自然主義的・客觀的な描寫の態度で、自然を自然として觀照し、存在を存在として眺めてゐる態度である。然し、その冷靜な描寫の底に流れてゐるものは、雪の夜といふ自然と、雪の夜を迎へて物語つてゐる家庭の人々――人生との交渉の姿であるといつていゝ。

(2) 大きく二分して、
前段　最初から八十五頁六行まで
家庭の內部の樣子――雪の夜を迎へて、靜かな家の中に、親子三人が暖かくも語り合つてゐる樣子。

後段　八十五頁七行から最後まで
外の樣子――降る雪の光景を描いた叙景。

三、指導觀

(1) 雪の夜を迎へて、靜かなうちにも和やかな家庭の樣子がよく表現されてゐる。言葉として、
○誰もだまつてゐるので、聞えるものは、かちかちといふ時計の音と、鐵びんの、しゅんしゅんといふ音だけである。（雪の夜の靜けさ。時計と鐵瓶との音によつて靜けさは一層はつきりとなる。）
○「靜かな晩だなあ。」（孤獨に堪へられない父の聲が呼びかけとなつて、母の應答となり、作者と父との對話となつて、靜かな中にも暖かい家庭愛が描き出されて來る。）
更に、外部の描寫としては、
○全體が、何だか、ぼんやりと明かるい（雪の降つた夜の明かるさ）
○電燈線が、白い、太いひものやうになつてゐる。
（軟かい感覺）
○光の前だけ、降る雪が、黑く流れるやうに見える。（光の陰になつた部分でもあらうか。行き屆いた觀方）
――然し果してこんな風に見えるものであらうか、特に兒童はこんな風に見るだらうか疑問――
(2) かうした文を通して、兒童の觀方にも次第に現はれて來るこの種の傾向の文の暗示としたい。

四、指導の實際

A　配當時間　四時間

第一時　全文通讀
第二時　最初から八十五頁六行まで
第三時　八十五頁七行から最後まで
第四時　練習　補充文

B　指導要領

第一時

(1)　本時の主眼

全文の通讀を主として、二段に分節せられること、各節の意味を明かにする。

(2)　指導過程

(イ)通　讀
(ロ)話　合

「雪の夜」といふ題目の意味から、どんな氣持がするかといふ樣な點を中心に話合をする。

(ハ)通　讀
(ニ)深　究

「どこの事を書いてあるか」といふ問から、二段に分れることを發見させ、問答によつて、

一、部屋
　おとうさん
　おかあさん
　赤んぼう
　春雄
二、外
　雪

を書取らせ、部屋の內部、外の光景がどんなであるかを大體讀み取らせる。

(ホ)通　讀
(ヘ)練　習

第二時

(1)　本時の主眼

雪の夜を迎へて、親子のものが靜か乍らも暖かさうに語り合つてゐる樣子を讀ませる。

(2)　指導過程

(イ)通　讀(全文)
(ロ)話　合

前時のノートについて復習し、本時教材の範圍を定める。

(ハ)通　讀(本時教材)
(ニ)深　究

問答によつて、

誰もだまつて居るので、聞えるものは、かちかちといふ時計の音と、鐵びんの、しゆんしゆんといふ音だけである。

「靜かな晩だなあ。」
「さうですね。」
ほんたうに靜かな晩である。
「雪合戰が出來るでせうか。」
「大丈夫出來る。けれども、あんまり積つたら困るだらう。」
「どんなに積つても、僕は平氣です。」
「春雄は元氣だからね。」

部屋を出ると、急に寒い。

等の語句を書取らせ、これを中心として、淋しい迄に物靜かな家の中、然も父と母と作者との對話によつて暖かさを醸し出してゐる樣子などをしんみりと讀みとらせる。

(ホ)通　讀
(ヘ)練　習

本時の文章を範として表現させて見ることもかうした文章には大切な作業である。

第三時

(1)　本時の主眼

なほ降り續いてゐる雪の鮮やかな描寫振りを讀ませる。

(2)　指導過程

(イ)通　讀(前時教材)

（ロ）話　合

前時のノートによつて復習し、本時教材の範圍を定める。

（ハ）通　讀（本時教材）

（ニ）深　究

本時教材の全部を書寫させ、特に

「全體が、何だか、ぼんやりと明かるい氣がする」

「屋根も、木も、道も、皆まつ白になつて」

「電燈線が、白い、太いひものやうに」

「雪は、まだ、ひつきりなしに降續いて」

「門燈の光の前だけ、降る雪が、黑く流れるやうに見える」

等の部分によつて、挿繪と結合し、雪の描寫のすぐれてゐる點を讀みとらせる。

（ホ）通　讀

（ヘ）練　習

第四時

(1) 本時の全讀

全文の朗讀及練習。補充文の取扱。

(2) 補充讀書（省略）

五、練　習

(1) 練習文　冬

「おかあさん、冬はなんのやくにたつの。寒いばかりだから、僕は、夏の方がすきよ。」

と、三郎が言ひ出しました。そして、ストーブによつてあたつてゐました。すると、おかあさんが、

「冬は大きい木や、小さい草などがやすむ時ですよ。お前のやうに、草も木も、やすまなければなりませんからね。お前がやすむことが出來ないと、病氣になるにちがひありません。生きてゐたり、だん〳〵大きくなつたりするものは、やすまなければならないのですよ。

春になるとね、お前が朝おきるやうに、草も木も目をさまして、いきいきしてきます。冬になるとね、しもがふつて、草や木をかからさうとするのです。けれども雪がふつて、上からかぶさつてゐるから、草や木のねもとは、あつたかくて、たつしやでゐるのです。」

とおつしやいました。それから、おかあさんは、寒い國のおはなしをなさいました。

「北の方の、もつと寒い國では、人がこほりや、雪でかこはれてゐる家の中で、冬中くらすのです。

あるけものは、雪の中にあなをほつて、その中にすんでゐます。かういふふうに、冬は大かたれてゐるのです。そして、春になると、たべ物をさがしに出ていくのです。

そればかりではありません。まだ〳〵おもしろいお話がたくさんあります。

けれども、ちよつと、あのまどのそとを、ごらんなさい。お友だちが大きな雪玉をつくつてゐるのが見えるでせう。」

と、おかあさんがお言ひになりますと、三郎は、

「やあ、おもしろいな。」

と言つて、寒さもわすれて、外へとびだしました。一しよになつて雪玉をつくりました。大ぶ長い間かゝつて出來上ると、ころばしかけました。みんなの力で大きな雪玉がうごき出しました。ほかほか、からだがあつたかくなりました。

「あゝ、冬ばほんとうに、いゝ時だ。僕は、いつでも冬であつてほしいと思ふよ。」

と、三郎は言ひました。

道　踏　み

わらぐつ　　毎朝

はいて　　わたしは

踏むに　　踏るのです。

わたしが　　わたしは
ふめば　　しんけん
やはらかな　　ふむのです。
雪が
ぎゅう〜〜
鳴るのです。

白い　　わたしの
平らな　　踏んだ
雪の上　　足あとが
　　りつぱな
　　道と
　　なるのです。　　（相馬御風）

(2) 家庭學習

イ、卷二の一四、ユキ、一五、雪ヨフレフレ、卷四の一五、すゞめ　と此の文とをくらべて讀みなさい。

ロ、「霜の朝」「雨の夕」「月夜」「雪の朝」などといふ題で、このやうな樣方を書きなさい。

(3) 考査問題

イ、つぎの文の□の中へ、終りのことばを入れなさい。

○□といふ時計の音が聞える。

○□といふのは、火鉢の鐵びんの音である。

○雪の夜の外は、人通りがないと見えて□としてゐる。

○先ほどから、雪は、□降續いてゐる。

ひつきりなしに　　ひつそり　　かちかち　　しゆんしゆん

ロ、つぎのかなをかん字になほしなさい。

ヒバチ　シンブン　キモノ　コンヤ　ユフガタ　ユキカツセン　ガクカウ　ヘイキ　ニカイ　ゼンタイ

ヤネ　デントウ　モントウ　フリツヾク　シヅかなバン

ハ、つぎのかなのちがひをなほしなさい。

○誰もだまつている。○雪合戰が出來るでしやうか。○二階え上つた。○旗お持つてゐる。

ニ、つぎの言ひ方のちがひをなほしなさい。

○昨日は、山へ行きます。○明日は、川へ行きました。

十七　雀の宿

一、教材

(1) 教材　十七　雀の宿

・新出漢字　——讀替漢字(イ)(ロ)……資料解說

きのふから降積つた雪に朝日がさして、どこを見ても、きら〜〜と銀色にかがやいて居ます。じつと空を見てゐると、小鳥が、盛澤も盛澤も、悲しさうな聲で鳴きながら、飛んで行きます。あれは、雪のためにたべものが見つからないので、遠くへさがしに行くのでせう。早く、うちの雀の宿に來ればよいのにと思つて、裏庭へ行つて見ると、もう、數へきれないほど雀が集つて、ちゆうちゆう鳴きながら、うれしさうに朝御飯をたべて居ます。

うちの雀の宿といふのは、横に穴をあけた大きなへうたんや、古いつりどうろうなどで、それが、日當りのよいのき先に、幾

つもつるしてあるのです。其の中へ、御飯の殘りやお米などを入れて置くと、雀がたくさん寄つて來て、喜んでたべます。夜は、へうたんの中にねるのもあります。いつの昔から、かうしてあるのか、うちのおぢいさんの子供の時から、もう、これがあつたといふことです。一度こゝへ來た雀は、夫から夫へと友だちを誘れて來て、時には、何百羽ともわからないほど集ることがあります。こんな雪の朝などは、いつもよりたくさん來るので、いくら餌をやつても、すぐになくなつてしまひます。

けさやつた餌も、もう、なくなつたと見えて、集つて居る雀は、皆さびしさうにして居ます。私は、なるたけ、此のかはいらしいお客樣を驚かさないやうに氣をつけて、お米を入れてやりました。一度はぱつと飛立ちましたが、よくなれて居るので、すぐに又寄つて來ました。さうして、思ひ〳〵に、こつちのへうたんにはいつたり、あつちのとうらうに飛移つたりして、お米をたべます。中には、向かふの木の枝に、並んで止つて居るのもあります。おなかが一つぱいになつたので、仲よく日なたぼつこをして居るのでせう。

(2) 資料　特になし。

(3) 連絡　新讀本には、自然と人生との交錯を描く教材の一つとして、動物の生活を描き、又はその愛護に關するものが數多く取られてゐるが、その中愛護を現したものにつぎの樣なものがある。

卷一――コイコイ(四頁)　ハト(十一頁)　シタキリスズメ(三四頁)　ヒゴヒ(四四頁)　モ、タラウ(五四頁)

卷二――一六、花サカヂヂイ

卷三――三、うさぎ　六、ひよこ　九、うちの子ねこ　一八、キンギヨ　二四、浦島太郎

卷四――九、山がら　一〇、山がらの思出　一六、白兎

卷五――六、鯉ノボリ　九、動物園　一一、雪　二二、犬のてがら

卷六――七、山羊　一二、牛かへ　一七、雀の宿

(4) 新出漢字及表記　雀(スズメ)　宿(ヤド)　群(ムレ)　朝御飯(ハン)　穴(アナ)　餌(エ)

(5) 難語句　銀色にかゞやく　裏庭　つりどうろう　さびしさう　なるたけ　日なたぼつこ

(6) 文章　口語崇敬體の文章で、女兒らしい素直な心持で讀まれる。

(7) 挿繪　古い燈籠や瓢箪を軒下につるして雀の宿としてゐる繪。雪の爲に餌を失つた雀がこの燈籠や瓢箪にむれ集つてゐるところ。作者であるこの少女がそれを懷しげにいとしんで見てゐる。

(8) 教具　必要なし。

二、教材觀

(1) 尋常小學讀本卷八「雀の宿」を採つたもの。

生活教材の一種で、雀に寄する情愛――所謂「動物愛」の表現である。

動物愛の教材は可成りに多量に採られてゐる。然しその多くは、自分の家に飼つてある牛とか、犬とかいふ樣な動物に對してゞあるが、本課は「雀」といふ野外の小鳥に對する愛情の發露である。

かうした生活はかなり古い時代からあつたもので、現在でも京都の伏見あたりでは殘つゐるとのことである。

都市に於ては、空氣銃を肩にして、庭の枝に羽を休めてゐる雀を打つ人は多いが、田園にはその雀――然も時には田畑の作物を荒し廻る惡戲者――に對して、わざ〳〵餌の宿を與へてやるといふ暖かい心づくしが殘つてゐる。

都市生活の教材は、發達した文化を理解させるだけでいゝが、田園生活の教材は、その生活精神を味得させねばならぬと編纂者が言はれるのもこの邊に存するのではあるまいか。

(2) 表現の態度としては、前課「雪の夜」が自然主義的客觀的であるとすれば、本課は浪漫主義的・主觀的な態度であるといつてよい。

前者は自然・存在を有の儘に觀、描いてゐるに反して、後者は自然・存在に精神的な意味を與へ、自己の感情の表出として描き出してゐる。

三、指導觀

(1) 雪の朝、食物の少い雀のために雀の宿を作つてやる人の暖い愛情、雀が宿に來て囀しさうに餌を啄む姿に自からもまた無限の喜びを感じてゐる作者の純情——かうした美しい情愛の世界に浸らせて、兒童の共感・共鳴を呼び起したい。

(2) かうした慣習の無い兒童にとつては、文章の上から雀の宿とはどんなものであるかといふことの理解から、雀の宿を作つてやる人の美しい心境を思はせなくてはならない。

四、指導の實際

A 配當時間　三時間

第一時　全文取扱　「雀の宿」といふ內容を中心として

第二時　全文取扱　作者の情愛を中心として

第三時　練習　補充文

B 指導要領

第一時

(1) 本時の主眼

全文の通讀を主として、「雀の宿」とはどんなものかといふことを明かにする。

(2) 指導過程

(イ) 通讀

(ロ) 話合

「雀の宿」といふ題目を中心として、讀み得た點を自由に發表させる。

(ハ) 通讀

(ニ) 探究

問答によつて、

雀の宿

（うたん
（つりどうろう
（御飯の殘り
（お米

いつの昔から、

一度こゝへ來た雀は、

等の語句を書取らせ、挿繪と結合して、「雀の宿」とはどんなものか、どうして作つてやるのかといふやうなことを明かにする。

(ホ) 通讀

(ヘ) 練習

新字の書方指導

第二時

(1) 本時の主眼

雀に寄する作者の情愛を表現の上から味得させる。

(2) 指導過程

(イ) 通讀

(ロ) 話合

前時のノートによつて復習し、本時學習の着眼を定める。

(ハ) 通讀

(ニ) 探究

作者がどんなに雀を可愛がつてゐるか——といふ

「はて、何だろう。」

と思って、はりつけて見ますと、まあ、こりゃどうだ。いろの白いあかんぼうに、大きな竹の子が、ゆかいだかるそうに、くちもとをほころばして、にこにこ笑っているのでした。

「おお、おお、竹の子らや。蔵の中に竹の子がかくれていたのか。」

真貫さまは、すっかりうれしくなってしまって、竹の子をへやにもって、いたのかわるくもないようにしました。

そのよく朝、真貫さまが目をさましてみると、竹の子は、蔵のまえに、にょきにょきと三本のびていました。それからの真貫さまは、たべたくてたまらないくらいでした。朝は、いっぱいのおかゆに、竹の子のにもの、昼は、竹の子のやきもの、夜は、竹の子のにもの、竹の子ばかりでした。

三尺、三尺と、どんどんのびていった竹の子は、十日あまりのうちに、てんにとどくほどになりました。それから、真貫さまは、天にとどくほどのおおきなかりとりをしてしまって、竹の子がいっぱいのびるまえに、ちゃんとかりとりをしました。

そして竹の子は、ゆかしくあらかわされる上まで、すっかりこのびて、蔵のまえに、まるで一本のにじんがたちにはりまして、真貫さまは、それを朝夕だけでなくいつでも、ながめては、ほくそえんでいました。

（真貫さま）

五、練　習

(1) 語句と文の練習

イ、これまで読んで、動物をかけらがつたない々のお話をならいました。第一からじゅんじゅんにさがしなさい。

ロ、第一からじゅんに、読んだ動物の名を「鹿」「鳥」「兎」「竹」「その他」にわけてかきなさい。

ハ、「年の海」をよんで、女の子供らしい言葉づかいや心持のあらはれてゐるところを書きなさい。

ニ、「いはめの海」「小鳥」などの文から、つぎのおきつべなさい。

(2) 音読練習

イ、つぎの文を読んで問に答へなさい。